

ISSN 1881-6770

横浜美術館

研究紀要

第 26 号

# Bulletin of Yokohama Museum of Art No.26

---

# Bulletin of Yokohama Museum of Art No.26

横浜美術館 研究紀要 第 26 号

Bulletin of Yokohama Museum of Art No.26 2025

---



---

# 目次

---

---

## 横浜トリエンナーレと横浜美術館の間に補助線を引く —横浜美術館で横浜トリエンナーレを開催するようになった 経緯とその後

帆足 亜紀 | 7

### How Yokohama Museum of Art Became the Hosting Institution of Yokohama Triennale: An Overview of Its Process

Hoashi Aki | 79

---

## 大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群に見る イサム・ノグチと大谷幸夫による設計過程—中 原案の変更と未完に終わった三位一体のランドスケープ・デザイン

中村 尚明 | 31

### Isamu Noguchi and Sachio Otani's Playground and Children's House at Kodomo No Kuni: Alterations to the the Original Design and the Unfinished Landscape Design Combining Three Facilities

Nakamura Naoaki | 80

---





PL.1 椿昇+室井尚《飛蝗(プロジェクト・インセクト・ワールド)》2001年  
撮影：黒川幹夫 写真提供：横浜トリエンナーレ組織委員会



PL.2 ウーゴ・ロンディノーネ《月の出、東》2005年 協力：the artist and Galerie Eva Presenhuber, Zürich  
©the artist 撮影：木奥恵三 写真提供：横浜トリエンナーレ組織委員会





PL.3 イサム・ノグチ、大谷幸夫《こどもの国児童館・A地区児童遊園 002配置図》(配置図原図1)、作図：大谷研究室(旧設計連合)、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、78.5×108.0cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群(撮影論者)  
 Isamu Noguchi, Sachio Otani (002 Site Plan of Playground and Children's House, Zone A of the Kodomo No Kuni) (First Original of the altered Site Plan)  
 Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1966, pencil, ink on tracing paper, 78.5×108.0cm, YMA (Yokohama Museum of Art) Otani Associates  
 Kodomo No Kuni Collection (photo by the author)

# 横浜トリエンナーレと横浜美術館の間に補助線を引く —横浜美術館で横浜トリエンナーレを 開催するようになった経緯とその後

帆足 亜紀

日本における現代美術の大規模国際展の草分けとして知られる横浜トリエンナーレ。横浜美術館を会場に行われるようになってすでに13年が経過している。しかし、第1回から横浜美術館がかかわっていたわけではない。横浜トリエンナーレは、もともと外務省の外郭団体である特殊法人国際交流基金(以下、国際交流基金<sup>1)</sup>)の主導のもと2001年に始まった文化事業である。横浜市はその開催都市として第1回からかかわってきたが、第3回まで開催したところで大きな組織体制の変更を強いられる。その結果、2011年の第4回以降、本事業は横浜市と公益財団法人横浜市芸術文化振興財団(以下、芸文財団)が主導するものへと衣替えする。

横浜トリエンナーレは「横浜トリエンナーレ組織委員会」(以下、組織委員会)という任意団体が主催する事業である。組織委員会は現在、横浜市、芸文財団、朝日新聞社、NHKの4者で構成され、事務局を横浜美術館内に置いている。横浜トリエンナーレの記録は組織委員会が制作する公式のカタログ、記録集、アーカイブ映像の形で広く公開されており、組織委員会内では引継ぎのために内部報告書を毎回作成し、事業を総括している。しかし、第1回から第3回までと、第4回以降とで組織委員会の主要な構成員が入れ替わったため、国際交流基金から横浜市へ事務局が移行した時期の状況については、断片的な記録しか残っていない。

そこで、本稿では、それらの断片をつなぐために補助線を引きながら、表から見えにくくなっていた全体像の輪郭をなぞることを目標とする。まず、最初に組織委員会の事務局を横浜美術館に設置することになった経緯および国際展の運営を横浜美術館で受け入れてきた過程をたどる。そして、組織委員会の記録では詳しく記されていない、横浜美術館内の組織の推移と美術館の視点から見た横浜トリエンナーレという事業について触れる。最後に課題をまとめ、今後の展望を述べたいところではあるが、そのためにはさらに別の論考を加えて検証しなければならない。そこで、まとめに代わり、横浜トリエンナーレと横浜美術館を接続するために今後検討すべきポイントを挙げるに留める。

本稿を進めるにあたっては、横浜美術館を展示専門の「施設」と学芸員やエドゥケーターなど専門家が所属する「組織」のふたつの側面から検証する。

## ●横浜トリエンナーレとは？

横浜トリエンナーレは3年に1度、横浜市中区で開催される現代美術の国際展である。第1回の横浜トリエンナーレが行われたのは2001年。その前年の2000年には第1回「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」が始まっていた。どちらもイタリア語で「3年に1度」を意味する「トリエンナーレ」という名称を冠し、原則3年に1度、定期的に行われている大規模な展覧会である。



このふたつのトリエンナーレを比較する際に横浜トリエンナーレを「都市型」、越後妻有アートトリエンナーレを「里山型」と分類することが通例となっている<sup>2</sup>。また、同じ「トリエンナーレ」という名称を使いながらも前者は「国際展」を、後者はその名称のとおり「芸術祭」を標ぼうしている。

「トリエンナーレ」というイタリア語の事業名は、ヴェネチア・ビエンナーレに由来する。ヴェネチアで行われている2年に1度開催される大型国際展を「ビエンナーレ」と呼称する例に倣い、3年に1度開催する国際展の名称にもイタリア語の「トリエンナーレ」を引用している。「ヴェネチア・ビエンナーレ」は、もともと、イタリアのヴェネチア市で、衰退するまちを危惧した市長が近代化と活性化をはかる都市政策の一環として構想し、1895年に発足した文化事業である<sup>3</sup>。現在では、国別のパヴィリオンが会場に並び、各国が独自に作家や作品を選定し、国別対抗のような形をとっているため、文化芸術の「オリンピック」と言われたりもする。

ヴェネチアとともによく引き合いに出されるもうひとつの国際展モデルは、戦後開始された「ドクメンタ」である。こちらは、ナチス・ドイツが退廃芸術と称して弾圧した、20世紀の前衛芸術を回顧する展覧会として1955年に始まった。ドクメンタは、指名されたアーティスト・ディレクターがテーマ／コンセプトを構想し、作家や作品を自ら選定する、5年に1度の国際展として定着する。「都市型」の横浜トリエンナーレはこれを参照して、原則、「ディレクター」という肩書を持つ者に企画全体を任せる方法をとっている<sup>4</sup>。

対する「里山型」は、1980年にICOM(国際博物館会議)の元会長であるアンリ・リヴェールが提唱した「エコミュージアム」の定義にも一部通じる側面があるともいえる<sup>5</sup>。しかし、アートを紹介して、社会課題の解決につなげている点では全く別のものである。「里山型」は越後妻有アートトリエンナーレの創設者でアートディレクターの北川フラムが構想した日本独自のモデルであるといえるだろう。「都市型」が毎回ディレクター職に異なる人材を迎えるのに対して、日本で開催されている「里山型」は北川自身がディレクションしているものが多い。

## ●横浜美術館が会場になるまで

### 一はじめに会場問題ありき

横浜トリエンナーレは1997年に外務省が国際美術展の定期開催を決定し、1999年に横浜トリエンナーレ組織委員会(当時の構成員は国際交流基金、横浜市、NHK、朝日新聞社)を設立して始まった。2001年の第1回から2024年の第8回までの開催実績は表1のとおりである。ここでは主に横浜美術館が会場になるまでの経緯を振り返る。

横浜トリエンナーレの開催が検討されていた1990年代、東アジアでは国際展が各地で行われるようになっていた。1995年に韓国の光州市でアジア最大規模の国際展「光州ビエンナーレ」が発足。1998年には台湾の台北ビエンナーレ、2000年には中国の上海ビエンナーレがそれぞれ国内の作家や関係者を中心とした展覧会から、海外を拠点に活動するキュレーターや作家がかかわり、世界を視野に入れた国際展へと転換する。横浜トリエンナーレは、1990年代の近隣諸国の国際展の動向を鑑みて、アジアで遅れをとったという問題意識のもとに開催の機運が高まり、実施に至った<sup>6</sup>。

この「国際美術展」が構想された当初より、横浜市がその会場に決まっていたわけではない。横浜市は、外

[表1] 横浜トリエンナーレ開催実績

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回
開催年	2001	2005	2008	2011	2014	2017	2020	2024
テーマ	メガ・ウェイブ ー新たな総合に向けて	アートサーカス [日常からの跳躍]	TIME CREVASSE ータイムクレヴァスー	OUR MAGIC HOUR ー世界はどこまで 知ることができるか?ー	華氏451の芸術: 世界の中心には 忘却の海がある	島と星座とガラパゴス	AFTERGLOW ー光の破片をつかまえる	野草: いま、ここで生きている
ディレクター	アーティスティック・ ディレクター: 河本 信治 建畠 哲 中村 信夫 南條 史生	総合ディレクター: 川俣 正	総合ディレクター: 水沢 勉	総合ディレクター: 逢坂 恵理子 アーティスティック・ ディレクター: 三木 あき子	アーティスティック・ ディレクター: 森村 泰昌	ディレクターズ: 逢坂 恵理子 三木 あき子 柏木 智雄	アーティスティック・ ディレクター: ラクス・メディア・ コレクティヴ	アーティスティック・ ディレクター: リウ・デイン(劉鼎)、 キャロル・インホワ・ ルー(盧迎華)
会期	9月2日~11月11日 (67日間)	9月28日~12月18日 (82日間)	9月13日~11月30日 (79日間)	8月6日~11月6日 (83日間)	8月1日~11月3日 (89日間)	8月4日~11月5日 (88日間)	7月17日~10月11日 (78日間)	3月15日~6月9日 (78日間)
主会場	[2会場] パシフィコ横浜 展示ホール(C,D) 横浜赤レンガ倉庫 1号館	[1会場] 山下ふ頭 3号・4号上屋	[4会場] 新港ピア 日本郵船海洋通倉庫 (BankART Studio NYK) 横浜赤レンガ倉庫 1号館 三溪園 他無料3会場	[2会場] 横浜美術館 日本郵船海洋通倉庫 (BankART Studio NYK) 他無料2会場	[2会場] 横浜美術館 新港ピア	[3会場] 横浜美術館 横浜赤レンガ倉庫 1号館 横浜市開港記念会館 地下	[2会場] 横浜美術館 プロット48 (展示協力:日本郵船歴史博物館)	[3会場] 横浜美術館 旧第一銀行横浜支店 BankART KAIKO [無料会場] クイーンズスクエア 横浜 元町・中華街駅 連絡通路
参加作家数	109作家	86作家	70作家	77組 (79名、1コレクション)	65組 (79名)	38組1プロジェクト	69組	93組
総来場者数	約35万人	約19万人	約55万人	約33万人	約21万人	約26万人	約15万人	約58万人
有料会場 入場者数*	約35万人 * チケットは2日間有効 (連続しない日も可) * 未就学児無料	約16万人 * チケットは1日に限り有効 * フリーパスあり * 中学生以下無料	約31万人 * チケットは2日間有効 (連続しない日も可) * 中学生以下無料	約30万人 * チケットは1会場1日有効 * 中学生以下無料	約21万人 * チケットは1会場1日有効 * 中学生以下無料	約25万人 * チケットは1会場1日有効 * 中学生以下無料	約13万人 * チケットは1日に限り有効 * 中学生以下無料	約15万人 * チケットは1会場1日有効 * 高校生 (18歳) 以下無料
チケット 販売枚数	約17万枚	約12万枚	約9万枚	約17万枚	約10万枚	約10万枚	約6万枚	約6万枚
サポーター 登録者数	719人	1,222人	1,510人	940人	1,631人	1,474人	1,671人	1,389人
サポーター 会期中 のべ活動数	ー	ー	ー	1,340人	2,449人	3,289人	220人	1,126人

※ 有料会場入場者数は、有料会場の延べ入場者数

務省の決定を受けて会場を探していた国際交流基金が候補として挙げた都市のひとつに過ぎなかった。最終的に、いくつかの条件がそろい、横浜市が選ばれたが、その経緯について南條史生(以下、南條)は次のように説明している。

開催地が横浜に決定したのは、国際的で先進的な街のイメージが、日本から海外に向けて発信する美術展にふさわしいという理由が大きいですね。ほかに、首都圏の隣という地の利、自治体の受け入れ態勢、歴史や文化などが考慮されました。…(中略)…赤レンガ倉庫は歴史的な建築物で特徴もあり、この倉庫の存在も、横浜トリエンナーレの開催地として選ばれた理由の一つに数えられます<sup>7</sup>。

特に赤レンガ倉庫については、南條が「時間のおりを積み重ねたような古い空間の中でこそ新しいものが生きる、あの古びた雰囲気の中で全然違う空間としての異化作用みたいなものが生じてくるのではないかと、思います」と熱心に説明していることからわかるように横浜市で開催する意義を象徴する会場として期待が寄せられていた<sup>8</sup>。

国際交流基金はヴェネチア・ビエンナーレ日本館も主催しており、キュレーターやアーティストとのネットワークがある。横浜トリエンナーレを開催するにあたっては、国際交流基金が事務局を構えて、展覧会のコンテンツを企画・運営する役割を担い、横浜市は開催都市として会場を提供するという役割分担で事業を実施することになった。

第1回は、ニュートラルな大規模スペースとして「パシフィコ横浜展示ホール」、オルタナティブなスペースの雰囲気が漂う「赤レンガ倉庫1号館」ほか、1911年に開通した臨港鉄道が遊歩道となった「汽車道」などを会場にして行われた<sup>9</sup>。このとき、最も話題となり、横浜トリエンナーレの印象を決定づけたのが椿昇+室井尚の《飛蝗(プロジェクト・インセクト・ワールド)》である[PL.1]。全長50メートルに及ぶバルーン型の作品を港に臨むインターコンチネンタルホテルの外壁に展示したインパクトは大きく、四半世紀が過ぎたいまでも、横浜トリエンナーレといえば「バッタ」をイメージする人は多い。展示された場所は「横浜らしいランドマーク」、背景には「みなと」が見える。そして、何よりも「視覚的なインパクトのある作品」。これらの要素が相乗効果を生み、人々の記憶に刻まれた。まだ公共空間で現代美術の作品を見る機会も少なかった当時、横浜トリエンナーレで初めて現代美術に触れた市民が大勢いた<sup>10</sup>。

3年に1度というサイクルで開催する前提であれば、第2回は2004年に開催されるはずである。しかし、会場探しが難航し、山下ふ頭の上屋に会場が決定したのが2004年2月、と開催年に入ってからだった。そのため、会期は2005年に延期され、企画準備のために2004年7月に建築家の磯崎新がディレクターに就任したのもつかの間、12月にはその磯崎が辞任を表明する<sup>11</sup>。準備期間が短すぎるため開催をさらに1年延期すること、つまり、2006年開催を訴えるも主催者に受け入れられなかったというのがその理由のひとつだった。そこで、翌年の2005年1月にアーティストの川俣正(以下、川俣)を急遽ディレクターに迎えて、同年9月に開幕にこぎつけた。

2008年の第3回でも会場がなかなか決定しなかった。第2回で使った上屋の継続使用が難しいことが判明したからである。国際交流基金は国際展の規模として約1万㎡の会場を確保したいと考えていたため、横浜市は日本郵船海岸通倉庫(当時、BankART Studio NYK会場)を確保するが、規模が足りず、約4,000㎡の新しい展

示施設を新港ふ頭に建設するに至った。2007年度に施設を建設する業者を選定して設計に着手し、2008年度に入ってから施工を進め、4か月の突貫工事で2008年8月に完成。その後約1か月の展示作業を経て9月13日に無事開幕したが、運営上の準備不足が事業全体に影響を与えることになる。

第2回と第3回の「ドタバタ劇」から「横浜トリエンナーレといえば会場問題」という共通認識が関係者の間で広がった。

### 一求められて会場となった美術館

国際交流基金が事務局を担ったのは2008年の第3回までである。翌2009年8月末の衆議院選挙で自民党が大幅に議席数を失った結果、政権交代となり、9月に民主党政権が誕生。11月に始まった事業仕分けの結果、国際交流基金は文化芸術交流事業の海外への重点化をはかり、国内事業からは撤退することになった。国際交流基金が横浜トリエンナーレの事務局を担うことができなくなったため、横浜市では事務局を横浜市に移行すること、そして、横浜美術館を会場にすることまでが一気に検討された。その過程を追うと次のとおりとなる。

2009年 4月

- ・横浜美術館館長に逢坂恵理子が就任

7月末

- ・中田宏横浜市長が辞任

8月末

- ・衆議院選挙で与党の自民党が大幅に議席を失い、政権交代が決定する
- ・横浜市長選で林文子が当選(9月より市長に就任)

9月

- ・民主党政権が誕生

11月

- ・事業仕分けにて、国際交流基金は海外重点化のため、国内事業撤退要請

2010年 前半(平成21年度～22年度をまたぐ)

- ・横浜市と国際交流基金は外務省と文化庁との四者協議にて継続の可否を検討
- ・外務省は、継続開催がなければ国際的にも評価されなくなることを危惧しつつ、国際交流基金とともに(地域振興に限定されない)ナショナル・プロジェクトとしての地位の維持の重要性を説く

7月

- ・横浜トリエンナーレ組織委員会は総会にて「横浜トリエンナーレ2011」<sup>12</sup>開催を決定(文化庁と外務省はオブザーバー参加)
- ・国際交流基金から逢坂館長に横浜市内に事務局を移す旨、通知文を送付

8月

- ・総合ディレクターに逢坂恵理子就任、会場が横浜美術館と日本郵船海岸通倉庫「BankART



Studio NYK」の二会場に決定したことを記者発表

この間、並行して、文化庁は平成23(2011)年度の概算要求のなかで「国際芸術フェスティバル支援事業」という新規事業を立ち上げ、横浜トリエンナーレと東京国際映画祭を計上

2011年 1月

・文化庁の予算が決定

2009年11月の事業仕分けから2011年1月の文化庁の予算が決定するまでの過程を見てわかるとおり、組織委員会の存続を揺るがす事態が発生してから進めた事業継続の決定と予算獲得の手続きは綱渡りであった。スピード感のある協議で継続を決定できた大きな要因として、横浜市と文化庁との関係を挙げることができるだろう。文化庁には毎年横浜市の職員が研修生として出向していたため日常的な人事交流があり、緊急事態の最中、横浜市は文化庁と直接かつ密に連絡を取り合う関係性を築いていたのである。

横浜トリエンナーレの事業全体が横浜市に移行することが決まった際に、それまで直接かかわってこなかった横浜美術館が事業にかかわることが同時に検討されたわけだが、その必要性と必然性については、第3回(2008年)にかかわった人たちの声を拾いながら、確認したいと思う。

まず、総合ディレクターを務めた水沢勉(当時、神奈川県立近代美術館企画課長。以下、水沢)は横浜トリエンナーレを振り返るインタビュー<sup>13</sup>で、もっともうまくいかなかった点を問われたとき、「広報する時間がなかった」と回答している。その理由として「新港ピアができたのが8月中旬ですが、あの建物は、常識的には3ヶ月前には出来ていて、アーティストはもうそこに入って実際やり始めてなければならなかった」と悔しそうに説明している。同インタビューで水沢は「毎回会場が変わってきたことが大きな弱みとなっている」と続ける。そして、「今まで、横浜美術館という場所を生かしてこなかったことは事実だし、それはトリエンナーレの体質的な弱点になっていることは認めなければいけないと思います」と明言し、最後に「それと会場は今後20年、30年ずっと、ここでやりますと云えるような場所がメインでひとつ決まっている。おそらくこの点が一番難しいところなのでしょう」と本来あるべき姿を示している。

前述のとおり、2004年に開催されるはずだった第2回も会場が決まらず、開催年を1年遅らせて2005年に開幕している。第2回と第3回を経験して、事業運営の安定のために適切な会場を早い時期から確保することが最優先事項となった。

横浜市も水沢の懸念点を共有しており、横浜美術館を会場にする可能性を探っていた。同じころのインタビューで横浜市の開港150周年・創造都市事業本部長(当時)の川口良一は複数の会場を利用したことについて、次のとおり、反省している。

BankART studio NYKから黄金町まで水上交通を利用したり、三溪園までバスで行ったり、みなとみらい地区を歩いたり、街の中に回遊性ができたことは評価しています。…(中略)…しかし、一か所にまとまっていなかったが故に、見る側にとってはわかりにくくなってしまったかもしれません<sup>14</sup>。

そして、事務局強化のために「現在、横浜市芸術文化振興財団と調整していますが、横浜美術館がもう少し積極的に関わってきてもよいと思っています」と述べている<sup>15</sup>。本インタビューは2009年5月以前に行われてい



る。同年11月に事業仕分けにより組織の体制変更を検討するようになるわけだが、それとは関係なく、第3回が終わって早々に横浜美術館を活用することの有用性が話題になっていたわけである。

第2回も第3回も準備期間の2年間でほとんど会場探しのために費やしてきた経験から、第4回を開催するならば、展示の専門施設である横浜美術館を会場にするのがふさわしいというイメージを関係者が共有していたことがわかる。

水沢はさらに今後強化すべき点として「事務局の定点化」を挙げている。

どこかにトリエンナーレ事務局というものがあって、スタッフも常駐していて。そのような象徴的な場所があって、ずっと継続してある種のフォーラムのようなものがあって、そういう場があることがまず欲しいと思います<sup>16</sup>。

実は2005年の第2回を終えたのちに、川俣も「場所を持つっていうのは絶対大きいと思います」と発言している<sup>17</sup>。このとき、川俣は事務局というより、「市民も作家もインフォメーション・センター兼ミーティングをする場所みたいなもの<sup>18</sup>」をイメージしての発言ではあるが、これは水沢が「定点があることが重要で、これが精神のよりどころと云えるような、拠点がないことが最大の弱点です<sup>19</sup>」と述べていることにも通じる視点である。

ところで、川俣は2011年に横浜美術館を会場とすることについて意見を求められ、美術館はある種権威を示す場所になるという前提で「インフォメーションを渡す一つの開かれた場所としてある。…(中略)…それが例えばもっと街に広がっているなかの一部であるというようなレベルでフラットにした方が僕はいいのではないかなと(考えている)」と述べている<sup>20</sup>。つまり、横浜トリエンナーレに携わった当事者たちは、横浜美術館で横浜トリエンナーレを行うにあたっては、展示施設としてだけではなく、事業の拠点としても機能することが望ましいという考えを持っていたのである。

横浜美術館が横浜トリエンナーレの会場として適切であるか否か、あるいはそのメリットやデメリットが何であるかは、現在に至るまで組織委員会のなかで継続的に議論されている。しかし、第3回を終了した段階ではまず会場のひとつにすることのメリットが大きいと考えられ、それを具体的に要請する声があったことがわかる。この機運のなかで2009年に逢坂恵理子という現代アートを専門とするキュレーターが横浜美術館の館長に就いたのは、偶然より必然だったのだろう<sup>21</sup>。

## ●横浜美術館が会場となっても続く「会場問題」

美術館を会場としてからも、いわゆる「会場問題」は続くが、まず、先に美術館を会場にして明らかになったメリットをここに記述する。

### ーメリット① コスト削減

第2回と第3回における会場問題は横浜トリエンナーレの運営に大きな負担となっていた。展示専門ではな

い施設で展覧会を行うためには、道案内用の看板やチケットブースからトイレまで施工・設置しなければならない<sup>22</sup>。第3回までは数か月しか利用しない施設のために多くの予算と時間を割いていたわけだが、来場者を受け入れるために必要な什器や設備がすでに備わっている美術館施設を会場として使うことにより、環境整備の労力と費用負担はかなり軽減された。

#### —メリット② サービスの充実と顧客層の拡大

横浜美術館は駅構内や市内の地図にすでにランドマークとしてプロットされているため、アクセス情報を新たに作成する必要がない。横浜美術館を会場にすることによって、倉庫やオルタナティブスペースに美術を見に行くほど熱心なアートファンではない観客まで取り込むことができるのは大きなメリットとなる。さらに、シニア層やファミリー層など、トイレや休憩スペースを備えている、安心な環境が必要な来場者にとって、美術館会場のある横浜トリエンナーレはアプローチしやすい国際展となった。

#### —メリット③ 展示環境

第2回の会場となったふ頭の上屋は、キュレーションの視点からは保税倉庫という「一時的」な場所としてコンセプトを練り上げる面白さがあった。美術作品の展示環境としては決してよくなかったが、川俣は準備期間が極めて短いということを逆手にとり、「ワーク・イン・プログレス」という方法論をキュレーションに取り入れ、作品を展示する場所から制作する場所に会場を転換することにより、ひとつの解決をみた。しかし、ほぼ屋外の展示環境を見て磯崎がこの会場を否定したように、誰もが歓迎する会場ではなかったのである。

横浜美術館という、一定の規模の展示専門の施設を使うことにより、他館の収蔵品も借用しやすくなり、旧作の展示や歴史的な作品を並べる試みも可能になった。また、ディレクターも作家も早い時期から現場の調査ができるようになった。展覧会を準備するためには当たり前の環境が、最初の3回のトリエンナーレでは整備できなかったことを考えると、横浜美術館の利用によりプロジェクト・マネジメント上のストレスは大きく緩和された。

しかし、国際展で美術館を使うデメリットもまた大きく、会場問題は現在に至るまで、組織委員会を悩ませ続けている。

#### —デメリット① 作品展示の視点

現代美術の作品を展示するには、横浜美術館の施設では用途にそぐわない面が多々ある。温湿度管理を徹底し、美術作品を保存することが優先される建物には、植物や土など現代美術が扱う「不安定」で「生もの」な素材を持ち込むことが極めて難しい。実際、第4回の展覧会でも生の木材、土などを素材とした作品を選定したが、それらの作品はBankART Studio NYK会場で展示することになった。

そのため、第4回以降は横浜美術館を定点会場に据えながらも、結局別の施設を第2会場として求めることになった。そして、その会場整備には相応の準備とお金がかかるため、運営的・財政的負担が大幅に緩和されたとはいえない。それでも、以前より会場探しの時間や会場整備の経費を大幅に圧縮できたことは確かである。

## ーデメリット② 国際展の視点

美術館が会場となったことで実務的な面ではひとつの前進をみるが、国際展のあり方としては課題を残すことになる。それは川俣が指摘したとおり、横浜トリエンナーレの作品が横浜美術館という「権威の場所」に戻り閉じてしまうことで、本来の広がりを使い、美術館的なものに矮小化してしまうのではないかという懸念である。

実際、横浜トリエンナーレは横浜美術館の事業計画のなかでは企画展のひとつとして位置付けられているにすぎない。それゆえブロックバスター展とは異なる性質のものであることが外部にも伝わりづらく、組織としてのマインドも定型的な展覧会のフレームに収まってしまう。

では、定型的な展覧会と国際展は何が違うのだろうか。第1回のディレクターの一人で、現在は組織委員会の委員を務める建畠哲(現・埼玉県立近代美術館館長。以下、建畠)は、国際展は「カッティング・エッジ」を目指すべきだというのが持論である。

トリエンナーレ、ビエンナーレというのは、定期的にかれるわけですよ。そこで要求されるのはカッティング・エッジであること、そして時代の状況を反映することです。それ以外に理由がないのよ。あるテーマをたてるんだったら、必要なときにそのテーマを最初にかててやればいいわけね。それは、定期的にかれるものではないだろうと言ったんです。それから、規模からいって、1万平米+アルファといった壮大な会場は、テーマ展に向かないというのもあるよね。テーマは、定期的な展覧会に事後的につけるようなものじゃないでしょうとも言った。良くも悪くも不可避的に要求されることは、他のトリエンナーレやビエンナーレとの差別化です。同じような人選じゃなくて、新しく登場するアーティストたちをそこで紹介する必要があります。そういうことのかで時代を読むようなことは必要かもしれないし、その時代に必然的につくテーマがあるかもしれないけど、一般的なテーマ展とは違うと思っているんです<sup>23</sup>。

水沢もテーマと展覧会の規模のバランスについて、次のように述べている。

(前略)展覧会全体のテーマを明確にしようと思ったんです。これが、その後大変な努力を強いることになってしまったのですが。ひとつのテーマで大きなフェスティビティを持つイベントをやるのは、大変難しいですね<sup>24</sup>。

テーマの設定と事業の規模のバランスをとることが、ディレクターやキュレーターにとって難題であることがわかる。特に批評的な視点に立った時、テーマやコンセプトを強く打ち出したほうが評価されやすいのも事実である。たとえば、美術批評家の高島直之は美術情報サイト「artscape」のウェブ掲載記事「美術運動なき時代の美術展の現在形」で、第1回横浜トリエンナーレについて「テーマに批評性が盛り込まれていない」と批判している。

まず「メガ・ウェイブ——新たな総合へ向けて」という展覧会のテーマについてである。一般向けにある程度「柔軟さ」をもたせることは避け得ないことだが、しかし今回のそれはあまりに柔軟にすぎ、かつナイーヴすぎたといえる。一言でいえば、テーマに批評性が盛り込まれていない、ということだが、百歩譲ってそれを無視するにしても、ディレクターたちはすくなくともこれだけは、という作家・作品の選択によって、ある筋道をあぶりだして主張すべきではなかったのか<sup>25</sup>。

一定の規模をコントロールしながら、テーマやコンセプトを展覧会全体に浸透させるのは容易なことではないのである。

定期開催される国際展は、現代美術固有の同時代性を強く打ち出すことにこそ、その意義がある。そのため、テーマに収めることを主眼とせず、多様な「いま」を切り取ることは重要だが、そうするためには、横浜美術館以外の会場も加えて圧倒的規模でそれを見せる必要がある。しかし、2010年代の横浜は開発が急ピッチで進み、美術館以外で一定規模以上の会場を確保することも徐々に難しくなり、建畠のいう「カッティング・エッジ」を実現する規模を維持するのは、もはや現実的ではなくなった。

では、テーマ性を強く押し出すキュレーションにより、国際展らしさは失われるのだろうか。ここで世界で行われている国際展の動向にも目を向けてみたいと思う。

2000年代にグローバル化が急速に進み、「国際展」はグローバルアートのプラットフォームとなる。2002年の「ドクメンタ11」は、多くの専門家が参照する、国際展の金字塔ともいえる展覧会である。「ドクメンタ11」のアーティスティック・ディレクターを務めたオクウィ・エンヴェゾーは、ドイツのカッセル市のほか、欧州、南アジア、カリブ海、アフリカの複数都市を「プラットフォーム」と位置づけ、会期前から討論会を重ねて進むという、斬新なキュレーション・モデルを導入した。2000年代に入ってから、このようなモデルを可能にする人や情報の往来が可能になり、「グローバル」というコンセプトが実践に結びつく時代が到来した。

オクウィによってある意味決定づけられたグローバルアートはその後発展を遂げるが、2010年代に入ってから有機的につながったように見えた世界の現実のほうで、不安定かつ分断へと向かう。2011年の中東におけるアラブの春と米国におけるオキュパイ・ムーブメント、2012年の習近平共産党総書記就任、2014年のひまわり学生運動(台湾)と雨傘運動(香港)、2016年の欧州への難民流入や英国EU離脱の国民投票と続き、2017年に分断の象徴ともいえるトランプ政権が米国で誕生する。そして、2020年代に入り、新型コロナウイルス感染症のパンデミックを契機にグローバル化によって蓄積されてきた負の遺産が表出する。横浜トリエンナーレが横浜美術館で開催されるようになった2010年代は、グローバルアートを支えてきたあらゆる基盤が揺れ始めた時代とも重なる。並行して、いわゆるアートワールドにも構造的な変化が起きる。新進作家や新作発表の機会が、アートフェアなど国際展以外の現場でも多くみられるようになり<sup>26</sup>、「新しい」が売りのカッティング・エッジは国際展だけの特権ではなくなっていく。

国際展の企画もこの時代の変化とともに推移していく。オクウィの「ドクメンタ11」に続く、「ドクメンタ12」(2007年)では、歴史的視点を取り入れる試みが行われ、「いま」を相対化する枠組みが提案された。また、キュレーターのマッシミリアーノ・ジョーニが手掛けて話題となった2010年の光州ビエンナーレと2013年のヴェネチア・ビエンナーレの企画展は、アートの文脈から疎外され、商品としても流通し得ないものを多く取り



入れた展覧会となった<sup>27</sup>。

国際展は同時代の新しい表現というよりも、脱植民地主義や歴史の検証、これまでの知識を捨てること(unlearn)を可能にする新しいコンセプトへと関心を移していく。

## ●横浜市の財政状況と健全な事務局運営という課題

もう一度、横浜トリエンナーレを横浜市に移行する時期へと話を戻そう。横浜美術館を会場にすることを求めていたその当時、横浜市の開港150周年・創造都市事業本部は財政的にも苦境に立たされていた。

横浜港開港150周年を記念して開催した開港博Y150(2009年4月28日～9月27日)は約25億円の赤字を出す事業となり、その主催者である「財団法人横浜開港150周年協会<sup>28</sup>」は、業務委託先3社との特定調停、旅行会社3社との訴訟、住民訴訟も抱えることになる。そのため横浜市は2010年に市費12億円の補正予算を組んで赤字の一部補填を決定する。

同年、第3回で建設した新港ピアを主会場に「ヨコハマ国際映像祭2009 CREAM – Creativity for Arts and Media –」(2009年10月31日～11月29日)が開催される<sup>29</sup>。横浜市は当時「映像文化都市づくり」も目指しており、東京藝術大学映像研究科(2015年開設)の誘致のみならず、「ヨコハマEIZONE」を実施していた<sup>30</sup>。この実績をもとに開港150周年を機に拡大したのが本映像祭だったが、こちらの事業も残念ながら、入場者数が伸びず、当初想定していた事業目標達成に向けて苦戦することとなった。

以上のとおり、2010年に横浜トリエンナーレが横浜美術館での開催を発表していたころ、横浜市は開港150周年関連事業で深刻な財政問題を抱えていた。

そこで、第4回の実施にあたっては準備段階より当時の横浜美術館館長で総合ディレクターの逢坂恵理子、アーティスティック・ディレクターの三木あき子(以下、三木)、そして、プロジェクト全体のマネージメントを補佐する筆者は、健全な収支を実現するため、厳しい予算管理を強いられることになる。しかし、そんな中、2011年3月11日に東日本大震災が発生し、続けて福島第一原子力発電所の事故が起きたため、横浜トリエンナーレの開催そのものが危ぶまれる事態となる。同年5月に林文子市長の判断により開催が決定し、中止を免れることができたが、事業収支を下方修正することになり、入場料収入予算を7,500万円圧縮し、事業費も約4,200万円圧縮して本番を迎える。

横浜美術館という会場が確保できていたとはいえ、第4回の開催決定が約1年前。総合ディレクターとアーティスティック・ディレクターがそろったのは、たったの10か月前である。当時パリを拠点にしていた三木が作家と作品についてきめ細やかに交渉することにより、展示および制作に関する費用をかなり抑えることができたが、予算が当初より圧縮されて、赤字は免れないのではないかと事務局は緊迫していた。幸い事務局の予想に反し、第4回は30万人という第1回並みの有料会場来場者を迎えて、17万枚のチケットを販売することができた。暗いニュースが続き、多くの文化イベントが中止された中で横浜トリエンナーレが開幕すると、大勢の人が横浜美術館へと足を運んでくれたのである。横浜美術館の前にウーゴ・ロンディノーネの親しみやすい彫刻を並べたことが功を奏し、老若男女がその前で記念写真を撮り、美術館の中に入っていった[PL2]。最終的に収支は好転し、横浜トリエンナーレは安定的運営という目標に一步近づくことができたのである。



## ●横浜美術館に事務局が移るまで

横浜美術館が定点会場のひとつになってから、2024年(令和6年度)までにすでに5回のトリエンナーレを開催しているが、ここでは、改めて横浜美術館が組織として横浜トリエンナーレと関わるようになった経緯を確認する。

横浜美術館は1989年3月に横浜博覧会パヴィリオンとして開設された。開館記念展はこのときに開幕するが、横浜美術館条例が施行され、正式に開館するのは同年11月である。その運営母体は1987年に設立された財団法人横浜市美術振興財団である。2002年に財団法人横浜市文化振興財団と統合し、財団法人横浜市芸術文化振興財団(2009年に公益法人となる)へと移行する。第1回横浜トリエンナーレが開幕したころ、横浜美術館は統合前の組織である財団法人横浜市美術振興財団により運営されていた。

2006年から指定管理者制度を導入している横浜市のもとで、芸文財団が指定管理者となる。第1期指定管理期間は2012年度で終了し、第2期(2013年度～2022年度)、第3期(2023年度～現在)と続く。横浜トリエンナーレの会場となった第4回は第1期指定管理の終わりに近い2011年度のことである。指定管理開始時の事業計画に横浜トリエンナーレが入っておらず、さまざまなことが未整理だったため美術館所属職員にトリエンナーレ業務を分掌するのは極めて困難だった。

### —第2回と第3回の横浜市芸術文化振興財団のかかわり

第4回到横浜美術館がかかわるようになってからの組織体制についても触れる前に、芸文財団がどのように第2回と第3回にかかわっていたかを整理する。というのも、横浜美術館より先に、芸文財団の別の部門が「創造都市政策」の旗振り役として横浜トリエンナーレの事業の一端を担っていたからである。

横浜市では、2004年1月に有識者による「文化芸術創造都市－クリエイティブシティ・ヨコハマの形成に向けた提言」を受けて、同年4月に創造都市事業本部を設置し、いわゆる「創造都市政策」を本格的に推進するようになる。事業本部設置より一か月早い3月には、創造都市政策の中核を担うBankART1929が馬車道にあった元銀行(旧第一銀行、旧富士銀行)を拠点に活動を開始している。当時、NPOが行政の管理する施設を運営すること自体が新しく、「創造都市」は大きな反響を呼んだ<sup>31</sup>。

2004年4月には、アサヒビール芸術文化財団事務局長を務めていた加藤種男(以下、加藤)が芸文財団の専務理事に就任する。加藤は先の提言をまとめた「文化芸術・観光振興による都心部活性化検討委員会」の委員のひとりでもあり、芸文財団の幹部として創造都市政策の旗振り役となる。提言には「『クリエイティブシティ・ヨコハマー文化芸術創造都市』形成にあたっては市民が主体になることが重要であり、今後、活動の場や仕組みの充実を通じて、市内におけるサポーターを30,000人にまで増やすことが望まれます<sup>32</sup>」と明記されており、横浜市と芸文財団では、横浜トリエンナーレをサポーターの「活動の場」のひとつとして活用するようになる。そして、この流れをくんだ事業を「市民協働」という政策の枠組みに位置づけられるようになる<sup>33</sup>。

そこで第2回に向けて、芸文財団は市民ボランティアが組織する「YCAN(横浜市シェティアートネットワーク)」を提言し、芸文財団事務局所属の職員2名をその運営支援のために配置する<sup>34</sup>。第3回でも、同様に芸文財団職員4名(うち、応援1名)がかかわることになる。さらに横浜トリエンナーレにコミットする加藤は、展覧会に横浜美術館の学芸員を送り込む。第2回の川俣総合ディレクターのもとで企画を担当するキュレーターと

して美術館学芸課長補佐(当時)の天野太郎、キュレトリアル・スタッフに学芸員の新畑泰秀と木村絵理子<sup>35</sup>、そして、第3回の水沢総合ディレクターを補佐するために学芸員の松永真太郎が横浜トリエンナーレの現場へ派遣された。

[fig.1]

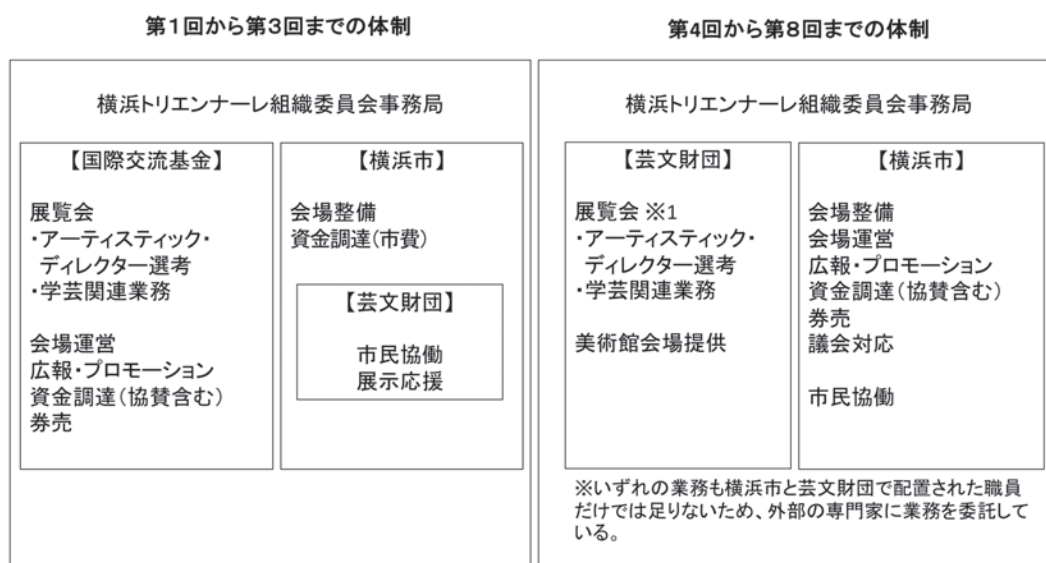
	横浜美術館	(芸文財団) 事務局
第2回 (2005)	[学芸部] 天野太郎、新畑泰秀、木村絵理子 (キュレーターとして派遣) [アトリエ課] 三ツ山一志、関淳一 (トリエンナーレ運営を担当)	[事業推進課] 伊勢田純、野田日文 (市役所より派遣)
第3回 (2008)	松永真太郎* (芸文財団事務局業務管理G所属とし、 キュレーターとして派遣) *	[協働推進G] 中村雅之、鈴木慶子、桑崎唯 [業務管理G] 松永真太郎* (横浜美術館より派遣) [横浜赤レンガ倉庫1号館] 松井美鈴 (応援要員として配置)

第3回までは横浜美術館の学芸員は横浜美術館主催の事業ではなく、あくまでも横浜トリエンナーレという外部の事業にかかわる立場だった。しかし、2009年に国際交流基金の撤退が決定したため、横浜市は展覧会の運営部門の担い手を求めなければならなくなった。そこで、第4回からは芸文財団の協働推進グループに加えて、会場としても求められていた横浜美術館を組織としても巻き込むことになった。

#### —第4回からの体制の変更

第4回からは芸文財団がより深く横浜トリエンナーレにかかわるようになる。国際交流基金が担っていた展覧会業務を中心に芸文財団が担い、その他の広報や運営については横浜市が担うという業務分担で事務局の運営にあたるようになる<sup>36</sup>。

[fig.2]



体制の移行にあたって、芸文財団はまず、2010年度に第2回と第3回を踏襲して、協働推進グループ所属の職員と美術館学芸員を配置した。そして、年度途中で事業が本格化するにあたり、芸文財団職員を採用して増員し、さらに開催年度である2011年度には横浜美術館内に横浜トリエンナーレグループを設置してグループを1本化する。第4回の準備のために配置された芸文財団職員は次のとおりである。

[fig.3]

	横浜美術館	(芸文財団) 事務局
2010年度 (第4回開催前年度)	<p>[学芸教育G] 天野太郎* (主席学芸員(担当G長)兼協働推進G 横浜トリエンナーレ等担当G長) 庄司尚子** 藤井聡子(新採用)** 派遣2名**</p> <p>*2010年4月配属 **2011年1月配属</p>	<p>[協働推進G] 河上祐子 (横浜トリエンナーレ担当)</p>
2011年度 (第4回開催年度)	<p>[横浜トリエンナーレG] 天野太郎(G長) 庄司尚子(担当リーダー) 河上祐子、藤井聡子、山本紀子 派遣3名</p>	<p>開幕前から閉幕まで総務関係業務遂行 のため応援職員を3名交代で派遣</p>

展覧会関係の専門業務を芸文財団職員が担うことになったため、本来であれば横浜美術館の担当を増員するべきではあるが、指定管理上配置されている人員では足りない。横浜トリエンナーレの前後の展覧会を担当している学芸員や通年でアトリエの講座を担当しているエデュケーターは横浜トリエンナーレに関わる余裕がない。さらに、現代美術専門の美術館ではないため、現代美術専門の学芸員の数も限られている。そのため、キュレトリアル業務にあたるキュレトリアル・アシスタントやコーディネーターを外部委託し、体制を整えた。外部委託のスタッフは組織委員会と契約締結しているため、芸文財団外に位置付けられた。

筆者も外部委託のスタッフとして、第4回の準備業務に携わるようになったひとりである。2010年9月に横浜トリエンナーレ事務局長補佐の業務を外部専門家として受託し、調整、コーディネーション、そしてコンサルティング的な進言、提言などの業務に携わったが、決裁ラインには位置付けられなかった。直接指示を出したり、判断したりする立場にはなかったため、事務局内の決裁は芸文財団と市役所の職員が組織委員会の規程に則って手続きを進めた。

ところで、事務局を横浜に移すことが通知されたのが2010年7月である。2010年4月時点では、いったん、「創造空間9001<sup>37)</sup>」というアートスペースとして活用されていた旧東横線桜木町駅舎に仮事務所を設置しており、この通知を受けたのちに美術館内に事務所を開設する。開幕1年前の2010年8月、事務所にはまだコピー機やネットワークシステム、経理ソフトの導入を検討中の状態だった。事務局の拠点となる空間は確保したものの、モノも人もそれから1年で埋めていくことになった。

ただでさえ慌ただしいところに、2011年3月11日に東日本大震災が発生する。組織委員会事務局のメンバーは都内の会場で午後3時から始まる記者会見の準備をしていたところだった。横浜市長は会場に向かっていたが、途中で震災が発生し、急遽、市庁舎に戻ることであり、記者会見は中止となる。

震災発生により、美術館で春開幕予定だった「プーシキン美術館展」は開催延期となり、美術館では、急遽、収蔵作家の長谷川潔の展覧会に切り替えて、4月29日から6月26日まで開催する。そして、震災と急遽仕立てたコレクションの展覧会を経て、第4回横浜トリエンナーレは、当初の予定どおり8月6日(土)に無事開幕。しかし、原発事故後の夏の電力不足を補うために横浜市内の施設は輪番休館している時期と重なり、横浜トリエンナーレも開場時間を短縮したり、エスカレーターを止めたり、省エネの運営を強いられた。

以上のとおり、第4回は、結局第3回までと同じように慌ただしく準備を進めることになってしまった。また、国際交流基金との引継ぎが不完全だったことより、国際展を運営するノウハウはほぼゼロの状態から始めざるを得なかった。それでも、横浜美術館が会場となり、事務所を館内に構え、赤字を出さずに事業を完了したおかげで、継続するための小さな一歩を踏み出すことができた。

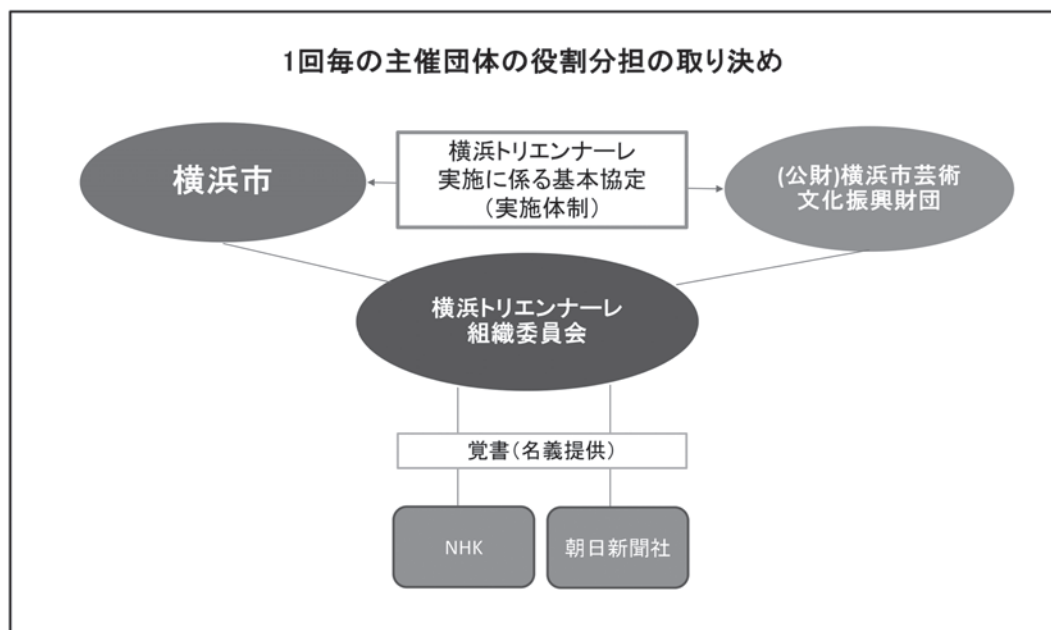
## ●横浜美術館と横浜トリエンナーレ組織委員会の契約関係

横浜トリエンナーレを実施するために、横浜トリエンナーレ組織委員会と芸文財団および横浜美術館がどのような契約関係で業務と費用を負担しているかをここでは整理する。

### —横浜トリエンナーレ組織委員会の構成

まず、組織委員会を構成する4者(横浜市、芸文財団、朝日新聞社、NHK)はそれぞれ組織委員会の構成員として役割分担を決定する。横浜市と芸文財団は1回ごとに「横浜トリエンナーレ実施に係る基本協定」(以下、基本協定)を締結し、横浜市が開催費用の一部を負担し、芸文財団が専門人材を提供するというそれぞれの役割分担について合意する。その他の構成員である朝日新聞社とNHKとは、名義提供にかかわる覚書を締結する。

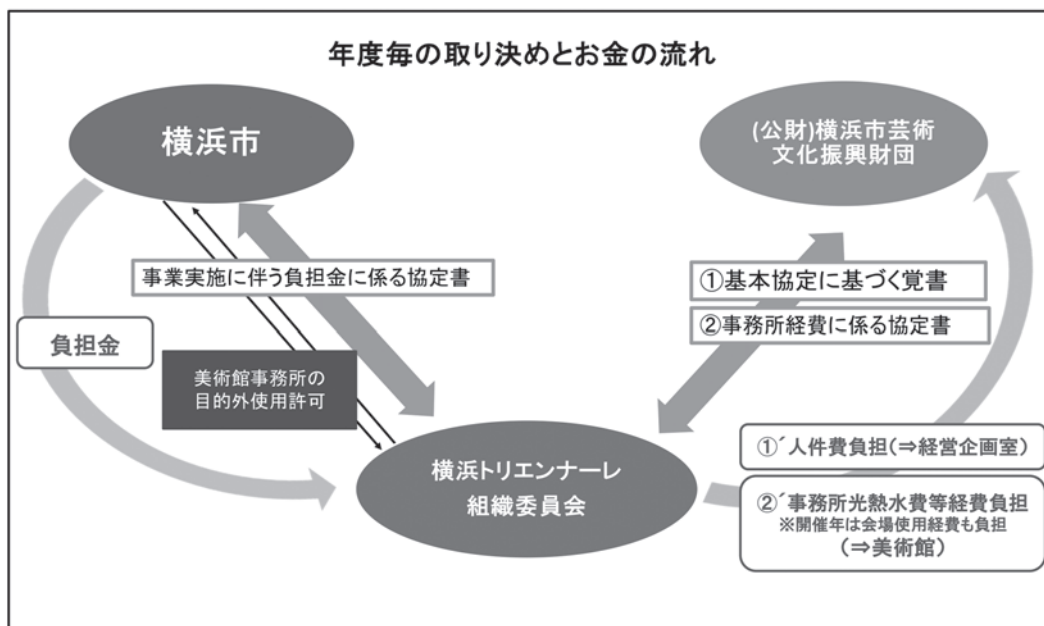
[fig.4]





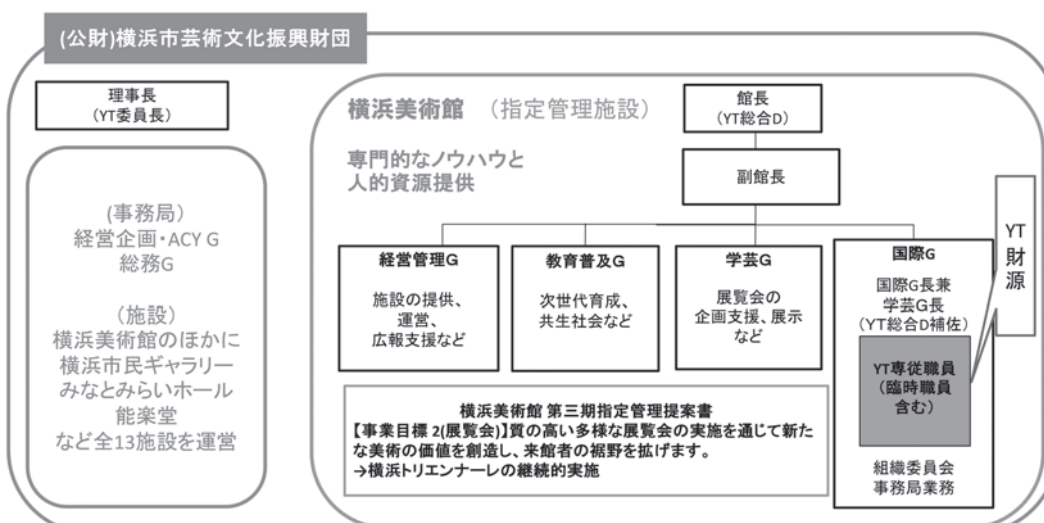
次に横浜市の予算が年度ごとに確定するため、1回ごとに交わされる基本協定をもとに各年度に横浜市と芸文財団はそれぞれ横浜トリエンナーレ組織委員会と協定書などを交わす。それにより、横浜市から組織委員会には事業実施にかかわる負担金が支払われる。また、芸文財団は専門人材を提供し、組織委員会はその人件費を支払う。同様に芸文財団は美術館の施設を提供し、組織委員会はその使用範囲(たとえば事務所、あるいは開催年であれば横浜美術館の展示室など)に合わせて水道・光熱費などの経費などを美術館に支払う。ちなみに組織委員会は基本協定で確保する横浜市からの負担金のほか、文化庁の補助金、協賛金、助成金およびチケット売上金を収入として見込み、事業を計画し、実施する。

[fig.5]



以上の手続きを踏み、芸文財団では次のように横浜トリエンナーレ専従の職員だけではなく、指定管理施設である横浜美術館の専門的なノウハウと人的資源を組織委員会に提供している。

[fig.6]



※YT=横浜トリエンナーレ組織委員会 D=ディレクター 括弧内(YT総合D、YT総合D補佐)は横浜トリエンナーレ組織上の役職 G=グループ  
YT財源=横浜トリエンナーレ組織委員会の予算を財源としている

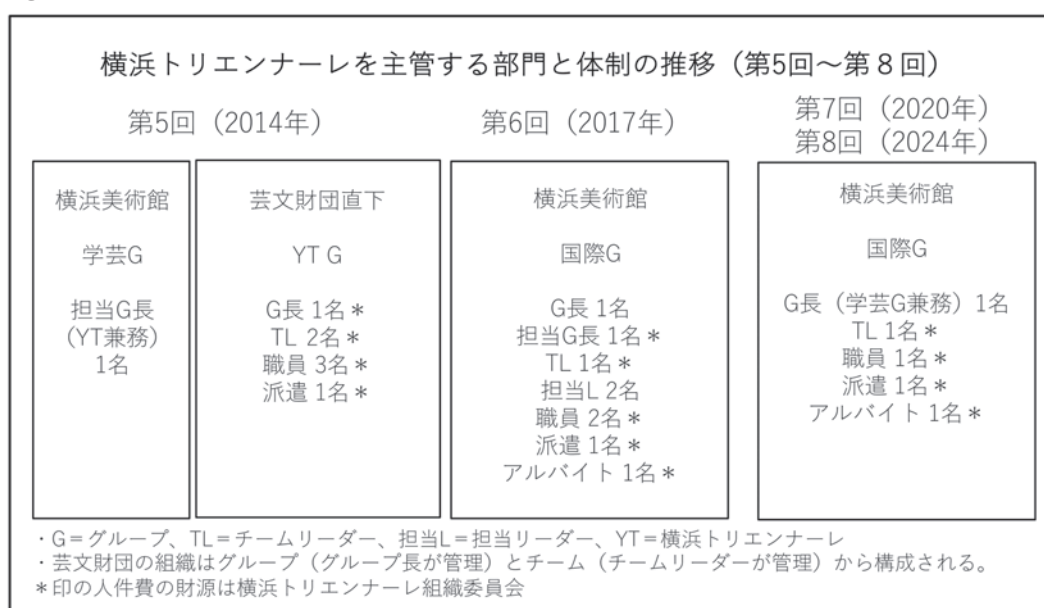


## ●第5回から第8回までの実施体制の推移

横浜トリエンナーレを横浜美術館で初めて開催した翌年の2012(平成24)年度いっぱい芸文財団による第1期指定管理期間が終了。同年、指定管理の提案書を提出し、第2期(2013[平成25]～2022[令和4]年度)の非公募単独指名で指定管理者となる。第2期以降、指定管理の事業計画に横浜トリエンナーレを明記し、全館で取り組む環境を整えていく。

筆者は2012年4月に芸文財団に入団し、横浜美術館所属のグループではなく、芸文財団直下の「横浜トリエンナーレグループ」のグループ長に着任する。そして、さらに体制強化のために横浜トリエンナーレ専任の契約職員を2名雇用する。以降、微調整しながら、横浜美術館内で横浜トリエンナーレを担当する部門と人材の「置き場所」の最適解を探り続けることになる。

[fig.7]



### —第5回(2014年)

2012年4月、芸文財団直下のグループのひとつとして「横浜トリエンナーレグループ」が新しく設置され、芸文財団の契約職員となった筆者がグループ長に着任した。同時に横浜美術館所属の主席学芸員を横浜トリエンナーレの担当として配置。さらに管理職はふたつのグループを兼務する形で配属された。同じ芸文財団職員でも横浜トリエンナーレにかかわる職員は、横浜美術館の指定管理費用を雇用財源としている職員と横浜トリエンナーレ組織委員会を財源としている職員のふたつの異なる雇用財源の人材が混在している。

### —第6回(2017年)

第6回では美術館のなかに「国際グループ」を新設し、横浜トリエンナーレのほか、コレクションの国際巡回展を担当することになり、学芸員を学芸グループから国際グループに移して、トリエンナーレと国際巡回展に専従する役割を付与した。そして、「横浜トリエンナーレグループ」ではなく、「国際グループ」下にチームを配置した。

## —第7回(2020年)、第8回(2024年)

第7回を準備するにあたっては、学芸員を学芸グループ所属のまま横浜トリエンナーレを担当する体制へと戻した。これは、縦割りになりがちな組織のなかで、学芸員が学芸の日常業務にかかわるほうが展示の現場が円滑になるという判断の結果である。代わりに、今度は、国際グループのグループ長が学芸グループ長を兼務することとし、横浜トリエンナーレを担当するチームをひとつ管理することになった。以来、学芸グループは従来の学芸業務を担当するグループ長と横浜トリエンナーレを担当するグループ長の2名体制となった。

以上の推移は横浜トリエンナーレの主担当となるグループについてのみを記述している。事業の実現にあたっては、国際グループや学芸グループ以外のグループの職員がさまざまな形でかかわっている。特に教育普及グループは横浜トリエンナーレ開催に向けてボランティア育成をしたり、会期中に関連プログラムを企画・運営したり、トリエンナーレのコンテンツにも深くかかわっているが、ここでは組織の推移をわかりやすく説明するため、その詳細を割愛する。

## ●国際展を美術館で開催すること

### —国際展と美術館の比較

2011年の第4回以降、会場問題の解消と事務局運営の安定化を目指して、横浜美術館という施設と組織を拠点にするようになった。

しかし、そもそも国際展と美術館は決して相性のよいものではない。川俣は美術館の権威主義的側面を警戒しつつ、「美術館が中心となるのは、いいこともあるかと思うのですが、美術館を特化してしまうのはまずいと僕は思っているのですね」と明言している<sup>38</sup>。

なぜか。それを考えるためには、「そもそも国際展とは何か?」という問いに一度戻らなければならない。2017年に国際展の主催者で構成される「International Biennial Association」(以下、IBA)の総会を横浜に誘致した際、国際展の特徴や意義について実務者同士が話しあう機会を持つことができた。議論の詳細は、記録集にまとめられているので、ここではその議論の一部を引用しながら、国際展と美術館について比較検討する<sup>39</sup>。

2017年当時、初めてのビエンナーレの開催準備中だったカラチ・ビエンナーレは、国際展を開催することで世界にアピールできることが重要だと強調した。同ビエンナーレのアテカ・マリックはカラチでビエンナーレを開催する意義について次のように説明している。

(前略)ビエンナーレを開催するからこそ、私はまさにこのようなネットワークに参加することができ、ここでみなさんとパキスタンでの経験を共有することができます。ビエンナーレを国際的なレベルで開催することを推進することで、普通の状況であれば共有しないようなことをこの場でいろいろと共有することができるのです<sup>40</sup>。

パキスタンのようにテロ関係のニュースばかりが報道される国にも豊かなアートシーンがあることを世界に示すためには「ビエンナーレ」という旗を必要としていた。ヴェネチア・ビエンナーレがそもそも内外にヴェネチアのまちをアピールするのに一役買っているように、いまでも「ビエンナーレ」「トリエンナーレ」を名乗ることで国際的ネットワークに参加しやすいのは事実である。横浜トリエンナーレもIBAというネットワークに設立当初より参加しているが、「ビエンナーレ」「トリエンナーレ」という「肩書」が国際的な対話の輪に入るためのアクセス権になることを実感している。国際展にかかわることにより、同時代を一緒に考え、世界共通の課題やアジェンダを分かち合い、連帯するコミュニティに直接かかわる回路が開くのである。

国際展は、2年に1度、あるいは3年に1度の周期で開催される事業形態こそが特徴である。リバプール・ビエンナーレの創設者でもあるルイス・ビッグスは、「開催の度に周りの状況を見直し、変化の度合いを測ります」と説明し、国際展の目的を「変化を測ること」と述べている<sup>41</sup>。定期的なサイクルで社会や文化の変化を測りながら、既存の知識や認識を更新していく。流行りすたりにも左右されやすいが、同時代への意識は研ぎ澄まされる。国際展は、50年、100年というスパンを前提に考える美術館とは異なる時間感覚を持つ事業なのである。

### —国際展と美術館の時間軸

時間認識が異なる国際展と美術館。それにかかわるキュレーターの行動様式も異なる。美術館の学芸員は、長期的展望のもと、作品を研究・収集・保存することが目的で働いているのに対して、国際展のキュレーターは、2〜3年のスパンで世界を俊敏に把握し、そのときどきの時代の要請に応答することが求められる。国際展は「美術館より実験的でリスクを取らなければなりません<sup>42</sup>」とベルリン・ビエンナーレの元ディレクターのガブリエル・ホーンは説明する。リバプール・ビエンナーレの元ディレクターで、ロンドンのサーペンタイン・ギャラリーで働いた経験のあるサリー・タラントは、2〜3年という短い期間に数十名の作家と交渉し、新作も委嘱する国際展は「美術館というコンテキストを挑発するもの」と分析する<sup>43</sup>。短いサイクルのなかでリスクを負いながら運営される国際展。タラントは「ビエンナーレは本質的に不安定なものだと思います」と認めたうえで、「しかしながら、リスクを負うためには、ある程度、不安定なことを受け止めることのできるしっかりとした組織が必要だと思います<sup>44</sup>」と提案する。

「時代への即応答」対「歴史的な評価」、「不安定／リスク」対「安定／着実」と対立する国際展と美術館の本質的な性質に鑑み、横浜美術館の組織で横浜トリエンナーレを運営するために微調整してきたが、この対立する構造を解決する組織体制は未だに見えていない。

### —美術館を拠点に行われている国際展の事例

2000年代以降、いわゆる新興国で発展を遂げている国際展の多くは現代美術を支える基盤や制度が整備されていないところが多い。インドのコチ＝ムジリス・ビエンナーレやアラブ首長国連邦のシャルジャ・ビエンナーレは、ビエンナーレの回数を重ねるなかで、展示施設などを建設し、基盤整備を進めている。これは、日本の例でいうと、ソフト事業をきっかけにハード事業の充実も図ってきた越後妻有アートトリエンナーレのモデルに実は近いだろう。これらの国際展では財団を設立し、中間年にも教育プログラムなどを実施することによって、その組織を維持している。ヴェネチア・ビエンナーレの「La Biennale di Venezia」、ドクメンタの「documenta und Museum Fridericianum gGmbH」、光州ビエンナーレの「Gwangju Biennale

Foundation]—これらの国際展も独立した組織のもとで職員を雇用し、国際展を定期開催している。

では、美術館を拠点に開催されている国際展はどのように運営されているのだろうか。ここでは、フランスのリヨン・ビエンナーレ、台湾の台北ビエンナーレ、そして、オーストラリアのアジア・パシフィック・トリエンナーレ(APT)の例を紹介する。

フランスのリヨン・ビエンナーレはリヨン現代美術館が拠点のひとつとなっているが、横浜トリエンナーレと同じように、美術館が単独の主催者ではなく、「La Biennale de Lyon」という別組織が主催している。もともとは1980年代に音楽とダンスの国際フェスティバルを開催していた母体があり、80年代末までにこの事業が終了するも、新たに現代美術の国際展であるリヨン・ビエンナーレが1991年に始まり、ビエンナーレを主催する団体へと衣替えする。同ビエンナーレは、フランスが国家プロジェクトとして手掛けたパリ・ビエンナーレ(1959年～1985年)の後継ビエンナーレとして発足したため、現在でも国から補助金が出ている。現在、「La Biennale de Lyon」は、ダンスと現代美術のビエンナーレを隔年で運営している。現代美術部門のディレクターをリヨン現代美術館の館長が務め、毎回、ゲストキュレーターを迎えて展覧会を企画しているが、ビエンナーレの現場にかかわるスタッフは美術館の職員ではなく、主催団体である「La Biennale de Lyon」に所属している。つまり、館長は美術館とビエンナーレの両方の責任を負い、それぞれの組織を監督する立場にある。これは、現在の横浜トリエンナーレにおける総合ディレクター(横浜美術館館長を兼ねている)と類似する組織体制である。

台湾の台北ビエンナーレは、台北市立美術館が主催している。1984年に始まった国内作家の公募展だったが、1998年に「海外ディレクター」の南條史生を迎えて、国内外のアーティストを招へいし、国際舞台に躍り出る。台北市立美術館はヴェネチア・ビエンナーレの台湾パヴィリオンの事務局の役割を担っており、リヨン同様、市立でありながら、国家プロジェクトを担う立場にある。その意味では、美術館そのものが国際交流の拠点として位置付けられているのが特徴である。

オーストラリアのアジア・パシフィック・トリエンナーレ(APT)はブリスベン市にあるクイーンズランド州立美術館&近代美術館QAGOMAが主催している国際展だが、リヨンや台湾とは成り立ちが全く異なる。母体であるクイーンズランド州立美術館は1982年に設立された美術館だが、美術館の発案で1993年にアジア大洋州の現代美術に特化した第1回APTが開催される。当初はアジア各地の専門家に調査を依頼し、地域ごとにさまざまな作家や作品が選定された。第1回より展示作品を収蔵しており、新作の委嘱と収蔵というサイクルが美術館の活動のなかに組み込まれている点で美術館に根付く体制が整っている。現在では、美術館所属の学芸員が調査を行い、作家と作品の選定を行っている。回を重ねるごとに美術館のコレクションの充実を図ってきた結果、世界でも有数のアジア大洋州地域の美術のコレクションを形成することができている。

以上のとおり、美術館がかかわる国際展を運営する組織の成り立ちは、多様である。横浜トリエンナーレはその成り立ちや組織もリヨン・ビエンナーレに近い。しかし、美術館制度に国際展を寄せていくのであれば、オーストラリアのAPTのように作品の収蔵を目的に据えていくことも必要になる。



## ●まとめの代わりに

本稿では、横浜トリエンナーレが横浜美術館で開催されるようになった経緯とそれに伴う芸文財団、なかでも横浜美術館の組織的な推移を概観した<sup>45</sup>。また国際展の目的や役割を確認し、運営する組織の事例にも簡単に触れた。横浜トリエンナーレと横浜美術館の関係をまとめるにはまだ論じるべき課題が残っているため、まとめの代わりに、美術館だからこそ実現できる横浜トリエンナーレについて、組織委員会内で議論されてきたことを中心にここで述べる。

### —「フロー」から「ストック」へ

これまでは安定的な継続が横浜トリエンナーレの組織的な関心事だったが、第8回まで継続してきた実績を生かすためには、展覧会を開催する「フロー」だけではなく、「ストック」にも関心を広げ、具体的にレガシーを残すことを検討しなければならない。美術館はまさに「ストック」する施設、そして組織としてふさわしく、整備途上の横浜トリエンナーレ出品作の収蔵および資料のアーカイブ化の手続きを確立できるとよい。

### —新たなオーディエンスの開拓と循環

横浜美術館の事業計画では、横浜トリエンナーレは「質の高い多様な展覧会の実施を通じて新たな美術の価値を創造し、来館者の裾野を広げる」という事業目標のなかに位置付けられている。

「新たな美術の価値」は国際展の開催を通して創造することができるが、「来館者の裾野を広げる」という目標については、展覧会の会期中から会期後のフォローが重要となる。横浜トリエンナーレには、毎回、初めて現代美術に触れたり、美術館に来館する「ビギナー」層が観客として大勢含まれている。横浜トリエンナーレで受け入れた新規のオーディエンスをしっかりと捕まえて、トリエンナーレ後の美術館の展覧会への来館促進や教育プログラムの参加へとつなげて美術にかかわる層を厚くする仕組みの確立が急務である。そのためには、学芸グループだけではなく、教育普及グループや経営管理グループとも横浜トリエンナーレの事業計画を一緒に作っていく必要がある。

### —中間年の組み立て方

横浜トリエンナーレまでの準備年、すなわち中間年については、最初の3回は会場探しに費やし、第4回以降は事務局の安定化と組織づくりに費やしてしまったことは否めない。

しかし、中間年の組み立て方で開催年のアウトプットの厚みも変わるのは自明である。川俣は「僕は横浜トリエンナーレがいちばんダメだと思うのは…(中略)…あいだの3年間で全く使っていないこと」と批判し、中間年をしっかりとリサーチの期間として使うことを推奨した<sup>46</sup>。第7回のアーティスト・ディレクターを務めたラクス・メディア・コレクティヴはトリエンナーレとトリエンナーレの間の「1000日間」を想像するために、会期と会場を限定しない「エピソード」というプログラムを会期の前後に組んだ。展示活動だけではなく国際展の広がりを目指すために、今後の横浜トリエンナーレでは、開催年のコンテンツづくりに向けて中間年のリサーチや活動をより建設的に組み立てていく必要がある。

そのためには中間年に活動している横浜美術館の事業に横浜トリエンナーレの準備を重ねていく方法を検



討しなければならない。学芸グループは企画展、教育普及グループはアトリエでの講座をはじめとする通年事業があるため、その実現は簡単ではないが、まず中間年にも常に横浜トリエンナーレが動いている様子を「見える化」する努力が横浜トリエンナーレを担当する国際グループには求められていくだろう。

国際展を取り巻く環境も世界の状況も急速に変わりつつある。戦争や紛争は世界を分断し、国際展もその影響を受けている。「対話」を可能とする国際展の今日的意義を理念的に訴えることができて、それを実践するのは益々困難になっている。2024年10月にリヨンで開催されたIBAの第11回総会では、「サステナビリティ」と「脱成長」のテーマのもと、文化交流が難しい時代であっても「対話」を絶やさないために、運営方法や取り組み方を変えながら国際展を継続することが検討された。そのような議論の輪に接続しながら、横浜トリエンナーレも横浜美術館という器のなかで持続可能な方法をこれから探っていくことになるだろう。

- 1 特殊法人国際交流基金は外務省所管の特殊法人として1972年に設立され、2003年10月1日に独立行政法人となる。本稿では、以降、「国際交流基金」と略して記載するが、2003年9月30日以前にかかわることについては特殊法人国際交流基金、2003年10月1日以降にかかわることについては独立行政法人国際交流基金を前提としている。
- 2 吉本光宏「トリエンナーレの時代——国際芸術祭は何を問いかけているのか」『ニッセイ基礎研究所報 Vol.58』、ニッセイ基礎研究所、2014年6月、55頁
- 3 Giandomenico Romanelli, “Biennale 1895: the Birth, Infancy and First Acts of a Creature of Genius,” *Venice and the Biennale Itineraries of taste*, RSC Libri & Grandi Opere S.p.A., 1995, p. 21
- 4 南條史生は「横浜トリエンナーレは基本的にドイツのドクメンタ型で」と説明し、「ドクメンタが一人のキュレーターに全権委任するのに対し、横浜トリエンナーレのキュレーションはわれわれ四人のアーティスト・ディレクターが担います」と第1回横浜トリエンナーレのキュレーションの体制について、ドクメンタと対比しながら説明している。  
南條史生「トリエンナーレの楽しみ方」『国際交流第91号』、国際交流基金、2001年4月1日、84頁
- 5 エコミュージアムは「ある一定の文化圏を構成する地域の人びとの生活と、その自然、文化および社会環境の発展過程を史的に研究し、それらの遺産を現地において保存、育成、展示することによって、当該地域社会の発展に寄与することを目的とする野外博物館」と定義される。文部科学省のウェブサイトに掲載されている。  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shougai/014/shiryo/07082703/002.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/014/shiryo/07082703/002.htm) (参照 2024-11-30)
- 6 1999年9月4日の記事「国際美術展で日本発信」(日本経済新聞社、1999年9月4日、朝刊、13版、40頁)では、横浜トリエンナーレを「国の後押しも受けるビッグ・プロジェクト」として、次のように報じている。  
(第1回横浜トリエンナーレの)ディレクターのひとりである南條(史生)は「世界のなかで日本のトリエンナーレは最後発になってしまった」と危機感を募らせる。…(中略)…この十年ほどで日本の周辺でも光州(韓国)、上海、台北、シドニー、ブリスベン(豪)などで創設が相次いだ。南條は「日本は文化の発信という努力を怠ってきた。横浜では我々の視点で世界の美術の状況を開示したい」と熱を込める。…(中略)…こうした発言の背景には「経済力の低下とともに、世界の美術館における日本の存在感が希薄になっている」(塩田純一・東京都現代美術館学芸部長)との焦りが透けてみえる。  
1980年代から90年代にかけて日本の現代アートが世界の舞台に躍り出て注目されるようになったところに比べて日本が後退しているという認識が当時の専門家の間では広がっていた様子がわかる。
- 7 南條史生「トリエンナーレの楽しみ方」『国際交流第91号』、国際交流基金、2001年4月1日、86頁
- 8 南條史生、前掲書、86頁
- 9 会場名は当時のまま。現在、「赤レンガ倉庫1号館」ではなく、「横浜赤レンガ倉庫1号館」という名称になっている。
- 10 当時高校生や大学生だった人のなかには、第1回を経験したことがきっかけとなり、美術専門の道に進んだ人もいる。アート集団「Chim ↑ Pom」のエリイもそのひとりである。2012年5月25日号の『週刊朝日』に掲載されたインタビューで次のように振り返っている。  
私が現代アートと出会ったのは、田園調布雙葉学園に通っていた高校時代です。当時、私は学園始まって以来の問題児。…(中略)…そんな私に新しい道を開いてくれたのがアートでした。高校2年のときに、友達に誘われて行った横浜トリエ

ンナーレ(横浜市内で3年ごとに開催される現代美術の国際展覧会)で、すごく刺激を受けたんです。

<https://dot.asahi.com/articles/-/9165?page=1> (ウェブ記事として再掲、参照 2024-11-30)

- 11 磯崎新が辞任を表明したのは2004年12月4日に多摩美術大学芸術学科建畠ゼミが企画したシンポジウム「横浜会議2004－なぜ国際展か？－」の壇上だった。本シンポジウムの記録は次の書籍に収録されている。  
多摩美術大学芸術学科建畠ゼミシンポジウム企画著・編『横浜会議2004「なぜ、国際展か？」』、BankART1929、2005年9月28日
- 12 展覧会名が「ヨコハマトリエンナーレ2011」とカタカナで表記されるようになるのは2011年以降である。
- 13 横浜トリエンナーレ2008のボランティアが行った「本展関係者インタビュー」のなかの水沢勉へのインタビュー より。  
『アートボランティア 横浜スタイル』、株式会社美術出版社、2009年5月31日、109頁
- 14 前掲書、110頁
- 15 前掲書、111頁
- 16 前掲書、109頁
- 17 2005年12月22日に開催された市民シンポジウム「トリエンナーレ作戦会議V」どうする!?「シティアートの今後～ヨコトリ05から08へ向けての展望を語る」のパネル・ディスカッションに出席した際の川俣正の発言。  
『トリエンナーレからシティアートへ、市民が見た横浜トリエンナーレ2005 横浜シティアートネットワーク市民広報「はまことり」報告書』、財団法人横浜市芸術文化振興財団発行、2006年3月31日、102頁
- 18 前掲書、102頁
- 19 横浜トリエンナーレ2008のボランティアが行った「本展関係者インタビュー」のなかの水沢勉へのインタビューより。『アートボランティア 横浜スタイル』、株式会社美術出版社、2009年5月31日発行、109頁
- 20 『ヨコハマトリエンナーレ2011 キックオフミーティング記録集』、横浜トリエンナーレ組織委員会、2011年3月、20頁  
本記録集は、2011年10月2日と3日の2日にわたり、2011年の第4回に向けて「キックオフ ミーティング」と称し、第1回から第3回のディレクターと意見交換する機会を設けた際のやり取りを収録したものである。
- 21 横浜市長の中田宏が2009年7月に突然辞任した後、2011年1月までの間に創造都市政策の旗振り役だった北沢猛(東京大学教授、横浜市参与)、加藤種男(芸術文化振興財団専務理事)、川口良一(横浜市開港150周年・創造都市事業本部長)の3名が現場を去る。2011年4月の横浜市の組織改編で「文化観光局」が発足した後、同政策は「創造都市推進部」に引き継がれる。
- 22 筆者は、第4回の準備のために横浜トリエンナーレ組織委員会事務局の業務に携わるようになったことを当時の国際交流基金の担当者に伝えた際に「トイレの設置は大変」という申し送りを受けたのを記憶している。
- 23 「建畠哲 オーラル・ヒストリー 第2回 2008年4月12日」『日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴ』  
[https://oralarthistory.org/archives/interviews/tatehata\\_akira\\_02/](https://oralarthistory.org/archives/interviews/tatehata_akira_02/) (参照 2024-11-30)
- 24 『ヨコハマトリエンナーレ2011 キックオフミーティング 記録集』、横浜トリエンナーレ組織委員会、2011年3月、15頁
- 25 高島直之「FOCUS=横浜トリエンナーレ」「美術運動なき時代の美術展の現在形」  
<https://artscape.jp/museum/nmp/artscape/focus/0110/takashima/takashima.html> (参照 2024-12-8)
- 26 たとえば、世界有数のアートフェア「アート・バーゼル」は2000年代に米国のマイアミ、そして、2010年代には香港でも開催するようになり、アジア市場まで手を広げている。
- 27 2013年のヴェネチア・ビエンナーレについて、マッシミリアーノ・ジョーニは「ヴェネチアでは現代美術のいわゆる主流(メインストリーム)とされる領域では見られないアーティストやアウトサイダー・アーティストをキュレーションしたことで多くの人々に驚かれました」とインタビューで答えている。  
「国際展：マッシミリアーノ・ジョーニ氏の場合」『をちこち』国際交流基金(JF)、2016年12月27日  
<https://www.wochikochi.jp/topstory/2016/12/international-exhibitions.php> (参照 2014-11-30)
- 28 開港150周年記念事業を実施するために2007年2月に設立された団体。横浜市、神奈川県、商工会議所等公益団体が計10団体出捐(しゅつえん)している。
- 29 主催者は横浜市と横浜市芸術文化振興財団が構成する「横浜国際映像祭実行委員会」
- 30 横浜市・NHK横浜放送局・横浜市芸術文化振興財団・NHKエンタープライズから構成される「ヨコハマEIZONE実行委員会」主催にて2006年から2008年にかけて3回開催された。
- 31 2004年3月2日のヨコハマ経済新聞は、特集を組み、次のように報じている。  
2002年11月、横浜市内では学識経験者や専門家が集まって「文化芸術・観光振興による都心部活性化検討委員会」を発足した。…(中略)…横浜都心部、特に関内地区には開港以来の西洋文化を感じさせる近代建築の建造物が多く、「横浜らしさ」を考えるうえで近代建築は欠かせない重要なキーワードとなっている。同会では古い建物を新たな方法で活用する「リノベーション」の発想で、旧第一銀行、旧富士銀行をはじめとする歴史的建造物や倉庫を文化や芸術のために活用することを考えた。これがBankART1929の発端だ。このプロジェクト、行政レベルだけで進めるのではなく、文化・芸術に関

して実績のあるNPOを運営主体とする方針で、2003年3月に中間答申が出されたのちの同年11月、公募によりSTスポット横浜(代表:曾田修司)YCCCプロジェクト(代表:池田修氏)の2団体が選ばれた。

「ヨコハマは世界のアートの発信地になれるか?アーティスト支援実験プロジェクトの全容」『ヨコハマ経済新聞』2004年3月2日  
<https://www.hamakei.com/special/1/> (参照 2024-11-30)

- 32 「文化芸術創造都市－クリエイティブシティ・ヨコハマの形成に向けた提言」、文化芸術・観光振興による都心部活性化検討委員会、2004年1月14日、7頁
- 33 2010年3月に発行されたパンフレット「横浜トリエンナーレと創造界隈」のなかで、横浜トリエンナーレの特徴として次の7つの項目が紹介されている。  
(1)クリエイティブシティ・ヨコハマのリーディング・プロジェクト (2)内外への強力な発信 (3)まちづくりとの連動 (4)まちなかへの展開 (5)若手アーティストの発掘育成 (6)市民協働の推進 (7)地域資源の活用
- 34 芸文財団の組織は財団運営を担う事務局と施設から構成されている。
- 35 木村絵理子はこの経験をもとに紀要を執筆している。「国際現代美術展の成立と展開－横浜トリエンナーレが示した可能性」『横浜美術館研究紀要』第8号、横浜美術館(横浜市芸術文化振興財団)、2007年
- 36 なお、芸文財団が組織委員会の構成員として名を連ねるのは第5回からである。第4回は横浜市、NHK、朝日新聞社の3者のみの組織委員会で開催した。
- 37 みなとみらい線の開業に伴い閉鎖された東急東横線の桜木町駅舎を利用して作られたアートスペース。2007年9月より2010年3月まで暫定的な文化拠点として利用された。活動終了後の4月より、組織委員会が事務所として借り上げ、国際交流基金から資料を移管した。
- 38 『ヨコハマトリエンナーレ2011 キックオフミーティング 記録集』、横浜トリエンナーレ組織委員会、2011年3月、20頁
- 39 国際セミナー「接続する国際展・芸術祭」実務者ワークショップ「国際展・芸術祭の現場の声」は、2017年9月27日にIBAの総会開催に合わせて実施し、米国、カナダ、キューバ、パキスタン、トルコ、マリ、アラブ首長国連邦、英国、イタリア、インド、スロベニア、ドイツ、中国、ナイジェリア、日本、バングラデシュ、ブラジルの計17か国より計31名の国際展主催者が集まり開催された。本セミナーの記録は次に収録されている。  
『ヨコハマトリエンナーレ2017 国際セミナー「接続する国際展・芸術祭」記録集』、横浜トリエンナーレ組織委員会編、2018年3月
- 40 『ヨコハマトリエンナーレ2017 国際セミナー「接続する国際展・芸術祭」記録集』、横浜トリエンナーレ組織委員会編、2018年3月、32頁
- 41 前掲書、39頁
- 42 前掲書、41頁
- 43 前掲書、49頁
- 44 前掲書、48頁
- 45 本稿では断片的な資料を集めて概観できるように整理することを試みたが、まだ不明瞭な点が残っているため、今後も資料収集や調査を継続し、必要に応じて加筆修正していくことが求められる。
- 46 『ヨコハマトリエンナーレ2011 キックオフミーティング 記録集』、横浜トリエンナーレ組織委員会、2011年3月、23頁



# 大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群に見るイサム・ノグチと大谷幸夫による設計過程—中 原案の変更と未完に終わった三位一体のランドスケープ・デザイン

中村 尚明

## はじめに

イサム・ノグチが大谷幸夫と共同して設計した「こどもの国」の児童館・A地区児童遊園の図面とスケッチ類計157点が、オリジナルの石膏全体模型1点と関連写真アルバムと共に2023／2024両年度に大谷研究室から横浜美術館に寄贈された。イサム・ノグチ研究では、「こどもの国」は初めて実施に至ったノグチのプレイグラウンド作品として知られているが、作品の最終的な実施状態は不明とされ、ノグチの参画前後から工事終了までの建設プロジェクトの歴史も殆ど知られていない。論者はこれら「大谷研究室旧蔵『こどもの国児童館・A地区児童遊園』資料群」(以下「大谷研究室資料群」)の調査を進めており、①資料の分類と目録化、②プレイグラウンドまたはランドスケープ・デザインとしての作品の全体像の把握とその実施状況を含む記述、③こどもの国における児童館・A地区児童遊園の建設プロジェクトの史実解明を目標としている。小論「上」では図面資料を目的別に分類し大凡の年代的展開を把握した上で、イサム・ノグチが1965年9月から同年末までに大谷幸夫チームと共同してデザイン原案を完成させたことを明らかにした<sup>1</sup>。それは児童館とスケートリンクを包摂し、各種のオリジナル遊具と敷地造成からなる児童遊園のランドスケープ・デザインであった。この小論「中」では建設プロジェクトが着工された1965年末／1966年初頭から、事実上の終了を迎える1968年半ばまでの期間を主な対象とし、以下の二つの観点から目標②と③に取り組む。

1章では、大谷研究室資料群の作図時期の異なる全体配置図を分析しながら、原案変更のプロセスを施工の対象と範囲の変化として記述する。併せてイサム・ノグチと浅田孝、大谷幸夫チーム(設計連合)との連絡を確認することで設計と施工の現場における課題に注目し、その図面への反映を確認しながら原案変更の範囲と理由を明らかにする。その中で変更プロセスにおけるイサム・ノグチの関与を跡付ける。

2章では、建設主体であった財団法人こどもの国建設協力会(以下「建設協力会」)の本件関連文書(文化庁国立近現代建築資料館蔵)を主な典拠として、児童館、A地区児童遊園の施設整備事業の歴史をその計画段階から辿り、事業の性質と計画変遷がイサム・ノグチと大谷幸夫の設計作業に与えた影響を確認しながら、前章の図面分析と関連づけて作品の最終的な実施状態を明らかにする。3章では前二章を踏まえて大谷幸夫の回想文を解釈し、建設事業終息の背景を考察する。そして今日僅かに残るA地区児童遊園の遺構の現状を踏まえて、大谷研究室資料群の意義を記す。小論の目標①である大谷研究室資料群の目録は次稿「下」に掲載する予定である。

1 拙稿「大谷研究室旧蔵『こどもの国児童館・A地区児童遊園』資料群に見るイサム・ノグチと大谷幸夫による設計過程—上」(以下、小論「上」または「上」と略記)『横浜美術館研究紀要』第25号、2024年、横浜美術館、p.25-105、p.122-123。

## 1 全体配置図の変遷に見るイサム・ノグチのA地区児童遊園原案の変更と実施範囲の確認

### 1-1) 原案後の二つの配置図原図と複数の複写図 - 変貌する原図

最初に大谷研究室資料群における手描きの全体配置図(原図)とその複写(青焼、ジアゾタイプ)の関係について確認しておきたい。小論「上」では1965年11月末のイサム・ノグチ離日までに完成したデザイン(石膏全体模型及び全体配置図、「上」fig.13、21)を原案と確認した。その原案が後日変更されたことを示す、手描き(鉛筆、トレーシングペーパー)による全体配置図を「原案後の配置図原図」とする。大谷研究室資料群では、原案後の配置図原図が2点確認できる。

その1点目は小論「上」で紹介した、図番入りでリストに掲載された実施設計図《002配置図》(PL.3)である<sup>2</sup>。小論「上」では、スケートリンクと児童館を含むA地区児童遊園の全体配置図について、石膏による全体模型と一致する原案配置図(ノグチ・アーカイヴ蔵の青焼)を《旧002配置図》(「上」fig.21)と呼び、これとは部分的に異なる《002配置図》と区別していた。しかし、これら2点の図面の細部を詳細に確認した結果、両者の標題欄のスタンプの位置やインクの擦れ、図中の手書きの書き込み等の細部が正確に一致することが認められた他(fig.1)、《002配置図》には消しゴムで消された原案の一部(スベリ台部分など)が残っていた。これらから、《旧002配置図》は《002配置図》の修正前の姿を青焼複写したものと判明した。即ち《002配置図》は原案のオリジナル図面(青焼《旧002配置図》の原図)そのものであったが、北西部の敷地輪郭(位置修正)やスベリ台、三角砂場などを消しゴムで消して描き直し、完成図面としたものであった。したがってかつての原案配置図であったこの《002配置図》は、ノグチの次の来日期间(1966年4月)までの設計変更を部分修正によって反映させた、原案後の配置図原図の1点目なのである(以下「配置図原図1」)。こうして原図から消えてしまった1965年11月末の原案は、ノグチ・ミュージアムの青焼と大谷研究室資料群の石膏全体模型によって残されたことになる。原案から修正された配置図原図1には、イサム・ノグチの署名と大谷幸夫の印(ゴム印)が入れられた。これを原図として再び新たな青

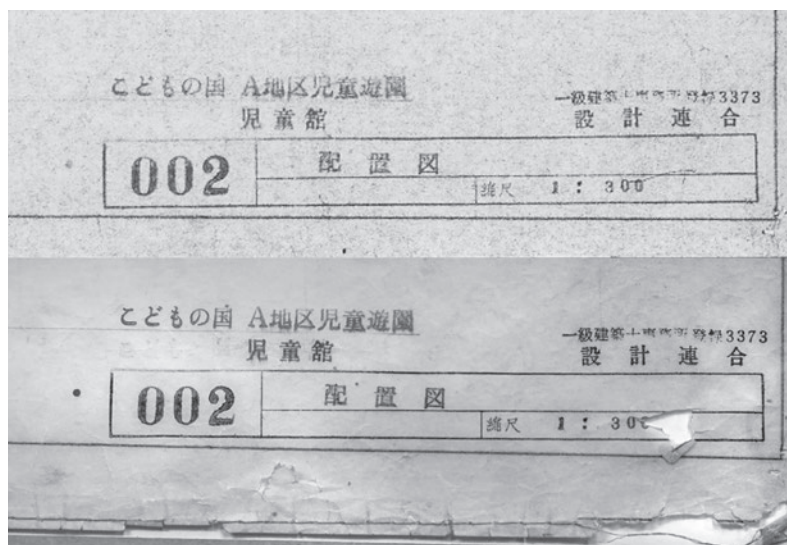


fig.1 《旧002配置図》(上)と《002配置図》の表題部分拡大  
Title part of <002 Site Plan> above: blue print of the original state (1965)/ below: the original drawing of the final state (September 1966). The blue print in the Isamu Noguchi Archive CR585.21a is identified with the original state of <002 Site Plan> in YMA Otani Associates Kodomo No Kuni Collection.

2 「実施設計図」は大谷幸夫チーム(設計連合)で作図した施工用の完成図を指す。大谷研究室資料群には、児童館、A地区児童遊園それぞれにつき図番と設計者の印または署名入りの実施設計図をリスト化してまとめた図面グループがある(小論「上」p.28、B群f参照)。こどもの国建設協力会はA地区児童遊園の「基本設計」をノグチに、「実施設計」を大谷幸夫チーム(設計連合)に委託していた。以下2章参照。



焼(即ち《002配置図》の複写)が起こされている(ノグチ・アーカイヴ蔵、inv.CR585\_20\_original\_1)。

原案以降の配置図原図の2点目は、大谷研究室資料群中の無番の《配置図》で、イサム・ノグチの署名、大谷幸夫の印(ゴム印並びに朱文丸印)と、鉛筆書きで1966年6月2日、8月15日、9月12日、9月27日の4つの日付をもつ(fig.2、以下「配置図原図2」)。配置図原図1と同様、配置図原図2にも古い状態を示す複写が存在する。大谷研究室資料群中の1966年6月2日付のジアゾタイプによる《配置図》(以下「ジアゾタイプ配置図」、fig.3)がそれで、図面右下隅の日付(「41.6.2」)の筆跡、表題欄のスタンプのズレやインクのにじみ、図面中の細部の書き込みから、9月27日の最終日付をもつ配置図原図2の最初の状態を示すと判断される(但し児童館は床伏図)。1966年6月2日の段階ではノグチのサインも大谷の印もない。また8月15日と9月12日の状態を示す複写は見つからない。一方、9月27日段階の配置図原図2と同一の内容で、ノグチのサイン、大谷の印の入った青焼がノグチ・ミュージアムに所蔵されている(inv.CR585\_18)。興味深いことにこの青焼と配置図原図2では、児童館は屋根伏図として描かれているが、ノグチ・ミュージアムには児童館のみを床伏図とし、それ以外の部分は4つの日付、ノグチのサイン、大谷の印を含めて配置図原図2と同じ青焼(CR585\_19、fig.4)も残されている。これは配置図原図2が1966年9月27日以降、児童館床伏図のまま一旦青焼に複写され、その後屋根伏図に描き直されて再度複写されたと判断される。配置図原図2では児童館の一部に床伏図の消し残りが確認できる。

## 1-2) 原図と複写の関係から見る作図時期の推定

以上の配置図群(原図及び複写)のノグチのサインの有無と彼の滞日時期を照合することで、日付の付されていないA地区児童遊園関連図面のいくつかの作図時期を推定することができる。

ノグチ原案を示す《旧002配置図》青焼にはノグチのサインも大谷の印もなかった。従ってその複写時期は1965年11月27日のノグチ離日以降と考えられる。配置図原図1、即ち実施設計図《002配置図》にはノグチのサインと大谷のゴム印があるので、ノグチの次の来日期間中、1966年4月3日から4月19日までの間に署名されたとみられる<sup>3</sup>。先述の通り原案から少なからぬ変更が行われており、これらはすべて4月滞在期間中の作業であったとみてよい。一方、配置図原図1《002配置図》と共にリスト化された原案のA地区児童遊園遊具の詳細図群(小論「上」の完成図面：図番301-310)は、大谷研究室資料群の原図、ノグチ・ミュージアム所蔵の青焼のいずれにもイサム・ノグチの署名がある<sup>4</sup>。これらは配置図原図1と同じ1966年4月に署名されたと考えられるが、主に図面を作成した藤田皓一氏が、粘土模型の制作と並行して作図したと証言していること<sup>5</sup>、《旧002配置図》青焼にノグチの署名がないこと、これらの遊具詳細図はいずれも原案のままであることを踏まえると、むしろ遊具詳細図の原図は配置図に先行して完成し、1965年11月末のノグチ離日前に署名された可能性が高い。

3 『こどもの国ニュース』7号(ノグチ4月3日来日)、財団法人こどもの国建設協力会編、1966年5月10日発行／浅田孝発ノグチ宛書簡1966年4月23日付(ノグチ4月19日羽田出国)、ノグチ・アーカイヴ蔵(The Isamu Noguchi Archive, The Isamu Noguchi Museum and Garden Museum, New York) inv. MS\_PROJ\_041\_013\_original\_1

4 これら遊具図面に大谷幸夫の印がないのは、事業区分上の設計者名がA地区児童遊園はイサム・ノグチ、児童館が大谷幸夫に振り分けられていたためと思われる。児童館実施設計図面群には大谷の印のみでノグチの署名はない。配置図は両事業共用のため両者の署名／印をもつ。

5 小論「上」p.37-38

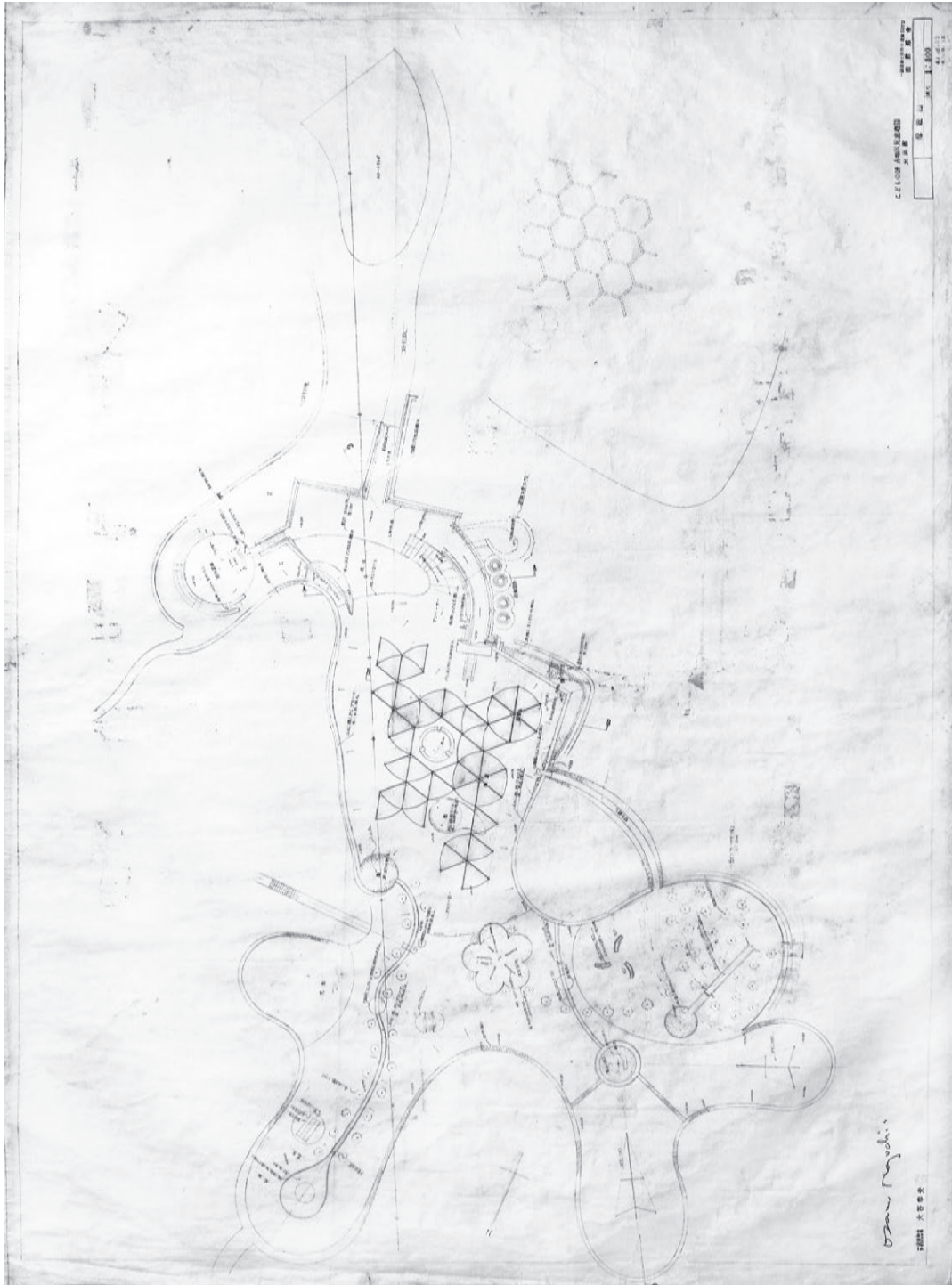


fig.2 イサム・ノグチ、大谷幸夫《こどもの国A地区児童遊園 児童館 配置図》(配置図原図2)、作図：大谷研究室(旧設計連合)、1966年6月2日／8月15日／9月12日／9月27日、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、78.2×107.9cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群(撮影論者)

Isamu Noguchi, Sachio Otani (Site Plan of Playground and Children's House in Zone A of the Kodomo No Kuni) (Second Original of the altered Site Plan) Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), June 2, August 15, September 12, September 27, 1966, pencil, ink on tracing paper, 78.2×107.9cm, YMA Otani Associates Kodomo No Kuni Collection (photo by the author)



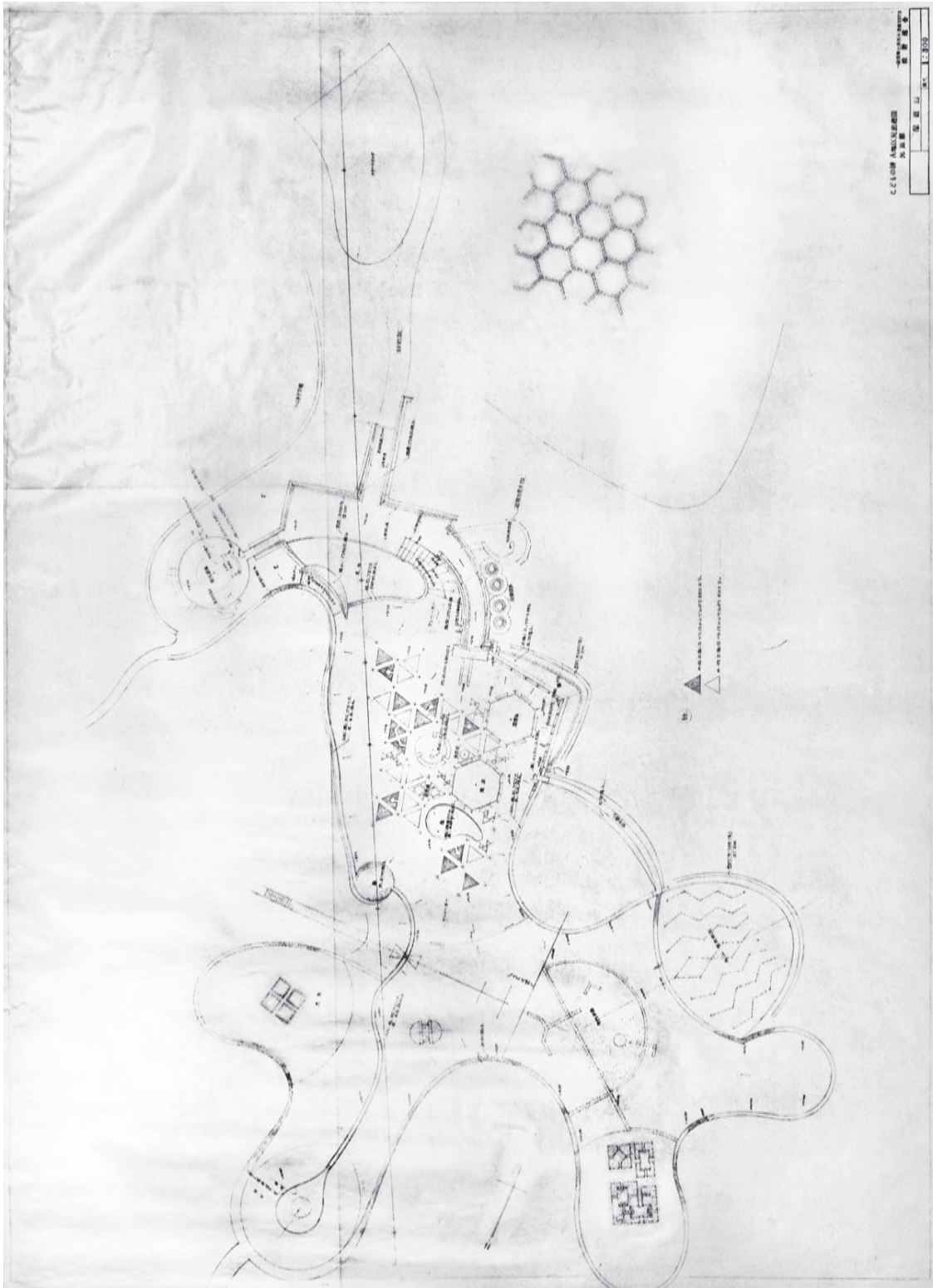


fig.3 イサム・ノグチ、大谷幸夫《こどもの国A地区児童遊園 児童館 配置図》(ジアゾタイプ配置図)、作図：大谷研究室(旧設計連合)、1966年6月2日、ジアゾタイプ、79.0×108.0cm(表裏反転して掲載)、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群(撮影論者) Isamu Noguchi, Sachio Otani <Site Plan of Playground and Children's House in Zone A of the Kodomo No Kuni> (Diazotype Site Plan) Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), June 2, 1966, diazotype (sepia diazo), 79.0×108.0cm (inverted illustration), YMA Otani Associates Kodomo No Kuni Collection (photo by the author)

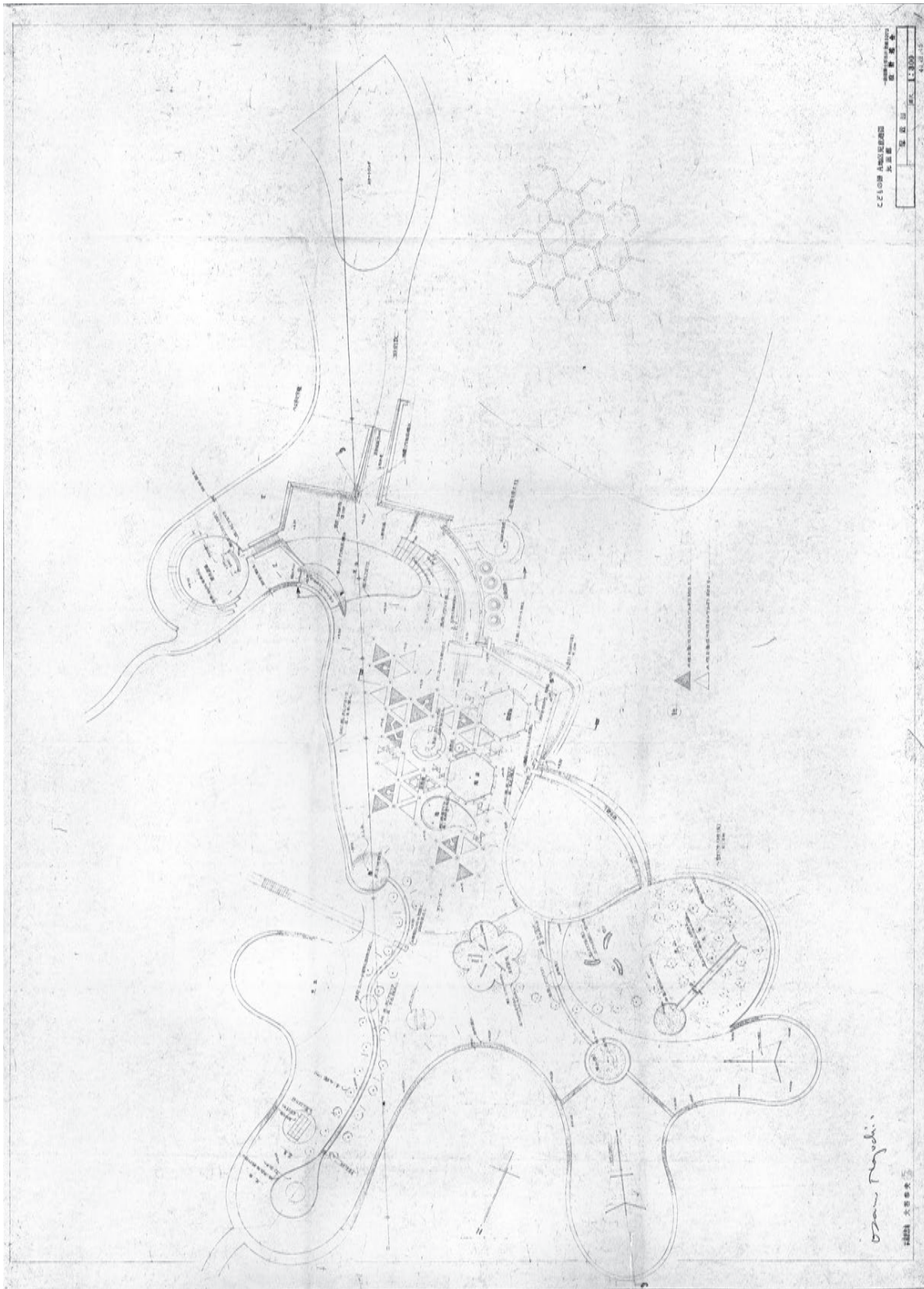


fig.4 イサム・ノグチ、大谷幸夫《こどもの国児童館・A地区児童遊園 児童館配置図》(児童館床伏図)、作図：大谷研究室(旧設計連合)、1966年6月2日  
 /8月15日/9月12日/9月27日、青焼、ノグチ・アーカイヴ蔵、inv. CR585.19  
 Isamu Noguchi, Sachio Otani 〈Site Plan of Playground and Children's House in Zone A of the Kodomo No Kuni〉 (Floor Plan version)  
 Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), June 2, August 15, September 12, September 27, 1966, blueprint, The Isamu  
 Noguchi Archive, CR585.19, ©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York/Artists Rights Society/JASPAR



A地区児童遊園実施設計図一式(図番002、301-310、「上」fig.49、50、52-54、56-57、61、PL.4)の表紙となる《300図面リスト》(A地区児童遊園実施設計図一覧表、fig.5)には《301スベリ台》から《309ブランコ》までの遊具詳細図9点が掲載されているが(《310ブランコ詳細図》はリストに含まれていない)、《302池、橋、ジャングルジムA詳細図》、《303野外劇場詳細図》、《308三角砂場詳細図》の3点以外は、すべてリスト上に鉛筆の二重横線が引かれ、欄外に「欠番」と記されている。これら6点のリストからの削除は、原案完成後ほどない1965年12月頃行われたことが建設協力会文書から読み取られるが、詳細は次章で述べる<sup>6</sup>。

図面番号	図面名称	縮尺
001	特記仕様書	
002	配置図	1:800
301	スベリ台 詳細図	1:50 1:300
302	池、橋、ジャングルジムA 詳細図	1:10 1:100
303	野外劇場 詳細図	1:20 1:100
304	亀ノ子砂場 詳細図	1:100
305	ジャングルジムB 詳細図	1:50
306	ピラミッド 詳細図	1:50
307	原始部落 詳細図	1:50
308	三角砂場 詳細図	1:100
309	ブランコ 詳細図	1:40 1:100

fig.5 《こどもの国A地区児童遊園 300図面リスト》(部分)、作図：大谷研究室(旧設計連合)、1965-1966年、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、55.0×80.0cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群  
Otani Associates (former Sekkei Rengo) <300 List of Drawings, Playground in Zone A of the Kodomo No Kuni> (detail), 1965-1966, pencil, ink on tracing paper, 55.0×80.0cm, YMA Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

以上を整理すれば、児童遊園実施設計図面一式は原案に基づき1965年末頃までにまとめられ、その際《002配置図》は原案の状態であった。その直後に建設対象の見直しが行われ、遊具詳細図6点が欠番とされた。着工後、翌年4月のノグチ来日時に《002配置図》の変更作業が行われたのである。遊具詳細図は3分の2が欠番とされたものの、図面としては9点とも原案のままのこされた。それは基本設計者であるノグチの成果物を実施設計図として示す必要だけでなく、先々の実施可能性を意識した建設協力会と大谷ら設計サイドの配慮ではないと思われる。さしあたり1965年末の段階で《301スベリ台詳細図》、《304亀ノ子砂場詳細図》、《305ジャングルジムB詳細図》、《306ピラミッド詳細図》、《307原始部落詳細図》、《309ブランコ詳細図》が欠番とされ、当面の建設対象から除外された。

ノグチの署名入りの配置図原図1は、1966年4月の来日時に原案の大幅な変更を彫刻家が行なったことを示している。実施設計図としてまとめられた配置図原図1はこうして《002配置図》となって完結し、その後の変更には新たな配置図原図2が描き起こされたのである。

配置図原図2の最初の状態、《ジアゾタイプ配置図》には先述の通り1966年6月2日の日付がある。この時期にノグチは来日しておらず、彫刻家は1966年4月末以降、後述する浅田孝との書簡のやり取りでいくつかの新たな変更を提案して認められた。その結果をまとめたものが6月2日付け《ジアゾタイプ配置図》と考えられる。その後ノグチが来日するのは1966年9月1日で、同年11月1日に離日している<sup>7</sup>。配置図原図2にある4つの日付の内、9月12日と9月27日はノグチの滞日期间中であり、同図への署名はこの期間中に行われたとみることができる。

6 こどもの国協第50号「昭和40年度『こどもの国児童遊園施設整備』事業の計画変更申請書」昭和40年12月28日、文化庁国立近現代建築資料館蔵(以下「NAMA」)17-4-5(NAMA資料番号。以下略)

7 イサム・ノグチのパスポート(1966年発行)の出入国スタンプ(羽田)による。ノグチ・アーカイヴ蔵 inv. MS\_BIO\_010\_004\_original\_1



### 1-3)配置図原図1に見る1966年4月段階でのイサム・ノグチによる児童遊園原案の変更

4か月ぶりに来日したイサム・ノグチを交えて、既に工事の始まっていた児童館・A地区児童遊園の現場を確認しつつ原案設計の検討が行われた。《旧002配置図》の段階に比して配置図原図1《002配置図》では以下のよう  
に原案からの多岐にわたる変更が認められる。

#### ①スケートリンクの位置を西へ平行移動：

スケートリンクは1966年1月に開園している(但し付属施設は1966年度の施工)ので、実際の施工位置に合わせて図面を修正したものと思われる。《002配置図》にはうっすらと修正前のスケートリンク輪郭が残っている。

#### ②児童館入り口通路擁壁の長さ変更：

スケートリンクと児童館東のサンクンガーデン(前庭)を結ぶ通路は、東西に間知石積の擁壁が、原案では東西同じ長さで配されていたが、《002配置図》では東西非対称に短縮された。東壁が短く、西壁がやや長い。

#### ③サンクンガーデン西側の既存のトンネル入り口を擁壁で閉鎖。

#### ④児童館門の形状を、多角形から半円筒形に変更。

#### ⑤サンクンガーデン東の野外劇場の階段が短縮され、衝立を薄型に変更、客席を5段から4段に変更。

#### ⑥サンクンガーデン北側の築山を短縮。

#### ⑦児童館東側の丘に沿った敷地境界線擁壁を廃し、境界線の小川のルートを変更。併せてこれと接続する池2を拡大し、池1と統合。

#### ⑧児童館の三角屋根と床を東南端に2基追加、丸山東側の1基を削除。

#### ⑨児童館図書室南西の崖の上辺位置変更。石積を中止し、上辺のみモルタル金鍍仕上げに変更。

#### ⑩児童館西の切通の路面を玉砂利敷からアンツーカーに変更。

#### ⑪岩山の位置を北東方向にずらし、舌状形プランの横幅を拡大して二枚貝の形に近い輪郭とした。東側のボーダー(境界)は幅を50cmから100cmに拡大。また、斜面に分散配置する岩を廃し、書き込み記述にはないが本図と大谷研究室資料群の1966年8月15日付《標準断面図》から判断して、複数のポールを立てて登攀ロープを張る方式に変更したようである。

#### ⑫岩山北東部に予定されていた複線式スベリ台を廃し、岩山のボーダーに接続する舌状形の輪郭のボーダー(幅100cm)を設け、おおむね11.0の等高線に副って敷地を定めるにとどめている。これに伴いスベリ台と接続していたこどもの国外周路からA地区児童遊園への連絡路はなくなり、当該敷地もやや縮小した。

#### ⑬原始部落の敷地輪郭が北に延長された。原始部落遊具施設的位置は変わらないものの、輪郭線が実線から点線に変更された。スベリ台のように消去されたわけではないが、原案に記されていた「原始部落」の文字は消えて、「芝生」と記されている。

#### ⑭三角砂場を半円砂場に変更。これはスベリ台消去と共に原案からの最も大きな変更である。小論「上」で見たように、三角砂場は児童遊園北部の中心となる施設で、空間構成上も三角形の頂点が岩山、原始部落、プランコを結びつける枢要な位置を占めていた。半円形となったことで、円弧の頂点は岩山の東辺円弧の頂点と軸上で向き合い、半円北側の頂点は原始部落を指し、砂場東辺(直線部分)上の彫刻の一端はプランコの軸線を示している。これらは三角砂場の空間構成上の役割を引き継いだものである。形態変更の理由

のひとつを図面から推測すると、スベリ台の消去に伴い北西端の敷地が空いたことを受けて、三角砂場よりも大きな砂場を置こうとしたと考えられる。三角形の単純拡大では構成上の役割が損なわれるため、イサム・ノグチは舌状形モチーフに近い半円形を選んだのではなかろうか。彼は《リヴァーサイド＝ドライブ・プレイグラウンド》のためにも半円形の砂場《砂の迷宮》(1961-62年：「上」fig.27)を構想している。また、砂場に付随する彫刻の形状も変更されている。スベリ台消去はさておき、変更された砂場のデザインと配置はノグチ本人によるものと考えられる。

- ⑮半円砂場の北側頂点から、原始部落敷地正面両端のボーダーに向かって2本の砂利道(幅2,000mm)が設置された。砂場周囲の敷地は「転圧の上アンツーカー仕上げ」の指定があるので、雨水を通す意図があったと思われる。但し小川の場合のように二重線の縁取りがないことから、通路をごく浅く掘り込んで砂利を敷くもので、水路と呼ぶほどの深さはないと思われる。因みに砂場周辺の敷地には水流を示す小さな矢印がいくつか書き込まれている。これは原案《旧002配置図》の段階ではみられなかったもので、後述する排水問題への対応がこの時点で図面に反映されているものと考えられる。
- ⑯北東部のジャングルジムAの周囲のボーダー(砂利道)が北端に向かって最大2,500mmまで徐々に拡幅され、一端にこどもの国外周路からつながる小道が接続された。原案ではジャングルジムA周辺のボーダーは閉じられていたので、スベリ台消去で失われた外周路からの連絡路を新たに設けたものと考えられる。また、ジャングルジムAが砂場上に建つ点は変わらないが、原案では砂場の周囲が他の敷地と同じくアンツーカーであったのに対し、新たに芝生帯を砂場の周囲に廻し、アンツーカーのゾーンと区別した。
- ⑰ピラミッド(ジャングルジムAの東南)の敷地はアンツーカーであったが、舌状形の敷地全体が芝生に変更された。ピラミッドの輪郭は点線に変更され、ピラミッドの文字が消されて芝生とのみ標記された。
- ⑱ジャングルジムA敷地から池1に繋がっていた小川のルートが池1、池2の統合に伴ってやや変更され、両岸の桜の植樹の位置も修正された。併せて「跳越え橋」の位置も、ピラミッド敷地前からブランコと隣接地区に繋がる階段の軸線上に変更された。

以上のように、配置図原図1で注目されるのはまずスベリ台の消去であり、これに伴って三角砂場が一回り大きな半円砂場に変更された。実線標記から点線表記に変更された原始部落とピラミッドは先に見た通りスベリ台、亀ノ子砂場などと共に当面の施工対象から外されたことを示している。図面の変更作業は全体として構成を慎重に考慮しながら行われており、イサム・ノグチの主導の下に行われたといえよう。ジャングルジムB(北東部小川近く)と亀ノ子砂場(スケートリンクの西)はこの図面では原案のまま残されている。

#### 1-4) イサム・ノグチ発1966年4月29日付浅田孝・田中正雄(設計連合)宛書簡に見るノグチ帰国後の提案と砂場周辺の排水問題

1966年4月の2週間余りの滞在で「こどもの国」工事現場を具に見、配置図原図1で上記のような原案変更を行ったイサム・ノグチは、帰国早々浅田孝と設計連合の田中正雄宛に次のような提案を書き送っている。(引用文中の( )は原文、[ ]は論者補。以下同)

浅田宛書簡抜粋(1966年4月29日付)

「同封された田中さん宛ての手紙とスケッチを彼に渡す前に読んでください。あなたがご同意くださるなら、建築部分[児童館]で私がリクエストしている変更を実施するよう彼に頼んで下さい。

砂場と“まんじゅう”山[岩山]を含む児童遊園エリア全体は、私が次回戻ったときに再検討できるように未完のまま残してもらいたいと思います。私が特に心配しているのは排水で、それがデザイン上の問題になることは不可避と思うからです。』<sup>8</sup>(論者訳)

田中宛書簡抜粋(1966年4月29日付)

「私は今も排水について考えていますが、初めに考えていたよりもはるかに困難であることがわかってきました。大切なのは、プレイエリア[児童遊園用地]内の建設工事を始める前に、この問題を解決しなくてはならないことです。

そこで、用地に高低差をつけることに最善を尽くすよう提案します。そのあと、放置して雨天の状態を観察するのです。

ラフスケッチを同封します。そこには二つの小川(点線のところ)が描かれており、砂場の方に流れ込むようになっています。砂場の地盤は、砂場と南に向かう小川に挟まれた土地よりも低くならないようにしてください。水はその川に流れ込む必要があります。このように基本的な高低差が最初に作られるべきだと思います。そうして、割り当てた高さが見た目に低すぎる場合(例えば砂場周囲の土地)には、後で多孔質の砂利で埋めることにしたいと思います。

このような難題を考慮すると、砂場と“まんじゅう”山[岩山]は、完成させずに私が戻るまで手付かずにしておくのがより良い策であろうと確信します。

エントランス・エリア[児童館アプローチ部]と建築群[児童館]は、もちろん工事を進めてください。この部分については、建物エリア(屋根の下の部分を含めて)にもっとあそび心を加えたいと思います。同封のスケッチをご覧になると、水遊び池[配置図原図1の池3]を変更したのがお分かりになります。これで水遊び池は屋根の下に入り、前の案よりも堅い感じがなくなるでしょう。他にも遊びの要素を加えました。例えば座るプラットフォームの内側に通路を入れました。マウンド[丸山]には穴を開けて複数のトンネルを通したいと思います。これらの変更のいくつかについて、私が不在のため困難があるようでしたら、私が戻るまでお待ちください。』<sup>9</sup>(論者訳)

田中宛の書簡は浅田宛のものと同封されて浅田に送付された。両文中のラフスケッチと思われる配置図略図が、2006年の論者による調査当時、こどもの国協会にこの浅田宛書簡と共に保存されていた(fig.6: 但し論者による複写物)。ノグチのサインと、浅田・田中宛書簡と同じ1966年4月29日の日付があり、内容からこれらふたつの書簡で言及されたラフスケッチであると確認できる。以下、ラフスケッチを参照しつつ書簡のポイントを整理したい。

8 ノグチ・アーカイヴ蔵 inv. MS\_PROJ\_041\_014\_original\_1

9 ノグチ・アーカイヴ蔵 inv. MS\_PROJ\_041\_015\_original\_1

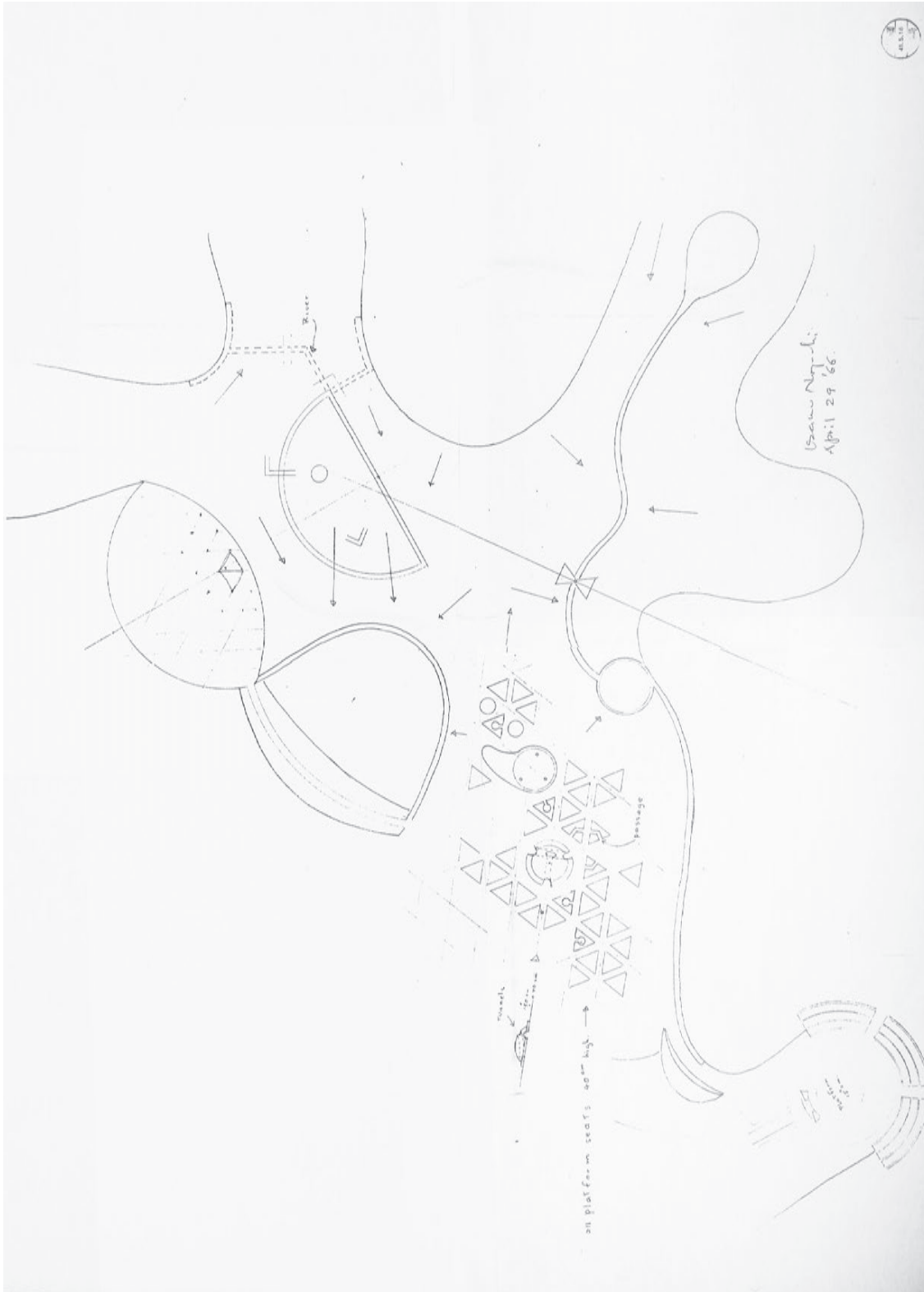


fig.6 イサム・ノグチ《こどもの国A地区児童遊園ラフスケッチ》1966年4月29日、インク、紙、社会福祉法人こどもの国協会蔵(2006年当時)、論者によるゼロックスコピーを貼り合わせて再構成したものを掲載。  
Isamu Noguchi (Rough Drawing of Kodomo No Kuni Playground) April 29, 1966, ink on paper. The original was enclosed with IN letters to Takashi Asada and Masao Tanaka of the same date. Photo-copied from the original and reconstructed by the author. The original was in the collection of the Social Welfare Service Corporation Kodomo No Kuni Kyokai in 2006.



## ①児童遊園敷地の排水問題

A地区児童遊園(児童館を含め)予定地には、イサム・ノグチに依頼される前の段階では「渡渉池(または徒渉池)」と「大砂場」が予定されていた<sup>10</sup>。これは予定地がもともと「沢地」と呼ばれていたことと無関係ではないだろう<sup>11</sup>。実際工事が始まってみると、排水が特に児童館より北側、三角砂場から北西側の地域で大きな問題として浮上してきたことが上の二つの書簡から読み取られる。ノグチは砂場と岩山の施工を見合わせて、児童遊園用地の高低差工事を優先するよう要請している。

書簡に添付されたラフスケッチを見ると、児童館より北の児童遊園用地部分に、水の流れを示すと思われる大きな矢印が多数書き込まれている。スベリ台と原始部落は描かれておらず、敷地の輪郭(ボーダー)が途中で切れている。原始部落敷地を挟む東西の丘の輪郭から半円砂場の北の頂点に向かって点線で川(River)が描き込まれている。そのルートは配置図原図1の砂利敷通路に近いが、西側の川は丘から東進して途中で半円砂場の弦に向かって鈍角に曲がっている。田中宛書簡中の「南に向かう川」とは、児童館西の切通のある丘の輪郭に設けられた小川を指すと思われる。砂場とその周囲の水はこの小川に流れるように矢印で示される。また、ジャングルジムA敷地から池2に向かう小川にも、その両側から流れ込む水が矢印で示されている。

大谷研究室資料群の半円砂場詳細図《R-20(旧三角)砂場詳細図》(1966年5月18日、同5月30日付。fig.7)には、小川はノグチのラフスケッチの通り正確に描き込まれている。このR-20図面には5月後半の日付があることから、配置図原図1に基づき半円砂場の詳細図として作図され、4月29日付ノグチ書簡を受けて修正されたと思われる。ノグチの提案が最終決定されるのは後述するように6月に入ってからだが、設計現場ではいち早く図面に反映されたことになる。この詳細図中右上の配置図部分を見ると、ラフスケッチと同じく砂場周辺の水の流れが矢印で詳細に記されている他、地盤レベルも各所に書き込まれ、ノグチ書簡の指示に副って地盤高低差を詳細に指定している。何より特筆されるのは、原案の《308三角砂場詳細図》(「上」fig.50)では砂場のボーダーがコンクリートの縁取りのみであったのに対し、半円砂場詳細図では砂場のコンクリート縁取りに沿って幅60cm、深さ15cmの小水路が巡らされ、さらにこの小水路を南に延長するべく、半円砂場南端に発し、切り通しのある丘のボーダーに沿って南へ向かう小川に接続する小水路が追加されていることである。この小水路はラフスケッチには描かれておらず、設計サイドによる追加とみられる。ちなみに半円砂場が初めて描かれた配置図原図1では、半円砂場のボーダー周縁の小水路は描かれていない。従って半円砂場周囲の小水路はR-20の詳細図で初めて描かれたのである。加えてR-20図面上には水上、水下の数値が描き込まれている。《308三角砂場詳細図》でも地盤の高低差は描かれていたが、隣接地を含む水勾配や排水設備の表現は見られない。4月来日時に排水問題に直面したノグチと大谷幸夫チームは、原案の三角砂場を半円砂場に変更し、さらに帰米後のノグチ書簡を受けて、半円砂場を手直しして排水機能を強化したのである。砂場をめぐるこれら一連の作図作業から、敷地の排水問題が原案変更の重大な契機となったことが読み取られる。児童遊園北部の構成の要である砂場を中心とする区域の排水問題が解決しない限り、周囲の岩山やブランコ等の工事には着手できないというのがノグチの判断であった。その後の工事は

10 小論2章参照

11 社会福祉法人こどもの国協会『こどもの国30年史』1996年、p.378



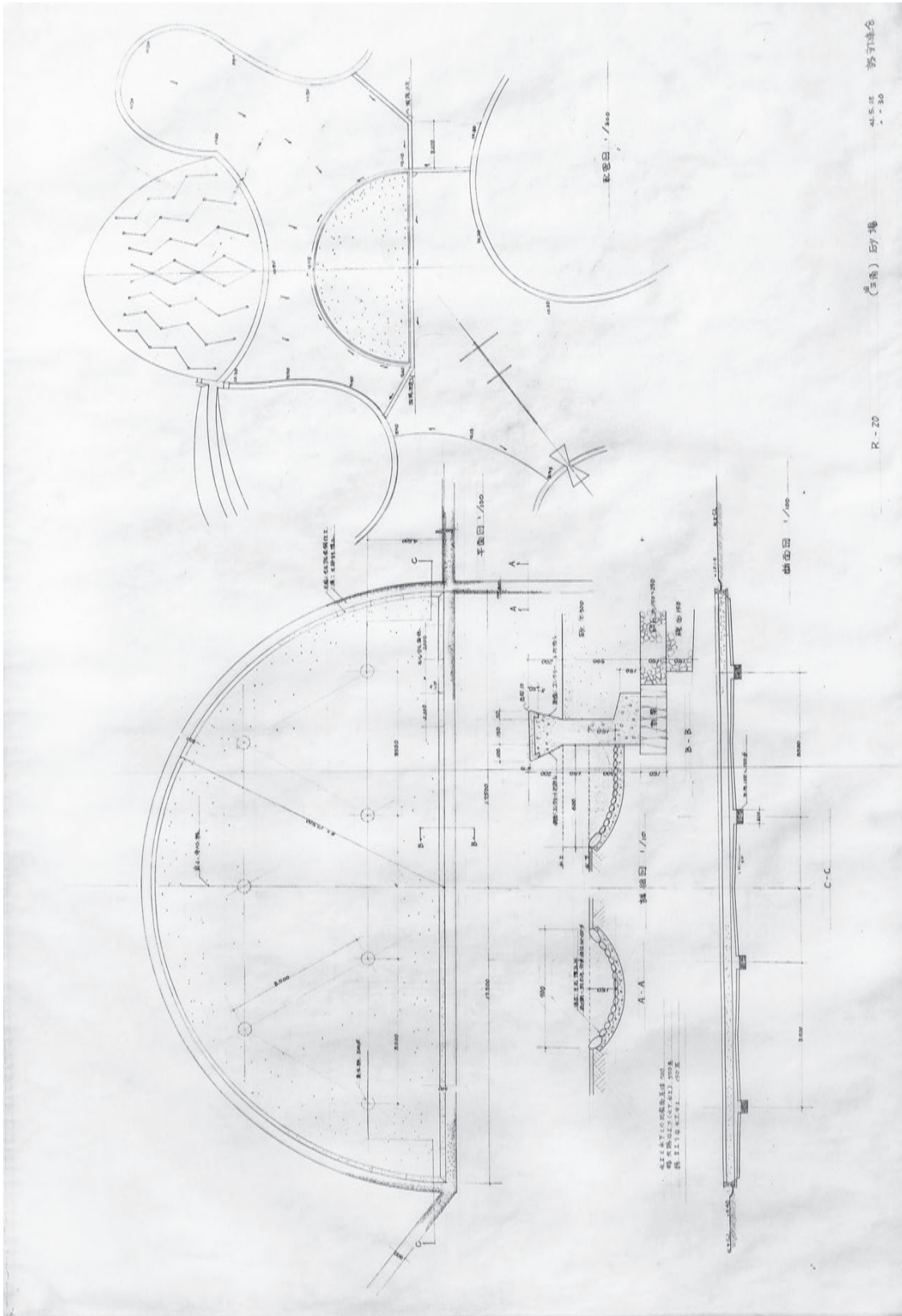


fig.7 イサム・ノグチ、大谷幸夫(R-20(旧三角)砂場詳細図)半円砂場詳細図)作図:大谷研究室(旧設計連合)、1966年5月18日/5月30日、鉛筆、トレーシングペーパー、54.8×80.0cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群(撮影論者)  
Isamu Noguchi, Sachio Otani (R-20 Detail Drawings of (former Triangle) Sand Pool. Playground in Zone A of the Kodomo No Kuni)  
Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), May 18, May 30, 1966, pencil on tracing paper, 54.8×80.0cm, YMA Otani Associates  
Kodomo No Kuni Collection (photo by the author)

児童遊園南側、アプローチ部分と児童館を先行させて進められた。

## ②児童遊園整地工事の範囲

ここでノグチの1966年4月来日時のA地区児童遊園の工事の状況を確認したい。こどもの国建設協力会の記録によれば、当該工事は1965年12月28日付で着工、敷地造成工事は1966年4月30日終了とある<sup>12</sup>。ノグチの滞在期間中はまさに造成工事の際中であつた。こどもの国協会が保管していた竹中工務店の工事記録写真の中に、砂場周辺の用地の様子を示す写真が3点ある<sup>13</sup>。1枚目(fig.8)は用地の東側、ジャングルジムAの敷地から南に向かう小川予定地から正面に砂場敷地と岩山方向をとらえたもので、画面右手奥の丘の縁は削られており、手前の用地に盛土用の土が山積みされた状態で、工事の初期段階と思われる。2枚目(fig.9)は切通が予定された丘の麓から北側の砂場敷地をとらえており、〈児童遊園三角砂場(作業中の写真)〉と題されている。ブルドーザーの手前の用地には雑草が茂り、石も転がり、大きな水たまりがふたつ写り込んでいる。〈児童遊園盛土作業中及び地均し〉と題された3枚目(fig.10)は、2枚目とほぼ同位置に盛土が敷かれ、ブルドーザーが地均しをする様子が写っている。この他、半円砂場と向き合う岩山の造成工事を写した〈児童遊園岩山工事 切土と作業中〉と題された写真(fig.11)では、樹木の生い茂った斜面を削って地肌を出した様子が確認できる<sup>14</sup>。また、〈児童遊園 小川 小川の頂点部分(写真右上)がジャングルジムA〉と題された写真では、施工中の小川と共に児童遊園北端に位置する《ジャングルジムA》の敷地も整地されていたことがわかる。原始部落、スベリ台、ピラミッドの敷地工事の写真は工事記録写真中にはない。砂場敷地をとらえた上記2枚目の写真を見ると、画面右奥の縁取りされた丘の左側が原始部落予定地であるが、樹木の伐採や切土が行われた形跡は確認できない。これらから、児童館北側の児童遊園敷地に関しては、1966年4月の工事で三角砂場用地周辺とその西に位置する岩山、北東方向では北端のジャングルジムA敷地までは



fig.8 児童遊園北西部敷地の様子 1966年、「児童館児童遊園工事写真」スクラップブック、文化庁国立近現代建築資料館蔵 17-3-1-04  
〈North-west part of the construction site of Playground in Zone A of the Kodomo No Kuni〉 1966, From the album of document photos of construction of the Kodomo No Kuni playground. National Archives of Modern Architecture, Agency for Cultural Affairs, inv. 17-3-1-04



fig.9 「児童遊園三角砂場(作業中の写真)」1966年、「児童館児童遊園工事写真」スクラップブック、文化庁国立近現代建築資料館 17-3-1-16  
〈Site of Triangle Sandpit, Kodomo No Kuni Playground〉 1966, From the album of document photos of construction of the Kodomo No Kuni playground. National Archives of Modern Architecture, Agency for Cultural Affairs, inv. 17-3-1-16

12 こどもの国協第43号「昭和40年度『こどもの国児童遊園施設整備』事業の完了報告書」昭和41年8月、NAMA 17-4-7

13 竹中工務店(カ)「児童館・児童遊園工事写真」(スクラップブック)NAMA 17-4-3

14 小論「上」p.50で岩山は「予定地の造成も行われた形跡がない」と記したが、この工事写真の確認により、これは間違いであることが判明した。ここに訂正させていただく。





fig.10 「児童遊園盛土作業中及び地均し」1966年、「児童館児童遊園工事写真」スクラップブック、文化庁国立近現代建築資料館 17-3-1-17  
 〈Banking and Leveling in the north-west part of the Kodomo No Kuni Playground〉 1966, From the album of document photos of construction of the Kodomo No Kuni playground. National Archives of Modern Architecture, Agency for Cultural Affairs, inv. 17-3-1-17



fig.11 「児童遊園岩山工事 切土と作業中」1966年、「児童館児童遊園工事写真」スクラップブック、文化庁国立近現代建築資料館 17-3-1-15  
 〈Construction of Iwayama(Craggy Mountain), Surface Cutting〉 1966, From the album of document photos of construction of the Kodomo No Kuni playground. National Archives of Modern Architecture, Agency for Cultural Affairs, inv. 17-3-1-15

ある程度整地されていたことがわかる。上に見たノグチの2通の書簡は、整地作業後も排水問題は容易に解決できず、この区域の工事進展上、重大な障害となっていたことを窺わせる。

スベリ台用地については、大谷研究室が保管していた1966年秋頃撮影と思われる施工後の児童遊園北部用地の写真(fig.12)を見ると、画面中央奥のスベリ台予定地は樹林に覆われた丘のまま残されており、《301スベリ台詳細図》にあった盛土によるマウンドは作られなかったことがわかる。

### ③児童館とその周辺に関するイサム・ノグチの指示

正三角形をモチーフとする児童館の建物が大谷幸夫のデザインであることは小論「上」で確認したとおりだが、上記のノグチ書簡とラフスケッチには、児童館の屋根の下にある正三角形の腰掛プラットフォーム、児童館中心に位置するマウンド(丸山)、同じく児童館敷地内にある水遊び池(配置図原図1の池3)、さらに児童館東南の野外劇場の舞台について、ノグチによるデザイン上の指示が記されている。

児童館の正三角形の屋根の下には、それぞれ屋根の形に呼応した正三角形の床が位置し、その一部には水飲場と足洗場が組み込まれる。原案の石膏全体模型では床は地面よりかさ上げされた正三角形のプラットフォームとして表現されていたが、大谷研究室資料群の1966年4月段階と思われる実施設計図《006こどもの国児童館矩計図》(fig.13)によれば、床は割栗の上にコンクリートを打った下地の上面を一边150mmの正三角形のタイルで覆ったもので、その地面からの高さは30mmとされていた。ノグチはこれらを全て400mmの高さに揃え、プラットフォーム・シートとするよう改めてラフスケッチに指示を記している。



fig.12 大谷研究室「児童遊園西北部敷地」(写真)1966年、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群  
 〈North-west Part of the Site, Kodomo No Kuni Playground〉 1966, photographed by Otani Associates (former Sekkei Rengo), YMA Otani Associates Kodomo No Kuni Collection

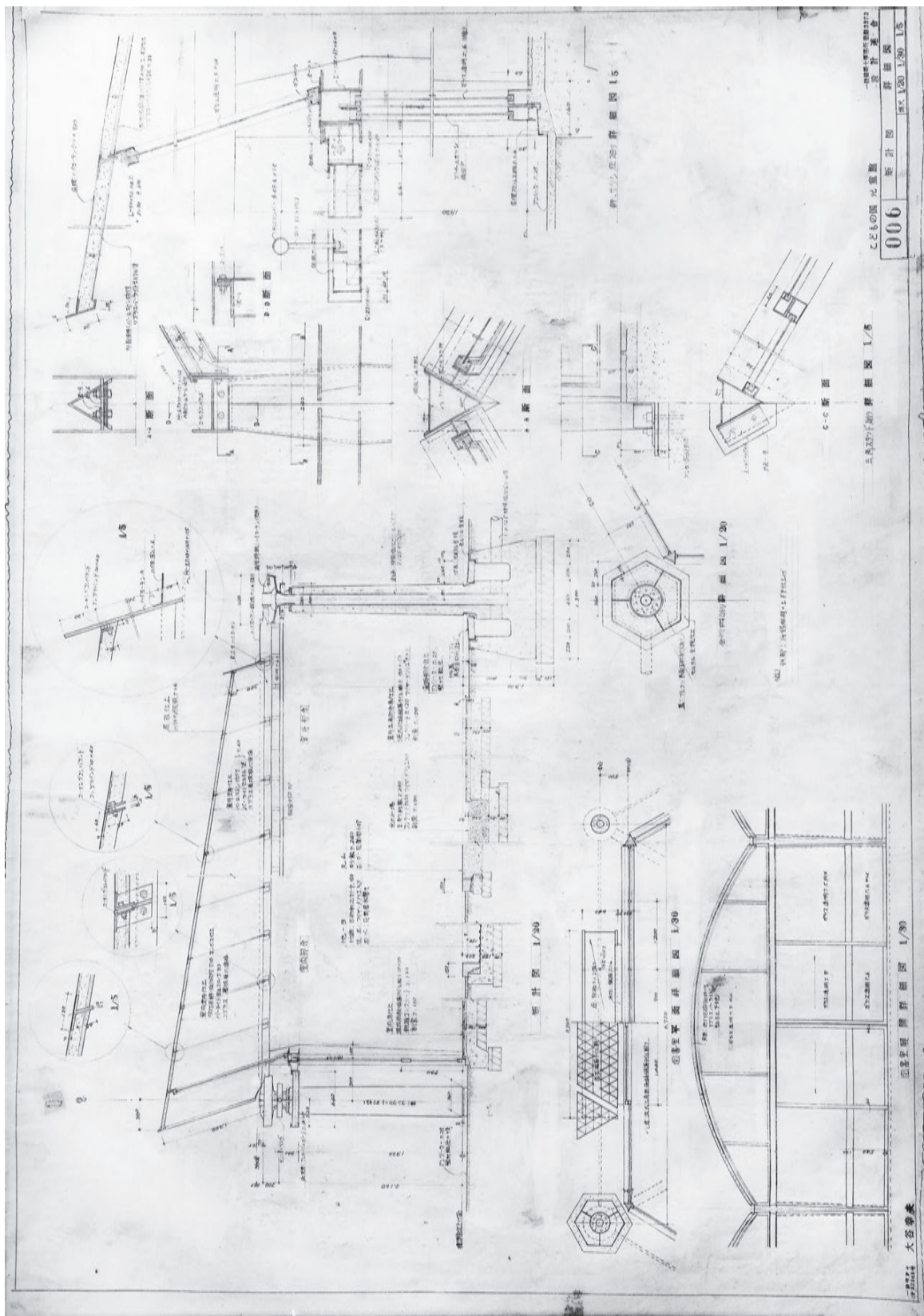


fig.13 大谷幸夫《006 こどもの国児童館設計図》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1966年、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、54.9×80.0cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群「撮影論者」  
 Sotatsu Kurokawa (006 Section Detail Drawings of Children's House) Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1966, pencil, ink on tracing paper, 54.9×80.0cm, YMA Otani Associates Kodomo No Kuni Collection (photo by the author)



加えてラフスケッチでは、それらの内4か所についてはプラットフォームの一辺から中心にかけてコンクリートを「鍵穴型」に欠き取って地面と同じレベルの袋小路を設け、別の3か所にはコンクリートに「くの字型」の通路を貫通させること、児童館の最も北側に位置する6面のプラットフォーム群の内2面を円形にすることを提案している (fig.14)。

児童館敷地内の遊具の内、ノグチ書簡中の「水遊び池」(図面中の池3)は配置図原図1の段階までは屋根のない六角形の輪郭であったが、ノグチはこれを勾玉型に変え、池の先端が三角屋根の下に入るように提案した。

同じく児童館敷地の中央に位置する丸山は、原案では六角形の縁取りを設けてその内側を砂場とし、その中心に円形のマウンドを想定していたが、六角形の縁取りは配置図原図1《002配置図》の段階で除去され、ラフスケッチではさらにマウンドをプラットフォームと同じ高さ400mmの台座に載せ、マウンドと台座を東西、南北に貫通する二つのトンネルを設けるよう提案された。

さらに野外劇場の舞台は原案では芝生であったが、ラフスケッチでは高さ150mmの円形プラットフォームを作る指示が加えられている。

こうした細部の変更指示はあるものの、児童館建物とアプローチ部分の工事は進めてよいとノグチは記している。

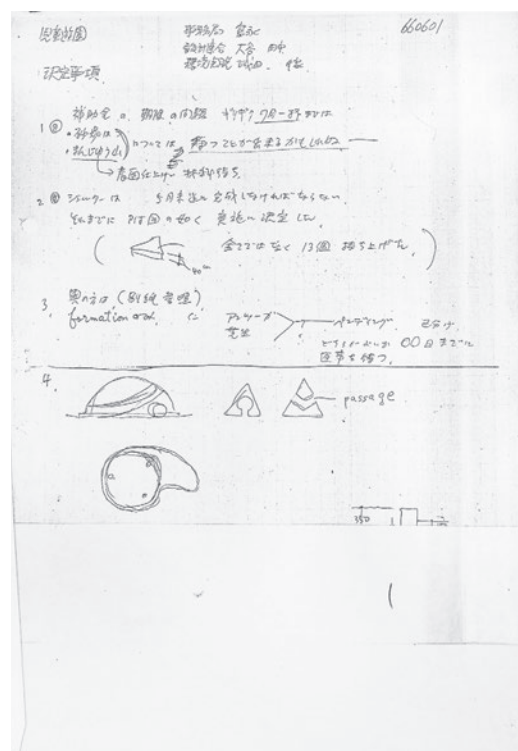


fig.15 1966年6月1日付浅田孝、衣奈多喜雄、大谷幸夫、田中正雄他による打ち合わせメモ。社会福祉法人こどもの国協会蔵(2006年当時)。論者による調査時のゼロックスコピー。  
Memoirs of the Meeting of Takashi Asada, Takio Ena, Sachio Otani, Masao Tanaka et.al. on June 1, 1966. The Social Welfare Service Corporation Kodomo No Kuni Kyokai (photocopied from the original by the author in 2006)

#### 1-5) イサム・ノグチの4月29日提案に対する浅田孝、建設協力会、大谷幸夫らの協議結果と対応

以上のノグチ提案を受けて、設計現場ではいち早く図面修正に着手されたことは先述したが、書簡を受け取った浅田孝は、こどもの国建設協力会事務局の富永(朝日新聞)、設計チームの大谷幸夫、田中正雄らと確認協議を行った。その内容を記したメモ (fig.15) が論者による2006年の調査当時、こどもの国協会に保存されていた<sup>15)</sup>。1966年6月1日の日付を持つこのメモには、「決定事項」として次の4点が記されている。

- 1 補助金の期限の問題 ギリギリ7月一杯までは ・砂場 ・まんじゅう山(表面仕上げ 材料待ち) については待つことができるかもしれぬ -<sup>16)</sup>
- 2 シェルター〔児童館建物〕は 5月末迄に完成しなければならない。

15 「児童遊園 決定事項 660601」メモ、社会福祉人こどもの国協会蔵(2006年当時)

16 「補助金の期限」とは、児童遊園施設整備事業の補助金申請先に提出した同施設の工期終了日を指す。児童遊園は何度か工期延長を申請し、最終期限が1966年7月31日であった。次章参照。また、児童館はこの時点で5月末日が工期であった。

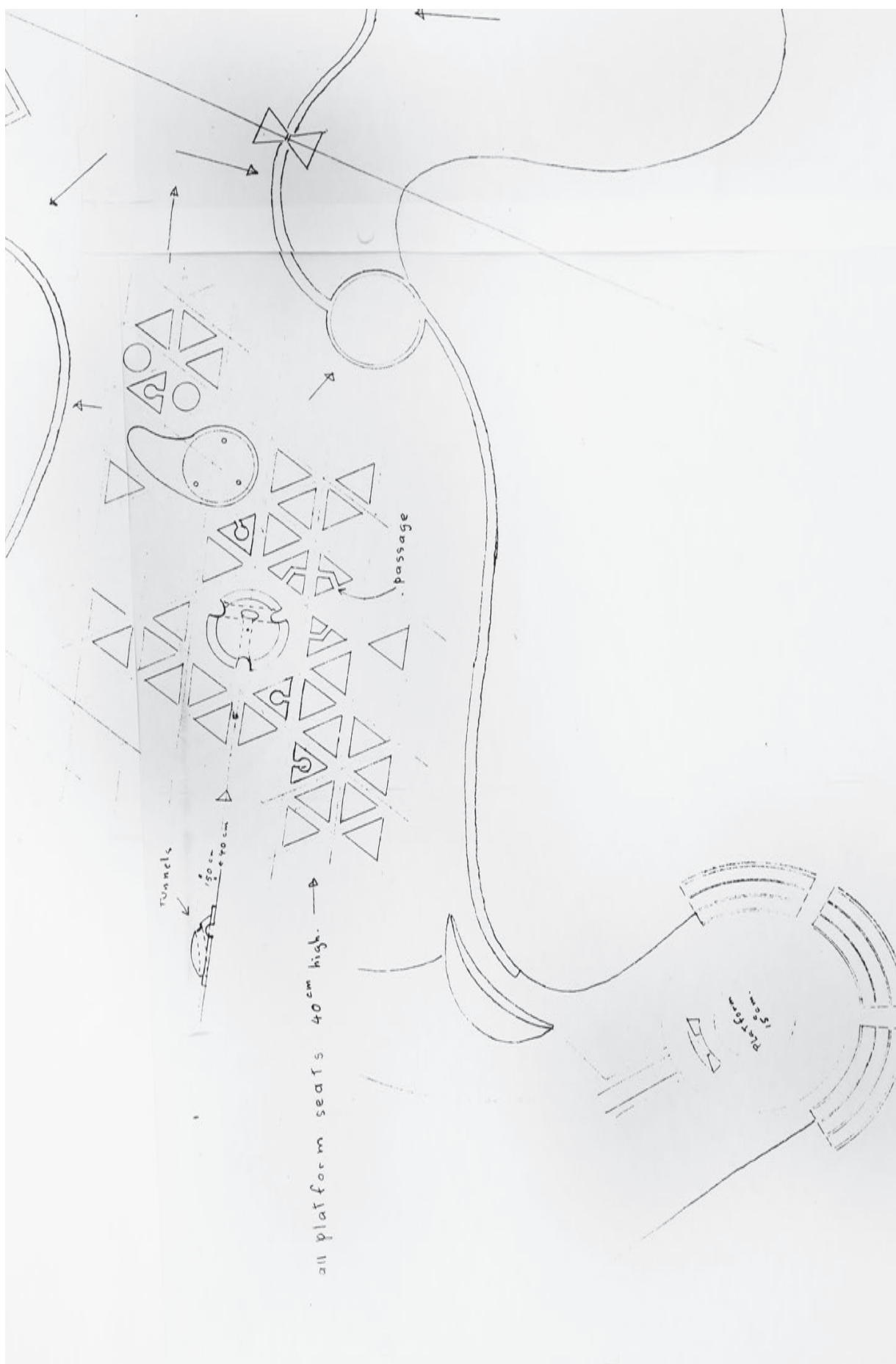


fig.14 イサム・ノグチ《こどもの国児童遊園ラフスケッチ (fig.7の部分)》1966年4月29日  
Isamu Noguchi 〈Rough Drawing of Kodomo No Kuni Playground〉 (detail of fig.7), April 29, 1966

それまでに 附図の如く 実施に決定した。

(〔床40cmを指示したプラットフォーム略図〕全てではなく13個持ち上げた。)

3 奥の方は(別紙参照)

Formationのみ。 アンツーカー<sup>ママ</sup> 芝生 - ペンディング。 区分け、どちらがよいかわかる日まで  
に返事待つ。

4 〔丸山立面断面略図(トンネル付き)、プラットフォーム略図2(鍵穴型欠き取り、くの字型通路)“—  
passage” 勾玉型池平面略図〕

〔以下用紙切断跡あり〕

このメモの内容は、浅田孝がイサム・ノグチ宛てに1966年6月17日付で送った書簡で説明されている。当該  
部分を以下に抜粋する。

浅田発ノグチ宛書簡抜粋(1966年6月17日付)：

- (1) まんじゅう山とプレイグラウンドのその他の構築物は、造成工事を除き、あなたの次の来日まで工  
事を中止します。
- (2) あなたの書簡中にあった排水のためのふたつの小川は了承されました。但し砂場はそれ自体が全体  
デザインの中でとても重要なので、これもあなたに現場を見てもらうまで工事を中止します。
- (3) 水遊び池、腰掛プラットフォーム、及びトンネル付きマウンドは問題なく了承されました。あなた  
の指示に副って今月末までには完成する予定です。
- (4) 児童館の奥のプレイグラウンドについては、その北東部分の造成工事、アンツーカーによる表面仕  
上げを除いて、大部分の工事を中止します。

私たちの協議の結果は以上です。ご参考用に、大谷チームが作成した図面1枚といくつかの写真を同封  
します。この図面でご確認ください<sup>17</sup>。(論者訳)

先の半円砂場と同じく、これら児童館敷地内外の施設に関するデザイン変更も、大谷研究室資料群の図面  
中、主にR番号のついた設計補助図に反映されていることが確認できる。《R-12児童館平面詳細図》(1966年5  
月13日。fig.16)では、児童館の正三角形の床の内、上記6月1日付メモの通り、青く色づけされた13か所につ  
いて、床仕上げ面はアンツーカー仕上げ面(地面より+9.18mm)より350mm上がりとする指示がある。ノグ  
チの指示はすべての床を高さ400mmにすることであった。これらのうち5か所(指示は4か所)には「鍵穴型」袋  
小路、2か所(指示は3か所)には「くの字型」通路が設けられている。但し袋小路と通路のある床の位置は、ノ  
グチのラフスケッチとは少し異なっている。また、他に2か所のプラットフォームを正三角形から円形に変更  
する指示も反映されていない。加えて、児童館の屋根の配置も、ラフスケッチとR-12平面図とでは若干違い  
が認められ、ラフスケッチでのノグチは概ね配置図原図1に沿って児童館東端の南北方向に連なる正三角形の

17 ノグチ・アーカイヴ蔵 inv. MS\_PROJ\_041\_017\_original\_1



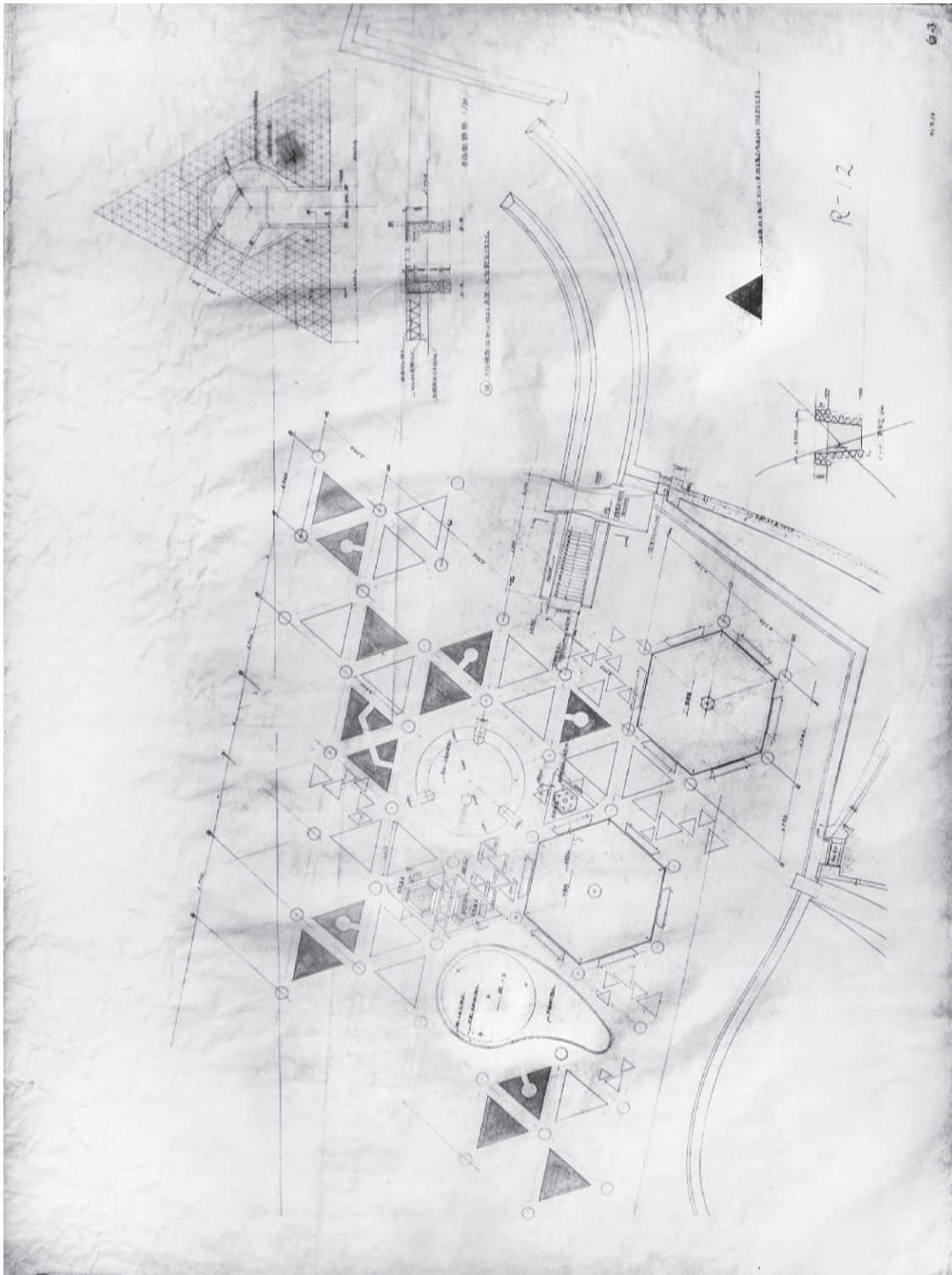


fig.16 イサム・ノグチ、大谷幸夫《R-12 こどもの国児童館平面詳細図》作図：大谷研究室(旧設計連合)、1966年5月13日、鉛筆、色鉛筆、トレーシングペーパー、78.1×107.6cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群(撮影論者)  
 Isamu Noguchi, Sachio Otani <R-12 Floor Plan Detail of Children's House, Zone A of the Kodomo No Kuni> Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), May 13, 1966, pencil, blue colored pencil on tracing paper, 78.1×107.6cm, YMA Otani Associates Kodomo No Kuni Collection (photo by the author)



床を5か所配置しているのに対し、R-12平面図では3か所に減じている。また、プラットフォームとは別に、R-12以前の図面にはない、大きさの異なる小さな正三角形の踏み石がプラットフォームや建物の間の地面に埋め込まれている。これらのラフスケッチとの違いは作図した大谷チームの判断と考えられる。浅田は書簡中でノグチの児童館細部への提案は喜んで受け入れられたと記しているが、図面と現場写真を同封して細部の確認を依頼している。《R-12児童館平面詳細図》の複写が送られたものと思われるが、ノグチ・ミュージアムの公開アーカイヴ中に該当する図面は見当たらない。同封された写真についても同アーカイヴ中に工事中写真はあるものの、該当する写真は特定し難い。この浅田書簡に対するノグチの反応を記す資料は見つっていない。

マウンド「丸山」へのトンネル新設については、《R-19丸山詳細図》(1966年5月13日／6月7日、「上」fig.37)と《R- 丸山詳細図(参考図)》(1966年5月22日、「上」fig.38)の二点が作成された。R-19では盛土にコンクリート玉石洗い出し仕上げのマウンドに筒状のトンネル二本を通すのに対し、参考図ではマウンド内を空洞として、マウンド上部の開口に始まるトンネルは人造石による樋状のスベリ台とし、床レベルの東西方向のトンネルは入り口造作のみとして、いずれも空洞内に子供が入るデザインであった。最終的にR-19が採用された。

野外劇場については《303野外劇場詳細図》(「上」fig.32)がノグチのサイン入りで1966年4月までに完成していたが、新たに《R-17子供の国出入口廻り》(1966年5月10日、6月8日。「上」fig.33)が作成され、野外劇場とその西北の築山を描いている。野外劇場の円形舞台にはラフスケッチの指示通り段差が設けられ、中心部の半径4,250mmの円内をその周囲より150mm高くするよう書き込まれている。

児童館敷地内に位置する水遊び池(池3)も、既に《R-5六角池詳細図》(「上」fig.39)が描かれていたが、ノグチのラフスケッチの指示を受けて《六角池 参考図》(1966年5月21日。「上」fig.40)が新たに作成され、後者が採用された。

以上、1966年4月29日付ノグチ書簡から同6月17日付浅田書簡までの経緯を大谷研究室資料群の図面と共に確認した。要点は以下のようになる。

- ①A地区児童遊園工事の初期段階で、児童館より北側の区域で排水問題が浮上し、原案を変更する必要性が生じ、イサム・ノグチも積極的に対応した。これに伴い、当該区域の内、北東部の小川とジャングルジムA敷地以外の建設工事は中止された。砂場と岩山は整地段階に留まり、原始部落、ピラミッド、ブランコその他の建設は着手されなかった。既に進行している工事は、アプローチ部、野外劇場、児童館(三角屋根、図書室、休憩所(旧売店)、池3、丸山、足洗場と水飲場を含むプラットフォーム)とその西側の崖及び切通、敷地東側を南北に伸びる小川とその途中の池2及び北端のジャングルジムA敷地に限定して進められることになった。
- ②児童館の建築は大谷幸夫のデザインであるが、ノグチは児童館敷地内の遊具(丸山、池3)だけでなく、児童館床部分にもデザイン上の変更指示を出した。小論「上」で見たように、契約書上ノグチには児童館とA地

区児童遊園の基本デザインが委託されていたが、大谷幸夫は児童館デザインに当たってイサム・ノグチの意向を尊重して変更要求を可能な限り受け容れていたことがわかる。但し大谷サイドでノグチの指示を独自にアレンジしたことは、建築デザイナーの主体性と共に、差し迫った完成期限の問題も絡んでいたと考えられる。

#### 1-6)1966年6月2日付け《配置図》(ジアゾタイプ配置図、fig.3)

6月2日付けジアゾタイプ配置図では上記の決定を裏付けるように、児童館部分は小さな正三角形の踏み石をやや削減しながらも《R-12児童館平面図》を踏襲する一方、半円砂場、ジャングルジムBを含む児童遊園北西地区の遊具施設の全てと、児童館南側の丘上の亀ノ子砂場については配置図原図1のイメージを点線で記すにとどめている。これらは上記のノグチ書簡及び浅田書簡にある工事延期を示唆するものとみられる。また、児童館東側の門はR-12における東西面を斜面とする半円筒形から、東面のみを斜面とする形に変わり、これが最終形となった(《R-15門配筋図》「上」fig.28)。一方、半円砂場の東南頂点に接して、プレキャストコンクリートの縁石が、切り通しのある丘と向かい合う舌状形の丘を結びつけて描かれている。これは当面の工事区域の境界線ではないかと考えられる。岩山については輪郭のみ実線で描かれている。

児童館は後述するように1966年8月9日に竣工する。その最終配置図となる1966年8月15日付《こどもの国児童館平面図》(fig.17)では、正三角形踏み石がさらに整理されているほかは、6月2日付けジアゾタイプ配置図に則している。

#### 1-7)配置図原図2と《第2児童遊園配置図》

施工範囲を原案から大幅に縮小して進められた児童館・A地区児童遊園の施設整備事業は、児童館が1966年8月9日、児童遊園が同年7月31日に竣工した。その経緯については次章で述べる。その結果ノグチの原案で予定された面積の約半分を占める北西部区域が更地として残され、遊具施設も三分の二が実施に至らなかった。この状況を打開するために、6月2日付けジアゾタイプ配置図における未着手部分を全面的に修正し、配置図原図2の最終形(1966年9月27日、fig.2)が作成された。同図に書き込まれた4つの日付の内、9月12日と9月27日はイサム・ノグチの滞日期間(9月1日来日、11月1日離日)に当たり、この間に確認と署名が行われたものとみられる。6月2日時点からの変更点は以下の通り。

①半円砂場を廃し、代わりに梅の花を思わせる輪郭の「花形砂場」とした。その輪郭は半径8,900mmの円内に収まり、半円砂場の半径17,500mmと比べてかなり縮小された。位置も変更され、児童館及び切通の丘の舌状形頂点に近づき、既に施工済のアンツーカーのゾーンに接して配置された。大谷研究室資料群の《砂場詳細図》(fig.18)を見ると、コンクリート打放しの縁取りの側面観や、花びらの軸線上に配された、四角形に円形の穴を穿った衝立などにノグチ彫刻を思わせる要素はあるが、こどもの国児童遊園デザインで正三角形や半円などの初源的な幾何学形態をモチーフとして採用し、「遊具に見えない遊具」<sup>18</sup>を唱えてきたノグチの作とするにはあまりに穏当で具象的に過ぎ、違和感を禁じ得ない。

18 イサム・ノグチへのインタビュー、『こどもの国ニュース』7号、1966年5月10日

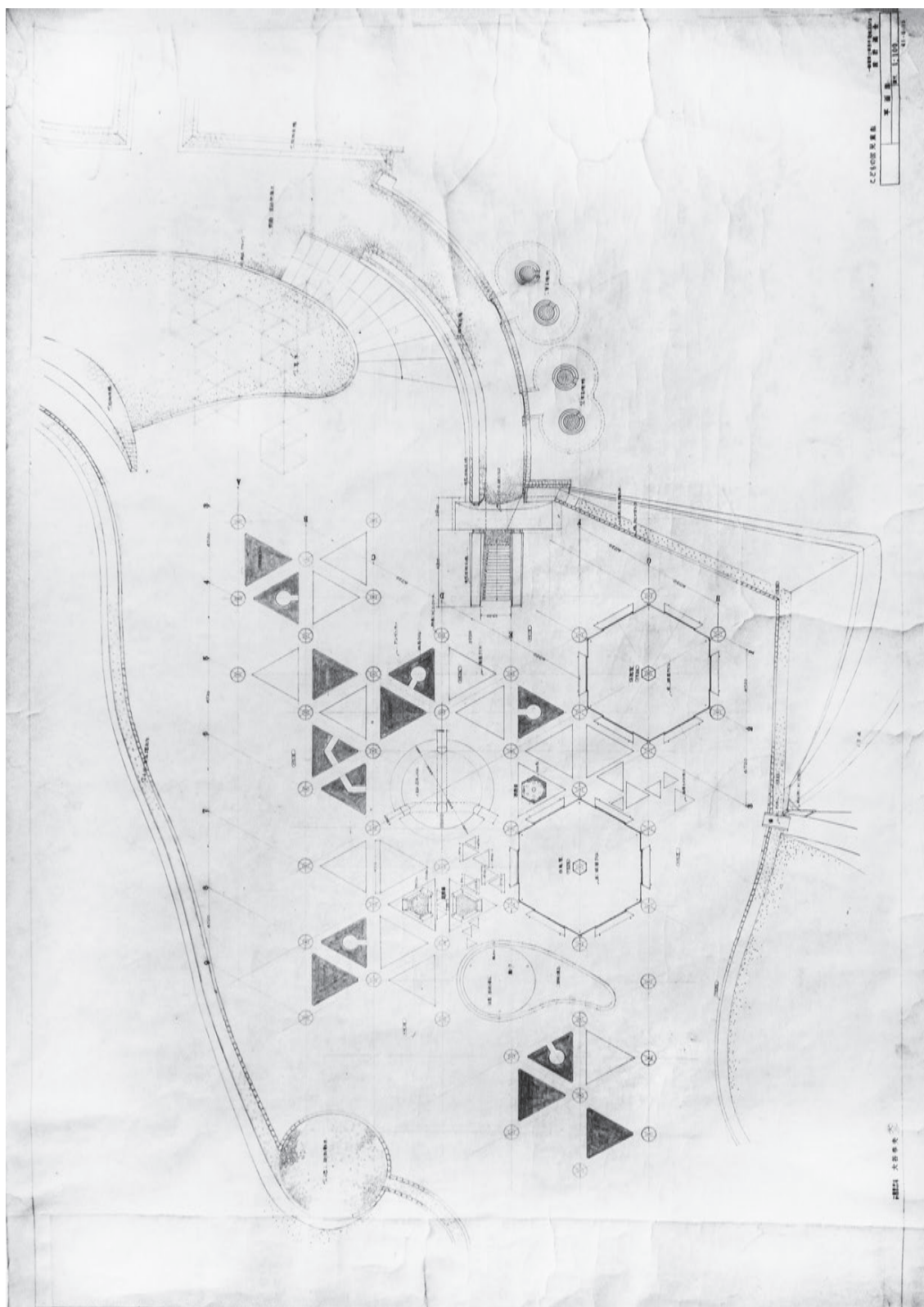


fig.17 イサム・ノグチ、大谷幸夫《児童館平面図》作図：大谷研究室(旧設計連合)、1966年8月15日、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、80.5 × 118.5cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群(撮影論者)  
Isamu Noguchi, Sachio Otani <Site Plan of Children's House, Section A of the Kodomo No Kuni> Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), August 15, 1966, pencil, ink on tracingpaper, 80.5 × 118.5cm, YMA Otani Associates Kodomo No Kuni Collection (photo by the author)



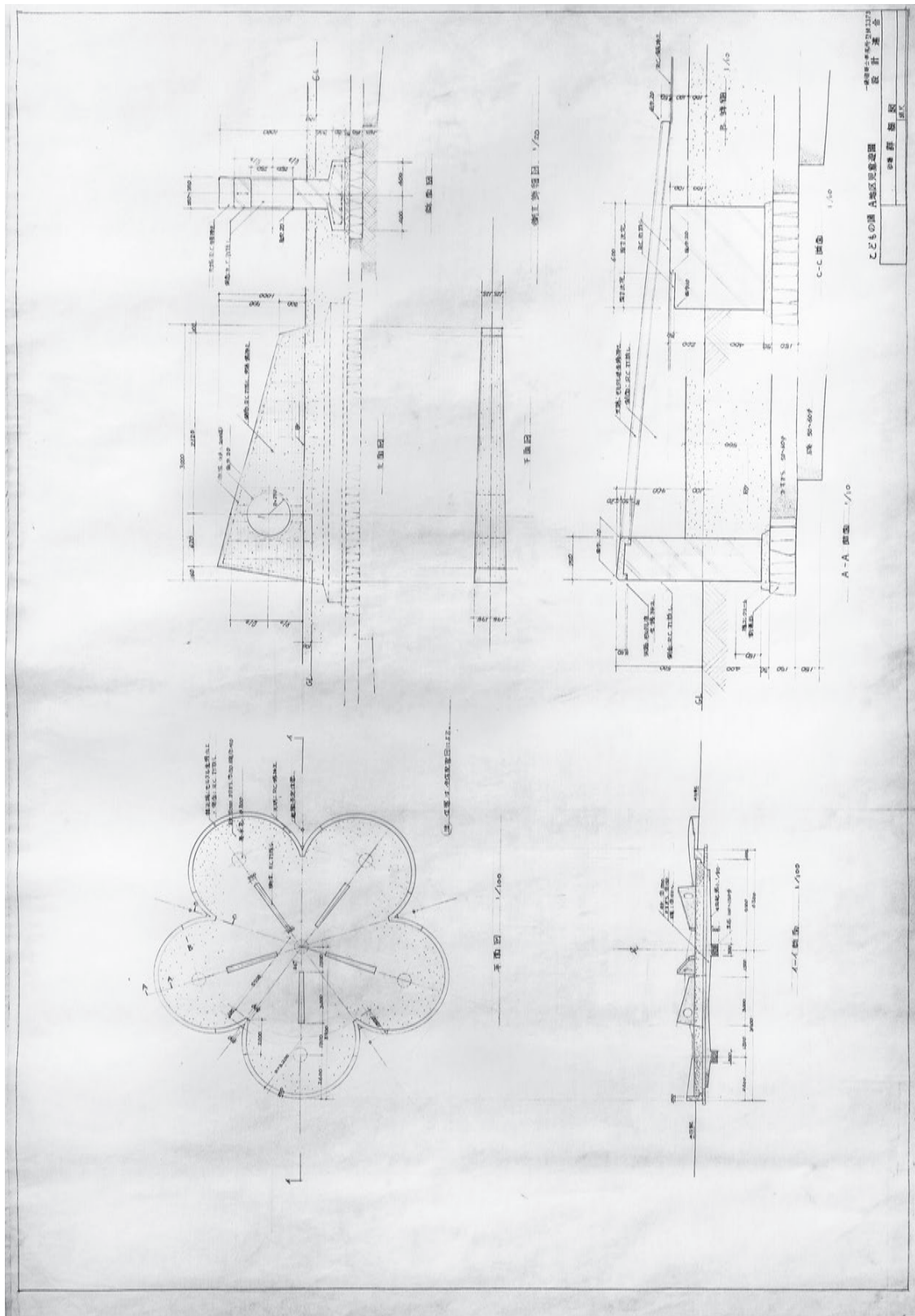


fig.18 イサム・ノグチ(?), 大谷幸夫《砂場詳細図》(花形砂場)作図: 大谷研究室(旧設計連合), 1966年、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、55.0×79.8cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群(撮影論者) Isamu Noguchi(?), Sachio Otani (Plan and Detail Drawings of Sand Pool (Flower-shaped). Playground in Zone A of the Kodomo No Kuni) Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1966, pencil, ink on tracing paper, 55.0×79.8cm, YMA Otani Associates Kodomo No Kuni Collection (photo by the author)



②岩山は「芝山」に変更された。敷地輪郭は配置図原図1の二枚貝型から東方向に拡張され、南隣の切通の出口が芝山側面中央に接するようになり、緩やかな斜面をもつマウンドになったように見える。斜面の登坂ロープを廃し、全面芝生帯としてサルスベリを点在させる。そこに大小4基のスベリ台(「芝山スベリ台A~D」)が配されている。内、大型のAのみ《スベリ台詳細図》(fig.19)が残っている。スライド部は人造石研き仕上げ、内幅1,400mmの単線式で、下端には直径8,000mmの円形砂場がある。但しスベリ台の全長と高さなどの主要寸法は「現場決定」とされており、敷地となる芝山の立体形状自体が未定であることを窺わせる。これと似た形式の単線式スベリ台は〈リヴァーサイド＝ドライブ・プレイグラウンド〉のモデルのひとつ(fig.20)のスライド・マウンテンにも見られる。このような独立したスライド・マウンテンや、ノグチ原案の複線式スベリ台《301スベリ台詳細図》の意欲的な設計に比べると、芝山スベリ台Aはその大きさにもかかわらず付属施設のような印象を受ける。

芝山スベリ台B、C、Dの3基は、スライドと階段を一体とし、湾曲プランをもつ小さなアーチ型の同じ躯体を放射上に配置したもののように見える。これら3体の詳細図はなく、正確なサイズは不明である。



fig.20 イサム・ノグチ、ルイス・カーン《リヴァーサイド＝ドライブ・プレイグラウンドのモデル》1965年、石膏、12.1×90.8×57.2cm、ノグチ・ミュージアム蔵 inv.516F  
Isamu Noguchi, Louis I. Kahn 〈Riverside Drive Playground Model〉 1965, Plaster, 12.1×90.8×57.2cm, The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, ©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum/Artists Rights Society/JASPAR

③ブランコA、Bの設置：ノグチ原案の原始部落及びスベリ台の敷地に、それぞれブランコA、ブランコBが配される。ふたつのブランコのデザインはノグチ原案の《310ブランコ(立面図・平面図)》(「上」fig.54)を想定していると思われる。

④その他の変更：芝山と向き合う位置に「築山B」を設け、円形の小川で囲んだ上、新たな水路3本で南北の既存の小川と接続している。築山上には彫刻が配される。小川上には新たに「丸橋A」と「丸橋B」、「小橋B」が追加されている。また、敷地北東部には新たな遊具として「石蹴り台」が追加された。これらの施設の詳細図は見つかっておらず、詳細は不明である。

総じてこれらの設計変更には同じ要素の反復が多い。遊具ひとつひとつがそれ自身の空間と共にあったノグチ原案に比べ遊具の存在感に乏しい。配置図原図2には大谷幸夫の印と共にイサム・ノグチの署名があり、ノグチ・アーカイヴにはその青焼二種類に加え、花形砂場及び芝山スベリ台Aの詳細図の青焼が所蔵されている<sup>19</sup>。ノグチの来日時期に照らして、これらの変更をノグチが確認したことは確かである。しかしノグチ自らがこの変更をデザインしたというよりは、別の誰かがリヴァーサイド＝ドライブ・プレイグラウンドのモデル(fig.20)などからノグチ的な造形要素を抽出し、配置図・詳細図にアレンジした可能性が考えられる。詳細は次章で述べるが、ノグチはその後これらのデザインを再び変更しようとしていた。

19 ノグチ・アーカイヴ蔵 inv.CR585.03, CR585.04

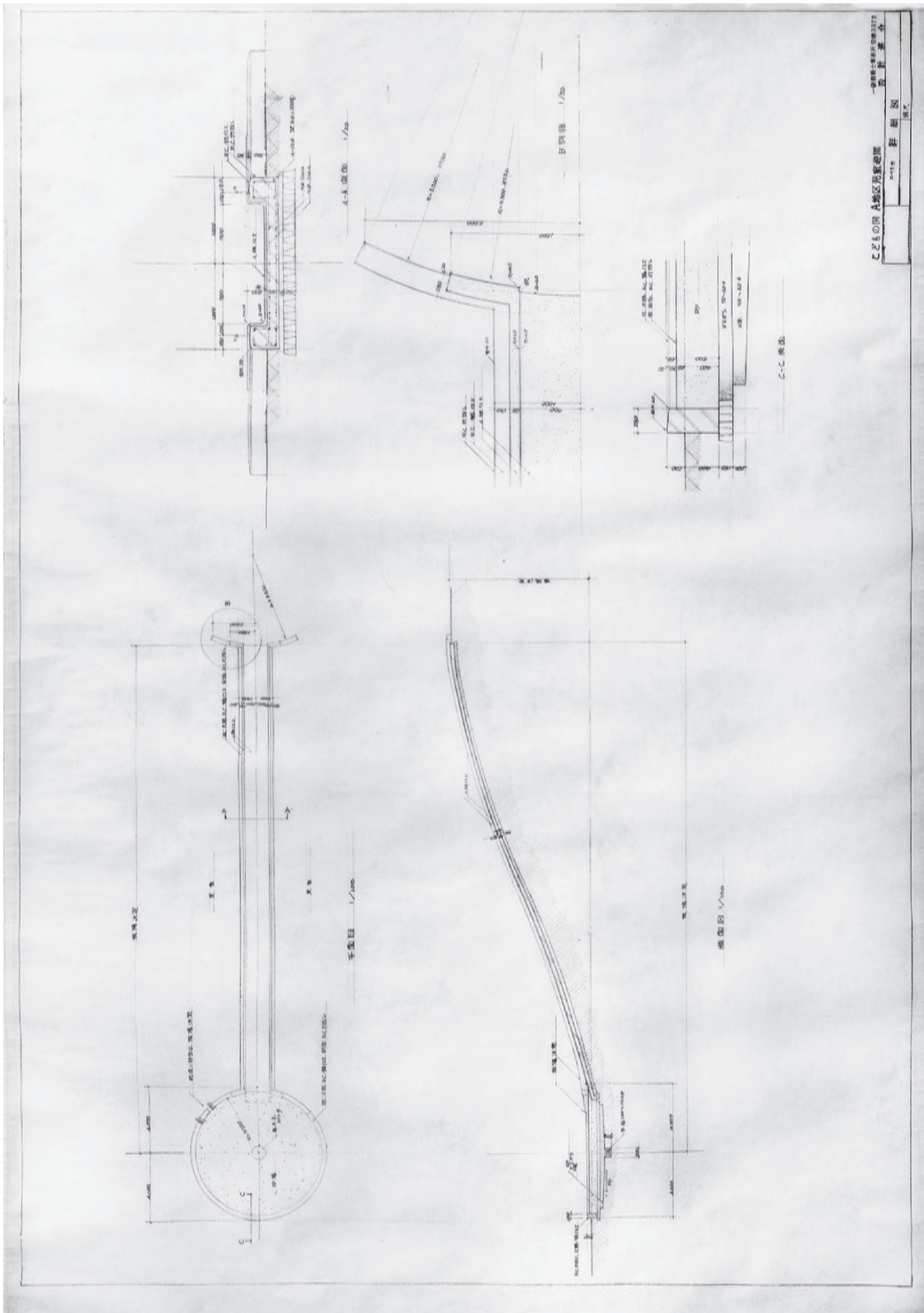


fig.19 イサム・ノグチ(?), 大谷幸夫《スベリ台詳細図》作図: 大谷研究室(旧設計連合)、1966年、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、54.7×79.8cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群(撮影論者)  
 Isamu Noguchi(?), Sachio Otani (Detail Drawings of Slide, Playground in Zone A of the Kodomo No Kuni) Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1966, pencil, ink on tracing paper, 54.7×79.8cm, YMA Otani Associates Kodomo No Kuni Collection (photo by the author)

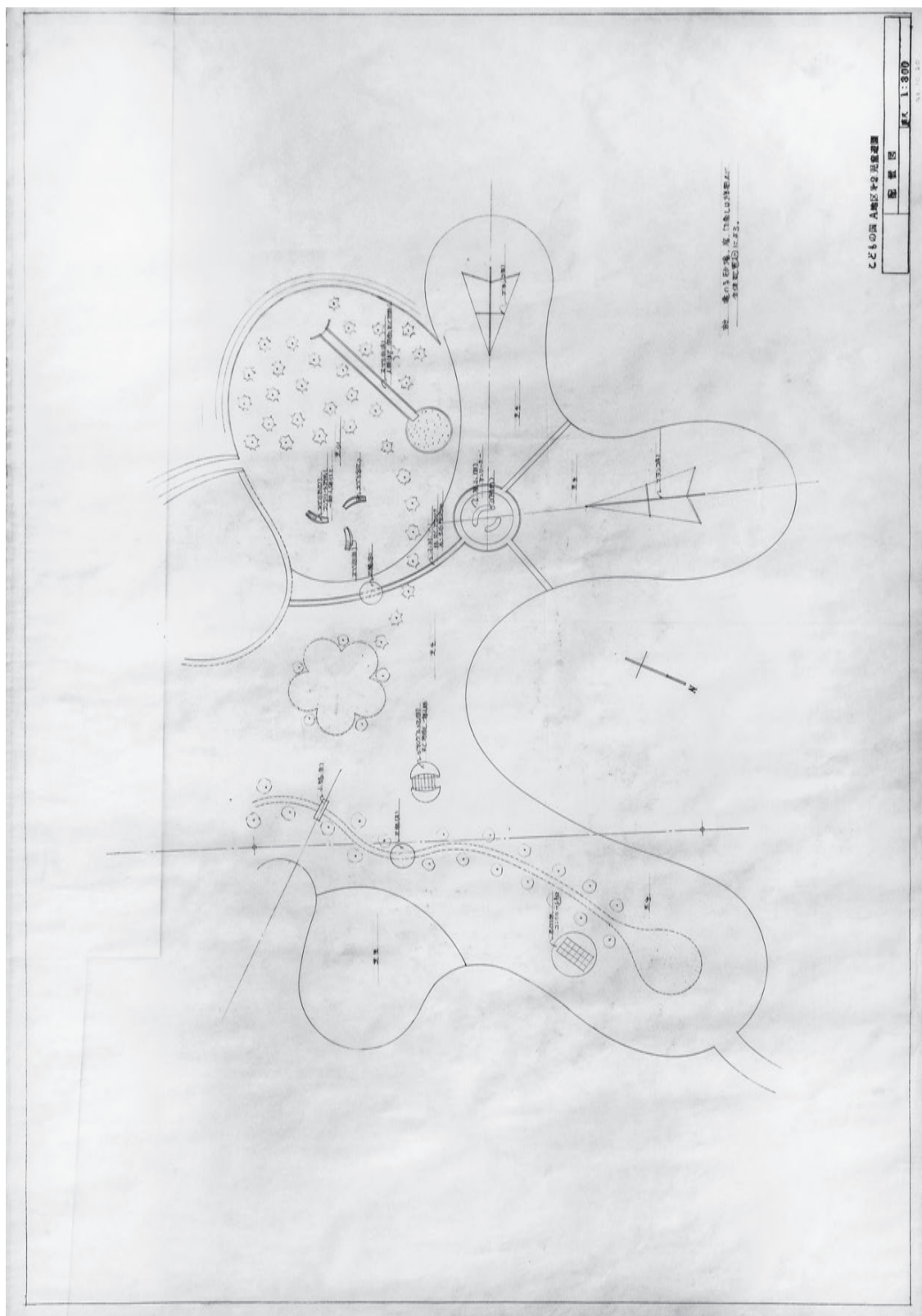


fig21 イサム・ノグチ、大谷幸夫《こどもの国A地区第2児童遊園配置図》作図：大谷研究室(旧設計連合)、1966年10月20日、鉛筆、インク、トレーシングペーパー、55.0×80.0cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群(撮影論者)  
Isamu Noguchi, Sachio Otani <Site Plan of the second Playground in Zone A of the Kodomo no Kuni> Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), October 20, 1966, pencil, ink on tracing paper, 55.0×80.0cm, YMA Otani Associates Kodomo No Kuni Collection (photo by the author)



《こどもの国A地区第2児童遊園配置図》(1966年10月20日、fig.21)は、同年9月27日段階の配置図原図2の内、花形砂場と芝山から北側を敷き写したもので、内容に概ね変更はない。唯一の変更はジャングルジムBが点線表記から実線に戻され、実施対象に復活していることである。この図面はA地区児童遊園の未施工部分を継続して建設するための補助金申請のために作成されたと見られる。「第2児童遊園」とは新たな施設整備事業としての名称である。詳細は次章で述べる。

## 2 「こどもの国建設協力会」文書にみる児童館・A地区児童遊園の建設事業の推移

イサム・ノグチと大谷幸夫の共同デザインによる「こどもの国児童館・A地区児童遊園」の建設事業(以下「施設整備事業」)の推移を、建設主体となった財団法人こどもの国建設協力会の文書(以下「建設協力会文書」)によって跡付けることができる。前章では大谷研究室資料群の図面を中心にノグチの児童遊園原案の変更プロセスを辿ったが、ここでは主に建設協力会文書を通して、彫刻家と建築家の共同の枠組みとなった施設整備事業の方向性と展開を読み解き、適宜大谷研究室資料群との関連を指摘すると共に、イサム・ノグチの設計参加の背景を考察し、児童館施設整備事業におけるノグチの役割を裏付け、児童館・A地区児童遊園施設整備事業の顛末を明らかにしたい。

### 2-1) 二つの補助金事業としての児童館及びA地区児童遊園の昭和40年度施設整備事業

「こどもの国」は国立の中央児童厚生施設であったが、開園前後の時期の園内の施設の多くは建設資金の全てまたは部分を民間からの寄付によって賄われており、児童館とA地区児童遊園も例外ではなかった。1965年8月の建設協力会理事会でA地区児童遊園の敷地内に児童館を移し、両者を統合して建設する方針が承認されたことは小論「上」で触れたが<sup>20</sup>、両者はもともと一体であったのではなく、別個の施設として構想され、用地も別々に予定されていたことに改めて留意したい。統合が理事会で承認されたにもかかわらず、施設整備事業としての児童館及びA地区児童遊園は引き続き別個の扱いで、予算、財源(補助金の寄付者)、工事予定のいずれもが事業別の枠組みであった。児童館施設整備事業は昭和40年度当初予算総額約4,350万円の内、約3,107万円を財団法人日本自転車振興会の補助金、残りを自己資金、即ち公費とされ、事業期間(実施設計から竣工まで)は昭和40年5月から昭和41年3月が予定された<sup>21</sup>。A地区児童遊園は昭和40年度当初予算2,000万円の全額が財団法人日本船舶振興会の補助金とされ、事業期間(同上)は昭和40年4月から昭和41年3月までの予定であった<sup>22</sup>。

こうして予算上は別々の二つの事業を実際には統合、一体化して設計・建設するという特殊な仕事にイサム・ノグチと大谷幸夫は共同で取り組むことになった。この特殊性はイサム・ノグチの設計参加経緯とその後の

20 小論「上」p.57

21 こどもの国協第16号「体育事業その他の公益の増進を目的とする事業に関する補助金交付申請書」昭和40年5月20日、別紙1「こどもの国内児童館の建設」事業計画書、NAMA 17-2-5

22 こどもの国協第24号「昭和40年度補助金交付申請書」昭和39年10月31日、別紙「昭和40年度こどもの国児童遊園施設整備事業事業計画書」NAMA 17-4-7



事業展開に少なからぬ関係を有している。また、図面の上で大谷幸夫とイサム・ノグチの役割をわかりにくくしている。イサム・ノグチは児童館整備事業に属する施設もデザインしているにもかかわらず、図番入り実施設計図への署名・捺印は全体配置図を除き児童館事業分が大谷幸夫、児童遊園事業分がイサム・ノグチとされているからである<sup>23</sup>。

ところでイサム・ノグチのデザイン対象は、児童館と児童遊園の他にもうひとつあった。小論「上」でみた、児童館・A地区児童遊園アプローチ部南側に隣接するスケートリンク(「上」fig.26)である。これも独立した施設整備事業であるが、事情がやや複雑なためこれについては後述する(下記註39)。ノグチは都合三つの事業のデザインに携わったことになる。

児童館とA地区児童遊園の施設整備事業の推移は、建設協力が各補助金申請先に提出した事業計画書と原則四半期ごとの事業進捗報告書等によって概要を辿ることができる<sup>24</sup>。また、最初期の施設計画から設計開始までの時期の資料として、浅田孝が代表を務める環境開発センターが作成した「中央児童厚生施設・こどもの国施設計画(寄付によるもの)」(1962年11月10日)、施設設計者の会合の関連資料「設計集団打合せ 事務局長用メモ」(2月11日付、1965年と思われる)などがある。これらの文書はいずれも簡潔な記述ながら、計画段階、事業の出発時の構想と進捗状況、途中の計画変更の事情を説明している。これらは大谷研究室資料群の図面類と模型の成立と役割を裏付ける歴史的典拠であるとともに、小論の課題である大谷の3案の児童館図面の背景、児童館とA地区児童遊園の統合、A地区児童遊園原案の改変のプロセスと建設終了時の姿を明らかにする上で重要な記述を含んでいる。以下史料毎に時系列に見ていく。

#### ①環境開発センター「中央児童厚生施設・こどもの国施設計画 寄付によるもの」<sup>25</sup>

1962年11月10日付のこの文書は、小論「上」で見た同じく環境開発センターによる《こどもの国計画マスタープラン》3点の内、最初期の構想図と思われるノグチ・アーカイヴ所蔵の図番K-1005M(1961年11月17日、同12月2日、1962年3月15日付)と大谷研究室資料群中の1点(1962年2月14日付、「上」fig.2)よりやや進んだ段階のもので、具体的な施設計画としては最初期の資料と見てよいであろう。ここでは「皇太子御夫妻御結婚記念集会場」を初め8項目の施設が挙げられている中に、「6. 児童遊園(A地区およびD地区)」が含まれている。施設内容としては、「A地区児童遊園は、既存の小トンネルを利用するほか、大渡渉池、大砂場を中心とした広括な遊園を基調とし、各種固定遊具のほか、管理及び付添人休憩所を敷設する」とされ、面積約3,000㎡、予算1,060万円が予定された。これは上記のマスタープランに描かれた「渡渉池」とトンネルからなるプランが成文化されたものといえる。なお、この文書にある8件の施設に「児童館」は含まれていない。

#### ②設計集団会議関係文書にみる児童遊園と児童館の設計者決定の経緯

こどもの国の施設設計を担った専門家グループ「設計集団」のメンバーが承認されたのは小論「上」で見た

23 大谷研究室資料群の図番入り実施設計図(完成図面)の概要については小論「上」p.28参照。署名者については小論「下」の資料目録に記載の予定。

24 文化庁国立近現代建築資料館所蔵(NAMA)の事業別補助金関連文書綴を参照した。資料番号17-2-5(児童館)、17-4-7(児童遊園、第2遊園)

25 「中央児童厚生施設・こどもの国施設計画(寄付によるもの)」1962年11月10日付、環境開発センター、NAMA 17-2-2

通り1963年11月であるが、それに先立つ1963年9月5日に朝日新聞社で行われた「設計集団メンバーの打合せ」の記録が残されている<sup>26</sup>。同メンバーによる用地視察後に行われた意見交換会で、冒頭、厚生省児童局養護課長の鈴木猛は主要施設の予算と設計の見通しを概説する中で、「〔児童〕遊園は金子九郎氏に頼み、デザインは十月までにまとまると思う」と述べている。金子九郎は日本児童遊園協会常務理事(当時)で、児童公園の専門家として設計集団の一人に指名され、こどもの国のA地区およびD地区の児童遊園の設計を担当することになっていた。このメンバー打合せでも児童館については言及されず、大谷幸夫は出席していない。

1963年12月19日に「設計集団(建築部門)会議」が開催された。その議事録は見つかっていないが、それに先立つ12月16日に開かれた「設計集団会議の事前打合せ」の記録が残されている<sup>27</sup>。浅田孝、衣奈多喜男(建設協力会常務理事)、厚生省担当官ら6名が参加したこの打合せでは、設計集団会議の主な議題として、「設計依頼方法」と「寄付による施設」の設計分担をあらかじめ提示し、設計集団メンバーで話し合うこととされた。この中で「児童館」が寄付による施設のひとつとして挙げられ、大谷幸夫の分担が予定されている。これまで確認できた資料中、これが児童館に言及された最初の資料である。また、設計依頼方法は「①寄付者に提示するための姿図まで」と「②寄付者が現れてからの『実施設計—完了まで』」の二段階方式を提案することになった。①の具体的内容については同日付の別のメモで、「①の姿図については配置図、平面図、立面図、断面図、簡単な説明書の5種類」とされた<sup>28</sup>。この記述は大谷研究室資料群中の、大谷幸夫による児童館第1案の図面類の役割を理解する上で注目される。この後開催された12月19日の設計集団会議ではこの事務局提案に基づき大谷幸夫の児童館設計担当が受諾されたものと推定される。

児童館の具体的な構想を記した文書としては、「大谷幸夫(設計連合)」名の1964年2月27日付「『こどもの国』建設費目論見書 児童館」と、その下書きと思われるメモ(青焼、「大谷幸夫氏」の鉛筆書き入り)が確認できる<sup>29</sup>。これは上記の「姿図」に含まれる「簡単な説明書」に相当するものと思われる。施設目的、施設内容、構造概要、総工費と内訳を記したもので、施設目的としては「①児童のグループ活動を主とした課外教育のセンターとする。②児童施設指導要員の養成、研修施設。③雨天に際しての休憩場を兼用できる配慮<sup>ママ</sup>する。」とされ、構造概要は「鉄筋コンクリート造、平屋建、一部半地階、延約1,200㎡(約365坪)」とある。施設内容は青焼メモがより詳細で、「会議室(40人円卓会議)2室、ホール 300人収容1室、教室100人収容1室、同40人収容4室、付図書室、準備室1室、その他倉庫、便所」とされている。この内容は、大谷研究室資料群の児童館第1案コンタ入り配置図(fig.22)及びその完成図と思われる《K30014-01児童館配置図・平面図》(NAMA17-2-5)の内容とほぼ一致している。一部半地階の記述は、谷の斜面から突き出るように建物ユニットを複数配置する大谷の児童館第1案の特徴といえ、大谷研究室資料群の児童館第1案完成図《02立面図・断面図》(fig.23)からも確認することができる。

次に確認できる児童館・A地区児童遊園に関する設計集団会議関係文書は、1965年2月11日の「設計集団

26 「設計集団メンバーの打合せ」議事録。昭和38年9月5日開催。こどもの国事務局スタンプ(昭和38年9月5日)あり。NAMA 17-2-2

27 「設計集団会議の事前打合せ」昭和38年12月16日付、こどもの国事務局 NAMA 17-2-2

28 「設計集団会議(19日)議題の事前打合せ整理事項」昭和38年12月16日付、こどもの国事務局、NAMA 17-2-2

29 両資料ともNAMA 17-2-2



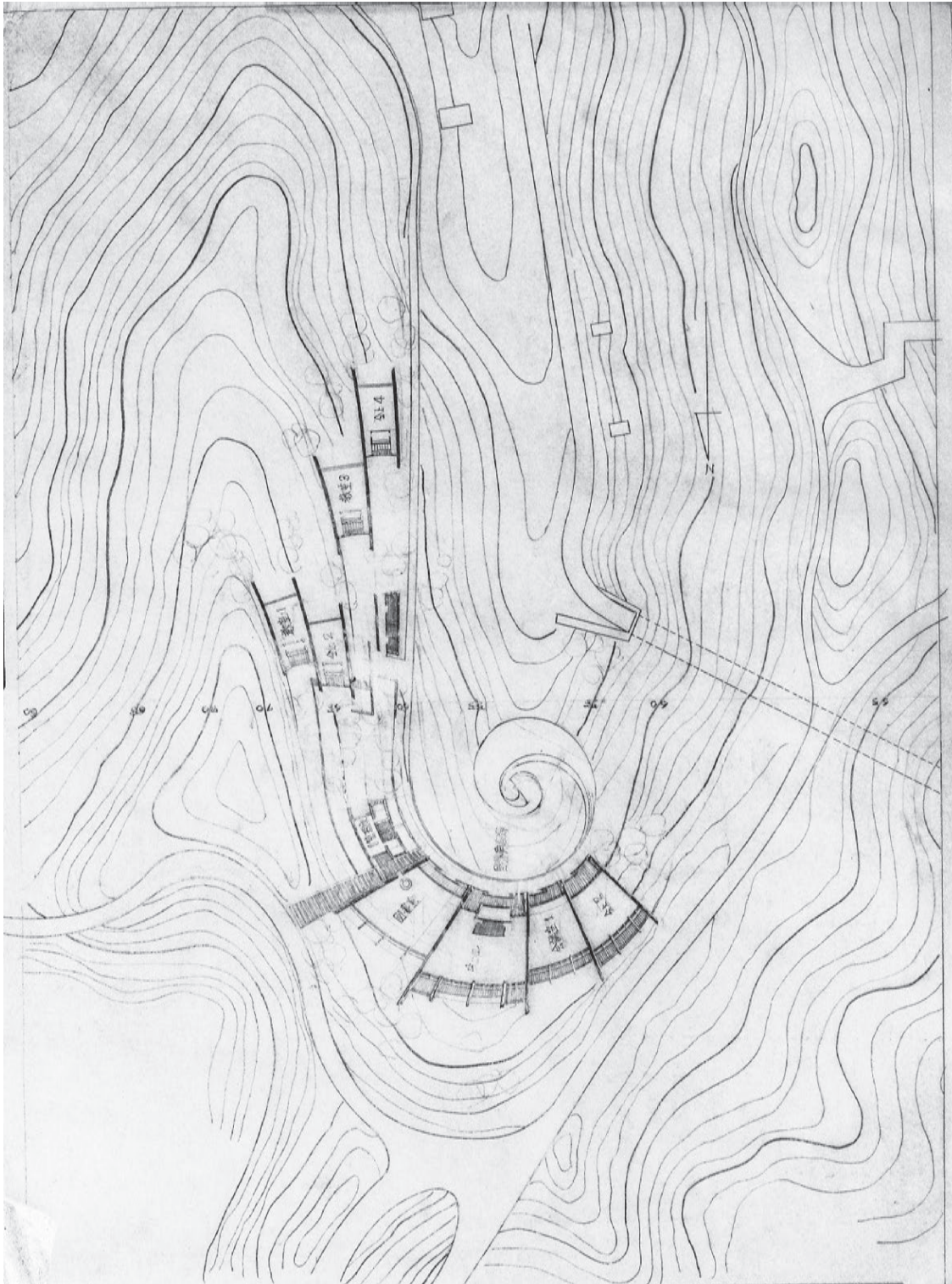


fig.22 大谷幸夫《こどもの国児童館第1案配置図(コンタ入り)》作図：大谷研究室(旧設計連合)、1964年、鉛筆、トレーシングペーパー、  
40.7×55.7cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群(撮影論者)  
Sachio Otani (Contoured Site Plan. First Design of Children's House in Zone C of the Kodomo No Kuni) Drawn by Otani  
Associates (former Sekkei Rengo), 1964, pencil on tracing paper, 40.7×55.7cm, YMA Otani Associates Kodomo No Kuni  
Collection (photo by the author)

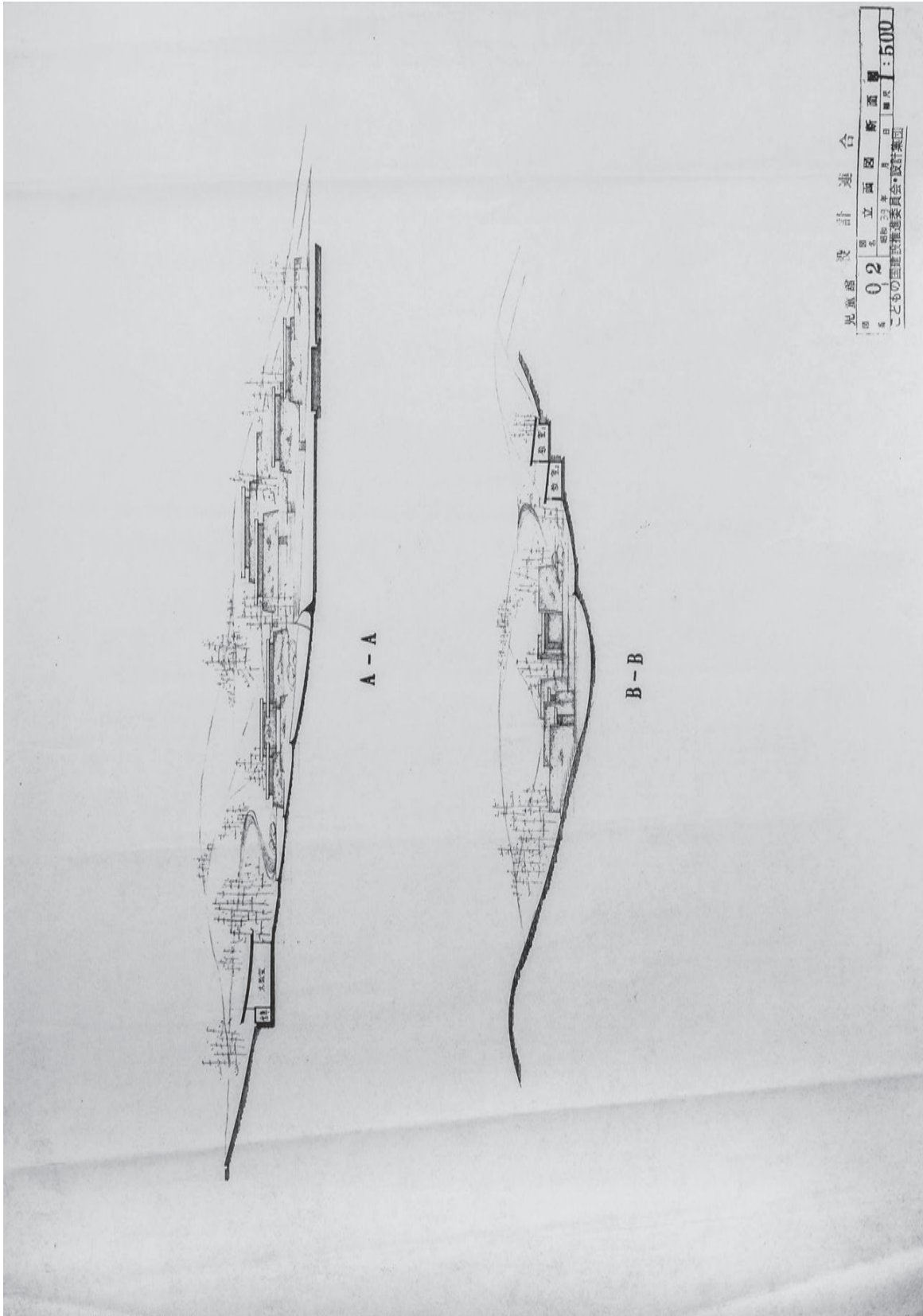


fig.23 大谷幸夫《こどもの国 児童館（第1案）02立面図断面図》作図：大谷研究室（旧設計連合）、1964年、青焼、インク、41.8×62.1cm、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群（撮影論者）  
 Sachio Otani (02 Elevation and Section. First Design of Children's House in Zone C of the Kodomo No Kuni) Drawn by Otani Associates (former Sekkei Rengo), 1964, blueprint, ink, 41.8×62.1cm, YMA Otani Associates Kodomo No Kuni Collection (photo by the author)



打合会 事務局長用メモ」<sup>30</sup>で、昭和39年度予算の使途(厚生省説明)の他、施設ごとに予算・補助金の状況と設計進捗状況が説明されている。この中で「児童館(大谷幸夫氏担当)は五千万円の予算の内、日本自転車振興会から三千七十万円の補助が内定した。これについては既に姿図設計が決まっているので、各担当者と打合せながら進めていきたい」とあり、また「児童遊園(A地区)について これも日本船舶振興会から四十年度補助として二千万円が内定。児童遊園は金子氏との関連するが、前々からのいきさつもあって、イサム野口氏のアイデアをいま聞いているので、具体的には次の設計集団会議あたりで打合せたい」と記されている。

児童館の補助金内定はその前提である姿図が既に出来上がっていることを意味する。大谷研究室資料群の児童館第一案の青焼《02立面図・断面図》と文化庁国立近現代建築資料館所蔵の図番K30014中の《01配置図・平面図》、《02立面図・断面図》、《03鳥瞰図》にはいずれも昭和39年の年記があり、同案は「こどもの国」マスタープランの1964年5月25日版に反映されているので、これらの図面が寄付者向けの姿図を構成していたと判断される。但しここでの児童館はA地区ではなく、D地区とC地区の境界付近に予定されていたことをここで想起しておきたい。また、後述するように児童館補助金申請は1965年5月20日であり、建設協力会はそれに先駆けて内定を受けていたことになる。

A地区児童遊園については、上記の1963年9月の「設計集団メンバーの打合せ」で金子九郎の担当とされていた。しかし1965年2月の「設計集団打合会」では金子と共にイサム・ノグチの名が「前々からのいきさつもあって」の前置きと共に挙げられている。同様の記述が、これに先立つ1964年10月31日付のA地区児童遊園施設整備事業の補助金申請書(後述)にもみられ、「金子九郎氏および、滞日中のイサム・ノグチ氏の意見を求めた上、実施細目を取決め、実施する」と記されており、これがノグチとA地区児童遊園を結びつける、今回確認できた範囲で最初の記録である<sup>31</sup>。もともと設計集団に入っていなかったイサム・ノグチの参画は、1964年10月頃から「意見を求める」という形で具体化しつつあった。一方、ノグチは同年10月3日付の米国の知人宛て書簡で「明日日本に発ち、12月末まで戻りません」と記しているので、ノグチは10月から12月にかけてと思われる滞日中に衣奈多喜男や浅田孝らと「こどもの国」に関する最初の面談を行ったものとみられる<sup>32</sup>。なおA地区児童遊園の補助金承認は1965年4月8日付で、建設協力会はここでも事前の補助金内定を受けていた。

30 「設計集団打合会(2.11午後2時、アラスカ)事務局長用メモ」NAMA 17-2-2。日付に年は記されていないが、「昭和39年度予算の使途」説明(年度末の実績説明と思われる)があること、児童館の「姿図設計が決まっている」(1964年5月頃。小論「上」p.32参照)との記述、児童館とA地区児童遊園の補助金が「内定した」との記述から、1965年と考えられる。アラスカとはレストランの名称で、建設協力会の事務局があった朝日新聞東京本社内にあり、同会の会合の場に利用されていた。なお、このメモには同じ朝日新聞東京本社の便せんに議題を列挙したメモ1葉が添付されており、そこには「建設事務打合会(2.11アラスカ)」と記されている。両者は同じ会議に関するものとみられる。ゆえにここでの「設計集団打合会」とは「『こどもの国』建設事務打合会」の通称であったと考えられる。「『こどもの国』建設事務打合会」は厚生省児童局が主催するこどもの国建設に関する会議で、厚生省、建設協力会事務局、設計集団メンバー、関連自治体(東京都、神奈川県、横浜市)代表者などから構成された。「昭和38年度『こどもの国』建設事務打合会要綱」NAMA 17-2-2

31 こどもの国協第24号「昭和40年度補助金交付申請書」昭和39年10月31日付、別紙「事業計画書」。NAMA 17-4-7

32 IN letter to W. Pinson Whiddon、ノグチ・アーカイヴ蔵 inv. MS\_COR\_079\_012\_original\_1。衣奈はノグチ宛の最初の書簡(1964年12月24日付)でこどもの国の資料一式を送っている。小論「上」p.30参照。

③児童館補助金関連文書に見る事業の推移－児童遊園との統合問題とイサム・ノグチによる三位一体のデザイン

建設協力会から財団法人日本自転車振興会への補助金申請「体育事業その他の公益の増進を目的とする事業に関する補助金交付申請書」(1965年5月20日付)には、設計連合名で「こどもの国児童館建設目論見書」(1965年5月付)が添付されている<sup>33</sup>。教室、図書室、会議室などからなる施設内容と工事費は先に見た1964年2月の「こどもの国建設費目論見書 児童館」に概ね一致しており、建設場所についても、申請書に添付されたマスタープランK-1005M上でD地区とC地区の境界付近にマーキングされており、これらは大谷幸夫の児童館第1案をもって補助金申請がなされたことを示している。

しかしこの申請と同じ頃、一方で児童館敷地のA地区児童遊園内への変更案が既に具体化しつつあったようである。大谷幸夫の児童館第2案(配置図1965年8月10日付)がA地区児童遊園の敷地を想定していたことは小論「上」(p.32)に述べた。それに先立ち、当初こどもの国のふたつの児童遊園を担当することになっていた金子九郎は、1965年6月1日発行の雑誌『月刊福祉』への寄稿「児童公園の役割」の中で、次のように記している。

「今ある土地が手に入ったとしよう。(中略)それを遊び場、つまり児童公園にしようとしたのである。ところがたまたま児童館をつくろうとする話も進んでいて、すでに予算の見通しもついていたとする。敷地はどこかをなんとかする、ぐらいいいことにしてとにかく予算は通る。すったもんだの挙句、その土地は半分を児童館にとられて、そこには中途半端な子どもの遊び場ができることになる。説明は健全育成のための総合的な施設である。(中略)

遊び場というものが確かに考えられていないということ、だからそういうお座なりな処理になったということである。(中略)

そのようなご都合主義や目に見える形と効果を求める態度が、児童館をも含めて、児童公園のような児童の福祉に関する仕事をいい加減にさせている所以でもある。」<sup>34</sup>

仮の話の体裁ではあるものの、記事の発表時期といい、もとは別個の計画であった児童公園と児童館が実施直前に統合され、児童公園の土地の半分が児童館によって占められるという想定といい、「こどもの国」児童館の敷地変更の経緯が著者の念頭にあることは明らかであろう。金子は同じ記事の中で「遊び場」としての「児童公園とか児童遊園」を「子どものための緑の空間(オープンスペース)」と捉え、「この緑の広場としての素朴な在り方」こそ、「実に児童公園の最も基本的な性格として(中略)あらゆる要求の前にまず要請されているものである」と強く主張している<sup>35</sup>。この記事で金子は「こどもの国」児童館の児童遊園内への建設をめぐる建

33 こどもの国協第16号、昭和40年5月20日付申請書に添付。NAMA 17-2-5

34 金子九郎「児童公園の役割」、『月刊福祉』48(7)(1965年7月号)p.20

35 金子の他にも、こどもの国園内の施設が過密になることへの懸念や、自然環境の保護を表明した設計集団メンバーとして、泉眞也、柳宗理を挙げることができる。註26参照。また浅田孝も「『こどもの国』はあくまで子供たちの大自然の中での奔放的な活動や遊びや思索を通しての自己啓発の場でなければならない。その為に施設も必要最小限にとどめる努力がはらわれなければならない」と記しており、施設建設には慎重であった。浅田孝「国立中央児童厚生施設『こどもの国』」『公共建築』5(4)、営繕協会編、1963年2月、p.85

設協力会の方針や、「目に見える形」としての施設建設を優先する厚生省の姿勢を批判しているのである。浅田孝(建設協力会理事)は1965年8月30日の建設協力会理事会で、児童館のA地区児童遊園内への建設については「金子九郎氏の了承」を得たと説明したが<sup>36</sup>、それは決して快諾ではなかった。A地区児童遊園のデザイナーは金子からイサム・ノグチに交代することになるが、金子はこの担当を辞退したのかもしれない。

児童館施設整備事業の補助金の正式交付決定通知は申請から4か月後の1965年9月28日付であった<sup>37</sup>。この間に建設場所の変更が正式決定するが、建設協力会が日本自転車振興会にこの決定を書面で通知したのは、A地区児童遊園内の児童館工事が既に始まっていた1966年3月30日付の「昭和40年度『こどもの国児童館の建設』補助事業 補助事業の計画変更に関する承認申請書」によってであった。そこでは児童館敷地及び設計の変更を工期延長の理由とし、その経緯を次のように説明している。

「当初予定地であったC地区の敷地が他の施設から全く孤立しており、工事費をはじめ経費増が見込まれるほか、敷地自体が狭いこと、管理上に難点が予想されるなどの理由から、当会で種々検討した結果、A地区北端部の児童遊園敷地内に建設した方がこどもたちの利用及び管理上も好都合であるとの結論になり、敷地をA地区に変更することになりました。

この変更により本事業と並行して行われているA地区児童遊園との密接な関連を生じ、施設のデザインについてもA地区全体との関係もあり、遊園設計者イサム・ノグチ氏の意向も質しながら実施計画を進めました。(中略)

また、これに付随して建物も三角形をユニットとした構造をとるなど設計内容にも変更が行われ(中略)時日を要する事情が重なったため、着工時期も予定より大幅にずれ、40年末に工事契約、着工の段階を迎えたわけであります。(中略)事業の終了時期も3ヶ月ほど遅れる見込みで、早ければ5月末日には完了する予定であります。』<sup>38</sup>

敷地変更の結果、「施設のデザイン」変更が必要となり、児童遊園設計者イサム・ノグチの意向を訊きながら進めたと記されていることは重要である。施設とは児童館建物部分に限らず、造園や修景、通路や公衆便所などの付属施設をも含んでいる。児童館施設整備事業の実施設計者はあくまで大谷幸夫(設計連合)であるが、児童遊園との統合によって児童館事業の施設全体がノグチの指導の下に設計されたことをこの文書は示している。それは小論「上」でみたノグチと建設協力会との契約書(1965年11月1日)でノグチに児童館と児童遊園の「基本設計」が委託されていることとも一致する。大谷研究室資料群の《児童館・A地区児童遊園配置図》の各段階、及び石膏全体模型にはいずれも、施設整備事業対象としては3つの独立した施設であるスケートリ

36 財団法人こどもの国建設協力会第13回理事会議事録(昭和40年8月30日開催)、NAMA 17-4-7

37 この後、建設協力会は事業進捗報告書を第二四半期分(こどもの国協第42号、昭和40年11月22日付)、第三四半期分(こどもの国協第2号、昭和41年1月10日付)で日本自転車振興会に提出している。第二四半期では児童館の「実施設計案」が8月30日に第13回理事会で「原則的に承認」されたことが記されている。この案は大谷幸夫の児童館第2案を指すと思われる。第三四半期では実施設計の「細目決定」をみたので、1965年12月28日に竹中工務店と工事契約を締結し、「昭和41年3月末日完成の予定」で直ちに着工する旨が記されている。NAMA 17-2-5

38 こどもの国協第14号、昭和41年3月30日付、NAMA 17-2-5



ンク<sup>39</sup>、児童館、児童遊園を含んで表されている。即ちそれら3つの施設を統合するデザイン・コンセプトの下に、三位一体としてデザインすることこそイサム・ノグチに期待され、彼が取り組んだ仕事だったのである。それが上記変更申請の中で「A地区全体との関係もあり」と記された所以といえよう。

また、新たな工期を5月末日完了としていることは、先に見た浅田、大谷らの打合せメモで「児童館は5月末までに完成しなければならない」と記述されていたことの根拠である。

ところで児童館とA地区児童遊園の統合には、変更申請に記された経費増や管理・利用上の問題の他に、あるいは金子が指摘する「目に見える形と効果を求める態度」の他に、何か積極的な理由、特にイサム・ノグチの関与があったのだろうか。浅田孝は理事会説明で、児童館を「児童遊園と結びつけ」、「児童館は雨天シェルターを兼ねるものとし幼児、低学年用の施設としたい。建築としては簡素なものとなる」と述べた。これは大谷幸夫の児童館第1案が児童の課外教育のセンター及び指導員の研修施設であったことから大きく転換している。「幼児、低学年用」という施設目的は、A地区児童遊園のそれに合わせたものである。統合が浅田もしくは建設協力会側の発案か、あるいは1964年10～12月中の面談でのノグチの「意見」によるものかを直接確認できる史料は見つかっていない。小論「上」で見たようにノグチは1965年8月13日に来日して程なくフラーのジオデシックドームを「シェルター」(児童館)とすべくサダオ・ショージとバックミンスター・フラーに協力を依頼したが、それ以前、1964年12月から翌年8月までの間、衣奈の再三にわたるデザイン案催促の書簡にも拘わらず、ノグチの児童遊園案は具体的に示されなかった。大谷幸夫は後年の回想の中で、ノグチのフラー・ドーム提案に言及し、「ドームではせっかくの谷あいの視界が閉ざされてしまい」「あまりにも自己完結的」であるとして「私は視界を閉ざさぬよう、谷あいに軽い大屋根を架け渡す案を検討したが(中略)納得のいくものにならなかった」と記している<sup>40</sup>。「軽い大屋根」案はノグチ来日前の日付(1965年8月10日)をもつ大谷の児童館第2案(65年8月10日付：小論「上」fig.6-9、11)を指していると思われ、回想を字義通り解釈すれば、その設計に際して大谷は既にノグチのドーム案を知っていたことになる。確かにノグチはショージ宛書簡でフラー・ドームの見積もりを依頼した際、こどもの国について「以前に話したと思いますが」と記してもいる。大谷がノグチの8月13日の来日以前にドーム案を知っていたとすれば、前年のノグチと浅田らの最初の面談が発端で

39 1966年1月に開場した「スケートリンク」の建設経緯はやや複雑である。発端は1965年8月30日の建設協力会理事会で、矢島八洲夫副会長が冬場の施設としてスケートリンクを設け、夏は渡渉池とすることを提案した。これを受けた浅田孝が、「場所については大谷氏、ノグチ氏とも打ち合わせて煮詰めたい」と発言している。その後建設が決定されたが、1965年の補助金申請の史料は見出されず、「こどもの国50年史」(三国治編p.223、265)によれば、日立製作所(冷却機)と東京電力の現物寄付を受けて建設された。その後「昭和41年度補助金交付申請」が日本船舶振興会宛に出され、名目は「こどもの国徒渉池施設」整備事業であった。スケートリンクを徒渉池(ジャブジャブ池)として造成し、給排水設備や休憩舎、管理舎、石垣、便所などの付属施設を加える事業で、A地区児童遊園と同じ1966年7月31日に竣工した。申請に添付された事業計画には、「児童遊園、児童館とも一体となって、幼児向きの施設として整備」とされ、「徒渉池の形状については、40年度児童遊園整備事業につらなるものとして、すでに同遊園の設計者イサム・ノグチ氏によりデザインの内定をみて」いる旨が記されており、三位一体のコンセプトが裏付けられる。(こどもの国協第41号、昭和40年10月30日付申請書に添付。NAMA 17-4-5)。

また、ノグチ・アーカイヴには1965年付けの環境開発センター作成の「スケートリンク」関連図面が複数残っている。その配置図には、舌状形(または勾玉型)のスケートリンク輪郭線に「イサム・ライン」と書き込みがある。これはノグチのデザインがスケートリンク本体のみで、周囲の付属施設は別の手になることを示している。ノグチ・アーカイヴ蔵 inv. CR585\_16\_01。

40 大谷幸夫「イサム・ノグチさんのこと」和多利志津子(監修)『PLAY MOUNTAIN イサム・ノグチ+ルイス・カーン』マルモ出版、1996年、p.138

あったと思われる。しかし、その面談で事情と条件を聴く立場のノグチが、いきなり児童館と児童遊園の統合を提案するとは考えにくく、浅田・衣奈らの統合案の説明を受けて初めてドーム提案が可能になったはずである。1964年末の差し迫った時点での、設計集団メンバーではないノグチへの建設協力会のアプローチそれ自体が、児童館と児童遊園の統合案に関する金子との交渉の行き詰まりに起因するとみるのが自然であろう。従って両事業の統合はノグチとは無関係に事前に決まっていたと考えられる。

イサム・ノグチの起用が浅田孝の推薦によるものだったことは小論「上」で述べた。児童館の敷地変更をめぐって金子九郎の反対を受けた浅田が、当時《リヴァーサイド＝ドライブ・プレイグラウンド》(1961-1965)を建築家ルイス・カーンと共同でデザインして注目を集めていたイサム・ノグチを、金子に代わる児童遊園デザイナーに起用するべく運動した可能性は十分考えられる<sup>41</sup>。

イサム・ノグチが1950年から1952年にかけて東京大学の丹下健三研究室を度々訪れ、やがて広島平和記念公園のための慰霊施設を丹下と共同でデザインした頃<sup>42</sup>、浅田孝は丹下研究室の中心的存在として丹下の広島平和記念公園・記念館の仕事に参加し、ノグチと直に接していた。また、大谷幸夫も同時期に丹下研究室に在籍し、ノグチの粘土による広島平和記念公園のための慰霊碑模型制作から強い印象を受けただけでなく、ノグチが広島の平和大通りの二つの橋のためにデザインした勾欄の図面を原寸図に描き起こす仕事をしている<sup>43</sup>。年齢と立場の違いはあれ浅田、大谷とノグチは旧知の間柄であった。

イサム・ノグチが児童館施設をデザインしたことを示す今一つの文書として、建設委員会が1966年7月21日付で日本自転車振興会宛に作成した「補助事業の計画変更に関する承認申請書」が注目される<sup>44</sup>。児童館工事期限の8月31日までの延期を申請する理由として「イサム・ノグチ氏原案の変形便所の建設で、その特異な造形のため予想外に工期をとられたこと、および施設の仕上げ段階で丁度梅雨時に当たったため、施設周辺の地盤が不安定であり、梅雨明けをまって最終的な仕上げを行いたい」と記されている。これに添付された竹中工務店横浜営業所の「工期延期願」(昭和41年6月28日付)では、延期対象工事のひとつに「2. 便所廻り埋土並びに関知石積工事」を挙げ、「当初準備した埋めもどし用土砂は、イサム・ノグチ先生のご指示により他に移動転用した為、便所廻り埋めもどし土砂を収集する必要を生じ、これに伴う一部石積の遅延が生じた。」と記されている。前章でノグチが浅田孝、田中正雄に対し排水改善のため児童遊園の砂場周辺の敷地に高低差をつけるよう要請したことを見たが、埋め戻し用土砂の転用は同じく竹中工務店が施工する児童遊園敷地に転用された可能性が考えられる。工期延長は7月27日付で申請通り承認された<sup>45</sup>。児童館の竣工に関する文書は竹中工務店東京

41 1961年の着手以来の紆余曲折を経た《リヴァーサイド＝ドライブ・プレイグラウンド》の第4案モデルが1964年2月4日に地元地区評議会で公開され、ニューヨーク・タイムズ紙で賞賛されていた。記事: "Distributed by Neighborhood Council for Redevelopment of Riverside Park" *New York Times*, 日付不明、ノグチ・アーカイヴ蔵 CR516.29b / Shaina D. Larrivee, "Playscapes: Isamu Noguchi's Designs for Play," *Public Art Dialogue*, 2011, p.65

42 イサム・ノグチは1950年5月から8月にかけて東大の丹下研究室を頻繁に訪れていたほか、1951年12月から翌年2月にかけて平和記念公園慰霊施設の模型制作と作図のため同研究室で作業していた。拙稿「丹下健三による3つの広島平和記念公園慰霊施設案とイサム・ノグチの設計参加前後の広島市の戦災死没者慰霊施設計画」横浜美術館研究紀要第24号、2023年、p.36-38

43 大谷「イサム・ノグチさんのこと」p.136

44 こどもの国協第39号、昭和41年7月21日、NAMA 17-2-5

45 「昭和40年度補助事業の事業計画変更の承認について」日本自転車振興会会長高石真五郎発財団法人こどもの国建設協力会会長足立正宛(41日振公第482号、昭和41年7月27日)、NAMA 17-2-5

支店長名、設計連合連名の「竣工届」及び「工事竣工引渡書」で、竣工の日付は昭和41年8月9日である<sup>46</sup>。

④児童遊園補助金関連文書に見る事業の推移—児童遊園原案の二分割と1966年7月31日の昭和40年度児童遊園施設整備事業「完了」まで

A地区児童遊園施設整備事業のため建設協力が日本船舶振興会に提出した昭和40年度補助金交付申請書(昭和39年10月31日付)には、「開園を機会に、とくに年少児童の遊び場としての遊園施設をできるだけ早い機会に整備したい」と申請理由を述べ、大砂場(5,000㎡)と池・徒渉池(1,000㎡)から成る概要が示された。大砂場については特に美智子妃殿下(現皇太后陛下)の「こどもたちにぜひ大きな砂場を作って下さい」との発言に由来する旨が記されている。「砂場」は「幼児・低学年用」のモチーフとして、ノグチ担当以降の児童遊園建設の中でも重要な案件となっていく。申請書に付属する事業計画書には金子九郎作成の参考図が添付されることになっていたが、現存する文書には「児童遊園施設予定地(参考図添付省略)」と書かれたマスタープラン(K-1005M)のみが添付され、金子の参考図は確認できない。先述のようにこの申請文中には「後添参考図作成者金子九郎氏及び滞日中のイサム・ノグチ氏の意見を求めた上、実施細目を取決め、施工する。」と記されている。金子の参考図とは補助金内定前に提示された姿図と思われ、それが大砂場と徒渉池のプランであったと推測される。それにもかかわらずノグチの意見も聞いてこれから細目を取り決めるということは、デザイナーの交代を示唆しており、参考図添付省略はデザインの変更を予告しているようにみえる。建設協力はひとまず内定段階の計画を提出し、ノグチと相談する旨を書き加えて後日の正式な変更申請に備えたと思われる。

A地区児童遊園の補助金は1965年4月8日付で申請通り2,000万円で交付決定したことが通知された。これを受けて提出された年間実施計画書では、実施設計を5月中に終了、6月着工、1966年3月10日完了と記された<sup>47</sup>。こうして実施期間に入ったものの、先述の通りイサム・ノグチから建設協力会への図面提出はなかった。補助金事業の第一四半期進捗報告書(7月3日付)には、「設計を依頼したイサム・ノグチ氏が、現在アメリカから欧州を旅行中で、詳細な図面の入手が遅れております。(中略)ノグチ氏との連絡がつき次第、計画の早期具体化をはかる予定であります。」とある<sup>48</sup>。ノグチの8月来日後作成された第二四半期の進捗報告書(10月5日付)では、「イサム・ノグチ氏が当期中ば、ようやく来日、設計内容について、再度打合せた上、現在模型、図面による検討など、作業は順調に進められて」といると記され、小論「上」でみた藤田皓一氏の証言通り設計連合アトリエで模型制作と図面作成が並行して行われたことが窺える<sup>49</sup>。

ノグチの児童遊園原案が完成し、1965年11月末のノグチ離日後に提出された「事業の計画変更申請書」(昭和40年12月28日付)はその後の事業展開を知るうえで重要である。そこでは変更の理由が次のように記されている。

46 「竣工届」、「工事竣工引渡書」ともNAMA 17-2-5

47 「昭和40年度『こどもの国児童遊園施設整備』事業の年間実施計画書」(こどもの国協第14号、昭和40年4月10日付)NAMA 17-4-7

48 こどもの国協第26号、昭和40年7月3日、NAMA 17-4-7

49 こどもの国協第38号、昭和40年10月5日、NAMA 17-4-7



「A地区児童遊園の実施計画を進める過程で、B地区に予定していた児童館をA地区児童遊園予定地内に建設することとなり、遊園実施設計中のイサム・ノグチ氏に計画変更を求めるとともに、全体の調和をはかるよう依頼しました。このため遊園の原案となっていた大砂場および休憩舎などの附属施設の造成については大幅に設計変更を求められることとなりました。当会としても、この間の事情を慎重に検討した上、この方針を決め、実施設計を急いだ結果、漸く施工図の確定をみております。」<sup>50</sup>

ここで初めて補助金申請時の「大砂場」を中心とする「原案」から、イサム・ノグチにより児童館を含めた形で児童遊園の設計変更をする方針が補助金申請先に示された。一見するとノグチの設計を途中で変更させたようにも読めるが、上で確認したように、児童館と児童遊園の統合計画がまずあり、それに伴う全体設計を（金子から交代した）ノグチに託したと解釈すべきである。「実施設計の確定をみた」とはノグチと大谷の児童館・A地区児童遊園原案ができていることを意味する。

ノグチ原案のその後の実施状況を見る上で注目されるのが、この変更申請書に記された「変更の内容」である。旧計画の「大砂場5,000㎡」、「池・渡渉池・給排水設備1,000㎡」等に対して、新計画では次の施設が挙げられている。

「A地区北端部の谷間約9,000㎡を整地転圧し、芝・アンツーカー地帯とし、下記の構築物を造成する。

④三角砂場 一辺24mの正三角形で約290㎡、深さ60cm ⑤野外小集会場〔野外劇場〕 直径15mの芝生帯を中心に、円型に取り囲む観客席を造成する ⑥小池・小川 直径6mの円形池27㎡および幅1m長さ約50mの小川を造成する ⑦その他 岩山、切通、擁壁、階段、植樹などの造園、修景および遊戯施設工事」<sup>51</sup>

この記述を大谷研究室資料群の図面と対応させると、児童遊園実施設計図面リスト（図番300）には図番301～309の9件の遊具施設図面が記されていたが、それらの内この申請書に挙げられているのは《302池・橋・砂場その他詳細図》中の池1、池2とこれらに繋がる小川、《303野外劇場》、《308三角砂場》の3件のみで、《301スベリ台》、《304亀ノ子砂場》、ジャングルジムA（図面無し）、《305ジャングルジムB》、《306ピラミッド》、《307原始部落》、《309ブランコ》などの遊具施設はこの時点で既に実施対象から外されているのである。これらは図面リスト300で「欠番」と鉛筆書きされたものである。他に図番のない《岩山》、《児童館西側切通》が施工対象とされた他、「擁壁」とは前庭周辺のアプローチ部の擁壁と思われる。外れた原案施設の中で「⑦その他」の「遊戯施設工事」とは、ごく小規模な附属施設で、恐らく切通入り口の小橋等ではないかと思われる。

この申請書中の施工対象は、前章で確認したノグチの1966年4月の来日時の施工対象と一致していることは注目に値する。変更申請書の日付、1965年12月28日は児童遊園着工の日付でもある。イサム・ノグチの原案はこの時点で当面の施工対象の範囲が定められ、施工部分と非施工部分に二分されていたのである。

50 こどもの国協第50号、昭和40年12月28日付、NAMA 17-4-7

51 Ibid.

変更申請書で注目すべき今一つの点は工期の変更で、旧計画の1966年3月31日完了予定を1966年4月30日に延期している。施工見積もりはノグチ原案完成後(第三四半期末)<sup>52</sup>に取られているので、工期と工費の両面から建設協力会の判断で当面の施工対象を選定し、範囲を限定したものと推測される。

ノグチ原案完成後間もない段階での施工範囲の限定について、建築協力会とイサム・ノグチとの間でのやり取りを示す史料は見つかっていないが、1966年4月の来日時にはノグチも承知したものと考えられる。前章で見た4月29日付のノグチ作成のラフスケッチで描かれた対象が限定されていたことはその表れといえよう。以上の計画変更申請は1966年1月11日付で承認された。

当初の工事期限である年度末を迎えると、建設協力会は1966年3月22日付で「(仮)完了報告書」を日本船舶振興会に提出し、「41年3月末現在、全体の工程のうち約60%を消化し、完工予定の4月末には、ほぼ計画どおり終了する見込み」と報告した<sup>53</sup>。この報告書を12月の変更申請と比べると、完成予定の施工対象(「物件の取得状況」)から「岩山」が早くも抜け落ちている。岩山と砂場の工事中止は前章で見たようにノグチの4月29日書簡を受けて6月に浅田、大谷らと建設協力会事務局によって正式決定されたが、3月時点でこれらの施工が難航していたことがわかる。「(仮)完了報告書」で今一つ注目されるのが、「事業の実施経過」の記述である。そこでは特に金子からノグチへのデザイナー変更と設計経過が次のようにまとめられている。

「当初、この遊園造成については、金子九郎氏(児童遊園協会)に意見を求め、設計内容を種々検討していましたが、計画の具体化をみる段階で、彫刻家イサム・ノグチ氏に基本設計を依頼し、実施設計は、株式会社設計連合(〔住所等略])に依頼することに変更されました。設計作業は帰米したイサム・ノグチ氏との連絡が十分にとれず、このため予定時期は大幅にずれ、漸く40年秋になって来日を見、直ちに具体化の作業を進めたわけであります。この間、敷地内に他の施設が急遽建設されることになるなどの事情もからみ、基本設計は当初の計画案を大幅に変更して第3/4半期に入って漸くまとめを見ました。(以下略)」<sup>54</sup>〔下線論者〕

児童遊園の当初の「計画」、即ち補助金申請時の大砂場と徒渉池を中心とする案は金子九郎の指導によるものであった。その「具体化」、つまり設計作業に着手しようとする段階でデザイナーを金子からイサム・ノグチ(基本設計)と設計連合(大谷幸夫チーム、実施設計)に「変更」した。しかし予定は大幅に遅れ、ノグチ来日後の昭和40年秋(正確には1966年9月頃)にようやく「具体化」に着手したという。つまり小論で見えてきたように、ノグチは金子に代わって指名されたものの、「具体化」すなわち「基本設計」に着手したのは1965年9月であった。「他の施設」とは児童館であり、金子の「計画案」にはなかったのをそれを「大幅に変更して」、即ちノグチは最初から児童館を取り込んで、「基本設計」を行なったのである。これも小論の見方を裏付けている。「この間」とは従って「計画の具体化をみる段階」を指し、そこで児童館と児童遊園の統合問題が浮上し、金子からノグ

52 「児童遊園整備事業(仮)完了報告書」こどもの国協第13号、昭和41年3月20日、別紙1「事業の実施経過」NAMA 17-4-7

53 Ibid. 「完了報告書」本文

54 Ibid. 別紙1「事業の実施経過」

チと設計連合に設計者変更となった、という解釈が成立する<sup>55</sup>。

1966年4月のノグチ来日を経て、5月2日に改めて工期を7月31日まで延長したい旨の申請が行われている。理由は以下の通り。

「3月末遊園の仕上状況および造成指導のため来日した基本設計者イサム・ノグチ氏から、実施内容について、新たな注文が出されました。このため、土地の若干の形状変更などが行われることになり、4月末の事業完了は工程上困難となっております。」<sup>56</sup>

土地の形状変更とは、前章で見た砂場周辺の排水対策に関係するものと思われる。この申請は5月6日付で承認された。その後工事は順調に進み、1966年8月、「昭和40年度『こどもの国児童遊園施設整備』事業の完了報告書」が提出された。完了の日付は「昭和41年7月31日」である。「物件の取得状況」すなわち完成した施設は、「遊園敷地造成9,000㎡アンツーカー、芝張、野外小集会場〔野外劇場〕、砂場、池〔池2〕、小川、擁壁、切通、ほか雑」とあり、「岩山」は含まれなかった<sup>57</sup>。

この中に「砂場」が含まれているが、7月末の段階ではまだ施工されていなかった。正三角形から半円形へと変化した砂場は、先述の通り4月末のノグチの書簡を受けた浅田らの判断で施工見合わせとなっていた。実際、竣工後間もない当該現場写真に「砂場」に相当する施設は写っていない(fig.24)。実現しなかった砂場敷地付近に新たに梅の花を模ったような「花形砂場」が施工・設置されたのは1966年秋から冬にかけてであったが<sup>58</sup>、事業としては「昭和40年度児童遊園施設整備事業」の枠内で実施されたことになる。美智子妃殿下の発言に由来する「砂場」がいかに重要視されていたかをうかがい知ることが出来る。



fig.24 A地区児童遊園北西部。左手前から児童館敷地のアンツーカー、切通の丘、奥に草に覆われた岩山予定地。アンツーカー右手の平地は砂場予定地。右端の人物はイサム・ノグチ。画面手前は小川。1966年9月頃。ノグチ・アーカイヴ蔵 inv.12061 Unbuild northwestern part of the playground site, Zone A of the Kodomo No Kuni, ca. September, 1966. Left: En-Tout-Cas of Children's House ground, hill with Pathway, hill of "Iwayama" covered with grass. Foreground: Finished Small River, Site for Sand Pool. Right: Isamu Noguchi standing backwards. Photographer unknown. The Isamu Noguchi Archive, inv. 12061. Courtesy of the Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York

55 報告書は、児童館と児童遊園の統合計画とデザイナー変更との関係に言及することを避けるために、変更の理由を示さず、統合の時期を「この間」という言い方でぼかしたと思われる。

56 こどもの国協第26号、昭和41年4月(5月2日提出)、NAMA 17-4-7

57 註12参照

58 『こどもの国ニュース』第14号、1967年1月10日発行、p.2では、完成した一般公開前の「梅の花の形をした砂場」で子供たちが遊ぶ写真が掲載されている。



## 2-2)「こどもの国第2遊園施設整備事業」(昭和42年度)

こうしてA地区児童遊園施設整備事業は児童館を中心とする地区の整備に留まり、アプローチ部、野外劇場、花形砂場、切通、池2、小川が完成した。これらを除く、花形砂場より北側の地区、およびスケートリンク西側の亀ノ子砂場は実施対象とはならなかった。その事情はイサム・ノグチも承知していたとみられるが、1966年9月のノグチ再来日を経て、建設協力会はこれら未着手部分の実施を期して、同年10月28日付で日本船舶振興会に対し、「昭和42年度補助金交付申請書」を提出し、「こどもの国第2遊園施設整備事業」の補助金1,500万円を申請した。「補助を必要とする理由」を「『こどもの国』内A地区に年少児童のための遊園施設整備のため。」とし、次のように記されている。

「さきに貴会の補助金により完成したA地区児童遊園は、イサム・ノグチ氏の優れた設計とともに光彩を放ち、土地環境の原型を一辺して、実用と感覚を高度に調和した点で好評を博していますが、この奥地に隣接した今回申請の第2遊園建設によって、全体的な活用度を一層高め、皇太子妃殿下のご希望にも十分お答えいたしたいと存じます。」<sup>59</sup>

添付された「事業計画」によれば、「42年秋の使用開始を目標」としながらも、工期は昭和42年4月1日から43年3月31日までとされている。事業費総額は申請通り1,500万円で全額補助金である。事業計画の内容は次の通り。

- 「(1)亀ノ子砂場の造成 1カ所広さ25㎡×10区画を連結する深さ40cm計250㎡
- (2)芝山スベリ台の造成 丘陵の斜面を利用して、芝山とし、砂場つきのスベリ台1基および、変形スベリ台三を併設する。
- (3)切通し、崖擁壁工事 崩落危険箇所を二カ所、関知石積で擁壁とする。340㎡
- (4)ブランコの設置 イサム・ノグチ氏考案の特注ブランコ二基を据付ける。
- (5)芝生帯 敷地全域9,000㎡を芝張りする。
- (6)その他 遊園としてのジャングルジム〔ジャングルジムB〕、築山、石けり台、小川、橋などを付設する。」<sup>60</sup>

また、「実施の方法」として「基本設計はイサム・ノグチ氏によるもので、実施設計および監理は株式会社設計連合に依頼する予定」とある。添付資料の《こどもの国A地区第2児童遊園配置図》青焼は、大谷研究室資料群の同図面(1966年10月20日)から起こしたもので、図中の東側の小川とジャングルジムA敷地、切通の丘に沿う小川、花形砂場は昭和40年度事業で完成していた施設であるため緑色の縁取りで区別されている。また、大谷幸夫の印のある「A地区第2児童遊園目論見書」(設計連合 1966年10月1日付)が添付されており、《第2児童遊園配置図》に記されたすべての施工対象・遊具施設について工費の明細が示されており、総額は申請補助

59 こどもの国協第60号、昭和41年10月28日。NAMA 17-4-7

60 こどもの国協第5号、昭和42年4月11日。NAMA 17-4-7

金額一杯に収まっている。昭和40年度児童館、児童遊園施設整備事業の時と同じく、今回もかなり早い段階で事前の内定を受けた上での申請であったと考えられる。

前章でみたようにこの「第2遊園」案のデザインは40年度事業完了後の1966年9月に来日したノグチと大谷らとの打合せによって合意されたと考えられる。亀ノ子砂場、ブランコ、ジャングルジムBが復活したとはいえ、児童遊園原案からの大幅な計画縮小の感は否めない。補助金申請は承認され、一部の遊具は詳細図ができていたが、それにも拘わらず着工には至らなかった。1967年4月以降の進捗報告をみてみよう。第一四半期の進捗報告書(1967年7月1日付)では：

「6月に入り、児童遊園の基本設計を依頼したイサム・ノグチ氏が再び来日し、こどもの国内予定地の現状を調べた上、施工の内容について、期末現在検討を行っております。(中略)イサム氏およびこどもの国建設設計集団メンバーの中で当初案にかなり変更をしたい意向もあり、現在、当会と意見調整を行っている段階で、結論が出次第、7月中旬に予定されている理事会にはかり、決定をまって施工する予定であります。」<sup>61</sup>〔下線論者〕

とある。ノグチ本人に加え、設計連合ではなく「設計集団メンバー」にデザイン変更の意向があるという点が注目されるが、メンバーが誰であるか、また変更希望の内容を記す史料はみつかっていない。続く第二四半期進捗報告書(1967年10月1日付)では、「基本設計者イサム・ノグチ氏および設計集団メンバーとの意見調整が難航し、実施が遅れておりましたが、さる9月25日の当会理事会で漸く実施内容の原則承認を得ましたので、現在、細目設計を急いで」〔下線論者〕いるとし、「図面化の出来次第、別途に計画変更の手続きをお願いする予定」とある<sup>62</sup>。前報告と合わせて考えると、ノグチと設計集団メンバーが第2児童遊園案のデザイン変更を希望し、これに対して建設協力会が異なる立場をとっていたと解釈できる。そうであれば「設計集団メンバー」とは大谷幸夫であろう<sup>63</sup>。「第2遊園施設」の計画変更申請書は1967年11月16日付で提出された。「変更の理由」は次のように記されている。

「こどもの国第二遊園の造成については、当初、<sup>ママ</sup>亀の子砂場と芝生帯を中心に、若干の遊具を配して造成する予定でしたが、同遊園設計者のイサム・ノグチ氏の意向や、こどもの国運営面からの要望も新たにだされたこと、また、かねてから大きな砂場をという皇太子妃のご意向なども勘案した結果、9月25日開催の当会理事会で、イサム氏の意向も尊重し、広さ1,000平方メートル余りの大砂場を造成するとの結論となりました。

その位置はA地区児童遊園、さらに41年度事業で造成した徒渉池の隣接するところで、形状もそのま

61 こどもの国協第17号、昭和42年7月1日。NAMA 17-4-7。パスポートの記録によれば、ノグチは67年6月8日羽田入国、7月6日に出国している。ノグチ・アーカイブ蔵、inv. MS\_BIO\_010\_004\_original\_1

62 こどもの国協第21号、昭和42年10月1日。NAMA 17-4-7

63 詳細記録を期待して1967年9月25日の建設協力会理事会議事録の閲覧を社会福祉法人こどもの国協会に申請した。理事会議事録は存在が確認されたが原則非公開であるため、特別に内容をお知らせ頂いた。それによれば、第2遊園について報告があったとの記述のみで内容は略されていたとのことである。秋保尚志氏(こどもの国協会常務理事)発論者宛電子メール、2024年11月19日付

まで、深さ40センチの大砂場とし、4月から11月の間は主に幼児向けに開放し、厳冬期にはスケート場として活用する方針で、完成したあとは、オールシーズンの利用が期待できることになります。』<sup>64</sup>

申請時の花形砂場より北側の遊園造成とノグチ原案にあった亀ノ子砂場を完全に放棄し、代わりに既にある児童館南隣地の「徒渉池」、即ちノグチのデザインによるスケートリンクの隣に、同じ形状の大砂場兼スケートリンクを造成するという方針に転換されたのである。同変更申請では工事期限が1967年11月20日から1968年6月30日に延期され、補助金金額は当初の申請時と同額とされた。

この理由説明では「イサム氏の意向も尊重し」とあるが、それはどのような意向だったのか。二つめのスケートリンク(大砂場)を造ること自体は建設協力会の責任で決定されたと読むべきであろう。それによってA地区児童遊園の未着手部分がそのまま残されることの方に、ノグチの関心はあったのではないだろうか。これまで確認できた唯一の関連史料として、浅田孝がノグチに宛てた1967年12月8日付書簡中に次のような記述がある。

「既にご承知の通り、現場の建設スケジュールは大変緩慢です。しかし、衣奈氏も理事たちも、あなたの同意や指示なくオリジナルのアイデアやデザインを変更しないことについて私たちに完全に同意しています。

スケートリンク拡張のデザインが完成したら、あなたにお送りしてご意見を頂きたいです。』<sup>65</sup>(論者訳)

この書簡の日付は11月16日に変更申請が出されて間もない時期である。この間、イサム・ノグチは10月12日に来日し、11月23日まで滞在した<sup>66</sup>。浅田はノグチ帰国後ほどなくこの書簡を出した。「オリジナルのアイデアやデザイン」をノグチの許可なく変更しないと強調しているが、その対象は大砂場兼スケートリンクではなからう。これと同様の文言が、ノグチ原案作成中の1965年11月にノグチと建設協力会の間で締結された「児童館・児童遊園の基本設計」の委託契約書第4条にも記されていた<sup>67</sup>。論者は、「オリジナルのアイデアやデザイン」の対象がA地区児童遊園の施工されなかった部分を指していると解釈したい。その建設を棚上げして敷地を更地のまま残し、例えば「それらは差し当たり中止するが、いつか条件が整えばあなたのデザインで施工する」とノグチに説明することで、浅田及び建設協力会は事態の収拾を図り、ノグチもこれに同意したのではないかと推測する。浅田が殊更に衣奈や理事たちの同意を強調し、スケートリンク図面のチェック依頼を書き添えていることは、そのような背景を暗示していると思われる。

大砂場兼スケートリンクと芝生帯からなる「第2遊園」への変更申請は11月20日付で承認された<sup>68</sup>。急ピッチで工事が行われた結果、大砂場は1967年12月28日に「主体工事」を終わり、翌1月1日、ふたつ目のスケートリ

64 こどもの国協第22号、昭和42年11月16日。NAMA 17-4-7

65 ノグチ・アーカイヴ蔵 MS\_PROJ\_041\_019\_original\_1

66 イサム・ノグチのパスポート中の羽田出入国スタンプ。ノグチ・アーカイヴ蔵 inv. MS\_BIO\_010\_004\_orignal\_1

67 小論「上」p.30、註15参照

68 日船振第271号、昭和42年11月20日。NAMA 17-4-7



ンクとしてオープンした。新リンクは2月末日に閉鎖し、砂場への改装作業が行われ、5月のゴールデンウィークに「砂場」として開放された。施設整備事業の完了日は1968年6月10日である。完了報告書には、「この新設によって、隣接する徒渉池(ジャブジャブ池)[最初のスケートリンクを指す]とともに、こどもの国A地区は四季を問わずに、こどもたちに利用される地域となり、児童館、児童遊園を含めて、一段と充実をみることになりました」と記されている<sup>69</sup>。この「第2遊園」の完成をもってA地区児童遊園の施設整備事業は事実上終了した。

### 3. 三位一体デザインの頓挫と大谷研究室資料群の意義

大砂場兼スケートリンクは、同じ輪郭と面積をもつ既存のスケートリンクの舌状形直線部分の東側に、通路を挟んで既存リンクと点対称に配置された(fig.25)。原案の全体配置を著しく損なう同型近接反復が、the space between 間合いの空間<sup>70</sup>を重視するイサム・ノグチの発案によるとは考え難い。こうしてA地区にできた二つのスケートリンクは夏に「徒渉池」と「大砂場」となり、A地区児童遊園の昭和40年度補助金申請当初の計画が結果的に実現することになった。

実施されなかった第2遊園配置図の元になった配置図原図2にはノグチの署名があるが、確認はしたものの、意に沿わない部分が多かったのではなかろうか。

1965年末に完成した児童館・A地区児童遊園の石膏全体模型の要素の内、多少の変更を含みつつもほ

ぼ原案に沿って完成に至ったのは、スケートリンク、アプローチ部(擁壁、前庭、芝生帯、築山、公衆便所と通路、門)、児童館(丸山、池3改め勾玉池、プラットフォーム、水飲場、足洗場含む)、切通(入口小橋含む。但し擁壁は施工されず)、切通の丘外周の小川と児童館西側の崖(但し擁壁は施工されず)、野外劇場(野外小集会場)、池2(池1と統合)、敷地東側の小川、ジャングルジムAの敷地輪郭のみであった。1966年7月31日(児童遊園事業)および同8月9日(児童館事業)の竣工時の姿に花形砂場を加えた状態が事実上最終形となったのである。岩山は斜面造成までで工事中止となり、砂場と小川の北西側の敷地は「緑の広場」のまま残された(fig.24)。元は独立していた3つの施設、スケートリンク、児童館、児童遊園を三位一体のランドスケープ・デザインとしたノグチ原案のコンセプトは、こうして完成することなく終わった。



fig.25 建設中のこどもの国第2児童遊園(大砂場：手前)と徒渉池(奥)。1968年、写真、文化庁国立近現代建築資料館蔵 NAMA 17-4-7-48

Construction of Large Sand Pool as the second Playground beside the Skating Rink designed by Isamu Noguchi, 1968. From document photos of the second Playground construction of the Kodomo No Kuni. National Archives of Modern Architecture, Agency for Cultural Affairs, inv. 17-4-7-48

69 こどもの国協第11号、昭和43年6月18日。NAMA 17-4-7

70 Isamu Noguchi, "Meanings in Modern Sculpture," Dinane Apostolos-Cappanda and Bruce Altshuler (ed.), *Isamu Noguchi Essays and Conversations*, New York, 1994, p.33

イサム・ノグチは強い意欲をもって取り組んだが<sup>71</sup>、後年「こどもの国」について語ることは殆どなかったようである。彼が新たに発明した遊具《オクテトラ》を1969年にこどもの国に寄贈したことは小論「上」で述べた。3本のコンクリート角材を三角形に並べて台座とし、その上に4つのオクテトラ・ユニットをピラミッド型に組み合わせたセットが、児童館を背景にして置かれている寄贈当時の様子を、大谷研究室の記録写真のひとつから確認できる(fig.26)。その位置は敷地東側を南北に伸びる小川に近く、児童遊園原案及び第2児童遊園配置図でジャングルジムBが予定されていた場所と思われる。数々のプレイグラウンドをデザインし提案してきたノグチにとって、未完とはいえ初めて実施に至った「こどもの国」のプレイグラウンドがいかに大切なものであったかを窺い知ることがでる。

大谷幸夫は後年の回想で次のように述べている。

「遊園地は自然を舞台にしてデザインされたものである。

それゆえ風雨や植物たちの生命力など自然の外力による変質変形に十分耐える技術的措置を必要とするが、それを保証するに十分な事業費や維持管理の体制が整わなかったた

め、直ちにこの〔ノグチの〕デザインを全面的に実現することができなかった。また自然との対応で未解決の問題も残っていた。(中略)イサムさんは丘陵地や谷あいには潜在している形象や空間は見事に抽出されたが、樹木たちから何を抽出され、何を問いかけようとされていたのか、私には十分理解することができなかった。丘陵台地が占める広い地区について、わたしは適切な措置をイサムさんに提示することができなかったということが大変心残りである。』<sup>72</sup>

大谷のこの言葉は、敷地排水の「未解決の問題」のほかにイサム・ノグチのランドスケープ・デザインの本質的な特徴の一つを浮かび上がらせている。原案の石膏全体模型は、大地を覆う樹木植物類を一切表現していない。裸の大地にどのような相貌を与えるかが彫刻家の関心事であり、樹林や草地への配慮は模型からは読み取られない。この傾向は1933年作《プレイマウンテン》以来、《地形〔コンタ〕に沿ったプレイグラウンド》(1942年)、《国連本部のためのプレイグラウンド》(1952年)、《リヴァーサイド＝ドライブ・プレイグラウンド》



fig.26 児童館とオクテトラ。撮影：大谷研究室 1969年頃、大谷研究室旧蔵「こどもの国児童館・A地区児童遊園」資料群  
〈Octetra〉 and Children's House in Zone A of the Kodomo No Kuni, ca.1969. Photo: Otani Associates. YMA Otani Associates Kodomo No Kuni Collection.

71 1965年から都合2年にわたり3施設のデザインを手掛けたノグチへの設計料支払いは確認の限り同年11月の契約書に基づく昭和40年度児童遊園施設整備事業費からの基本設計料120万円1回のみである。ノグチは1966年9月から翌年10月までに3回来日して現場を訪れているが、建設協力会から旅費は支給されなかったようである。浅田孝はそれに先立つ1966年6月17日付ノグチ宛書簡で、同年4月分の旅費・滞在費は建設予算から支弁できたが、次回来日以降はノグチ自身で用立ててほしいと依頼している。こどもの国協第35号別紙1「41年第1/4半期における収支状況」NAMA 17-4-7/ノグチ・アーカイヴ蔵 inv. MS\_PROJ\_041\_017\_original\_1

72 大谷「イサム・ノグチさんのこと」p.138

(1961-1965年)の模型でも同じである。ボニー・リッチラックは「こどもの国」児童遊園について、「遊びの様々な活動をその場所の地形と一体化させる、ノグチのプレイグラウンドのデザイン・ビジョンを最もよく実現している」と評価する一方、彼のランドスケープ・デザインには「奇妙なまでに無自然的」な傾向があるとも指摘している<sup>73</sup>。

イサム・ノグチと大谷幸夫が共同した「こどもの国」児童館・A地区児童遊園計画は、自然豊かな丘陵と谷間からなる国立児童厚生施設の一定範囲をひとりの芸術家に委ね、そこに三つの施設を統合するランドスケープ・デザインを成立させようとした画期的なプロジェクトであった。公的施設の事業枠を超えた有機的な一体性を実現することがイサム・ノグチに期待されたが、敷地の自然への対応、即ち排水と植物の維持管理の問題や、寄付金による施設整備事業の枠組みにより、プロジェクトは未完のまま思わぬ形で終焉を迎えた。浅田は運営側の勝手なデザイン変更をしないと約束することで、少なくともこのゾーンの美的統一性、作品としての人格権を守ろうとしたといえよう。第2遊園竣工後、未着手部分の工事再開の機会はなく、やがて彫刻家と建築家の手掛けた施設の大部分は1985年に取り壊され、原案とは無関係の様々な施設が建てられた。児童館建物や野外劇場などの建造物だけでなく、ランドスケープ・デザインとしての一体性、美的統一性を実現しようとした1965年当時のイサム・ノグチ、大谷幸夫、そして浅田孝をはじめ建設協力会が共有したビジョンが失われたことが惜しまれてならない。大谷は先の回想を次のように締めくくっている。

「しかし、台地を覆う広大な樹林への対応を曖昧にしたまま、無理して似て非なるものをこの世に晒すより、今は純白のしみ一つないこの石膏のモデルをイサムさんの作品として残し、何時かしっかりとした方策と体制のもとで実現される機会を待つことの方が、イサムさんの無垢の心を傷つけないですむのだ、と思っている。」<sup>74</sup>

「似て非なるもの」とは1章でみた配置図原図2の最終変更部分、即ち《第2児童遊園配置図》のデザインに他なるまい。それがノグチにとって不本意な原案変更だったことを大谷は十二分に承知した上で、当事者だけが知る前後の事情を飲み込んで、敢えてそれが実施されなかったことにほっとしているかのようである。ではなぜ、似て非なる《第2児童遊園配置図》が作られ、実施されようとしたのか？今回参照できた史料から直接その説明を得ることはできない。建設協力会文書に照らし大谷の回想を少し踏み込んで解釈して推測するなら、建設協力会は1965年末の最初のプラン縮小を翌年4月にノグチに説明した際、1967年度の工事継続案を示すために、既に日本船舶振興会の補助金内定に向けて動いていたのではないだろうか。その一方で、着工後顕在化した排水問題は容易に解決できず、大谷の指摘する樹林管理の問題も重なり、敷地北西部着工の見通しが立たなかった。そうした中、補助金内定を得た建設協力会は正式申請を出さざるを得ず、設計サイドはノグチの同意を得て暫定的な「第2遊園」プランを提出した後、ノグチと共に実施期間中の設計変更を提案したものの認められず、建設協力会は「大砂場兼スケートリンク」をもって計画を差し替えて実施し、児童遊園北西部敷地を更地のまま残すことで将来の着工への含みをのこした、ということではないだろうか。

73 ボニー・リッチラック「公園とプレイグラウンドをめぐって揺れ動く意志：イサム・ノグチのランドスケープ・デザイン」『イサム・ノグチ 世界とつながる彫刻展』カタログ、2006年、横浜美術館他、p.10

74 大谷「イサム・ノグチさんのこと」p.138



大谷研究室資料群の石膏全体模型と図面類はいつか実現されるべきビジョンの原典、三位一体のランドスケープ・デザインの作品として、大谷幸夫から横浜美術館に託されたと論者には思われる。

幸いにも1985年の取り壊しを免れ今日まで残されたのは、公衆便所と通路擁壁、門、丸山、旧児童館西の崖、切通とその入り口の小橋、北東部の小川の一部とジャングルジムA敷地である。切通以外は今もアクセス可能で、丸山に登ることもできるが、いずれも老朽化が著しく、多くは樹木や雑草に覆われ、古城の遺構をみるような印象さえ受ける。敷地に後年建てられた施設にも既に古さが見える。今ここで児童館・児童遊園の復活を唱えるには現実はあまりにも厳しい。とはいえ、アロイス・リーグルの『現代の文化財尊重』の言葉を借りて言えば、「古さの価値」(Alterswert)を信奉して遺構がこのまま時間とともに朽ち果てる運命を観照するのではなく、むしろその「歴史的価値」(historischer Wert)をさらに解明し、認識しながら、遺構にわずかに残る「現在の価値」(Gegenwartswert)に着目して、これからも生き続ける「こどもの国」の、遊園施設としての「使用の価値」(Gebrauchswert)と「芸術価値」(Kunstwert)を共に尊重する方途を見出したいものである<sup>75</sup>。

謝辞：小論執筆にあたり、次の方々並びに機関に多大なご協力とお力添えいただきました。心よりお礼申し上げます。

故大谷幸夫氏、山本敬則氏、藤田皓一氏、秋保尚志氏、松崎晃氏、室田恵美氏、大谷研究室、社会福祉法人こどもの国協会、文化庁国立近現代建築資料館、The Isamu Noguchi Archive, The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York.

75 Alois Riegl, *Der moderne Denkmalkultus, Sein Wesen und seine Entstehung*, K.K.Zentral-Kommission für Kunst- und historische Denkmale, Wien und Leipzig, W. Braumüller, 1903. この書は文化財保護の領域で近年世界的に注目されている。邦訳『現代の記念物崇拜：その特質と起源』(尾関幸訳、中央公論美術出版、2007年)／「試訳：アロイス・リーグル著『近代の記念碑崇拜－その本質と成立過程－』1903年」(井川博文、池亀彩、太田敬二訳、『史標』Nos.29、p.21-34、30、p.53-62、31、p.33-46、1997-1998年)

---

---

# How Yokohama Museum of Art Became the Hosting Institution of Yokohama Triennale: An Overview of Its Process

Hoashi Aki

(Manager, International Division & Curatorial Department, Yokohama Museum of Art)

The Yokohama Triennale, inaugurated in 2001, experienced a drastic institutional transition between its third (2008) and fourth (2011) editions. Its founding body, The Japan Foundation, a cultural institution affiliated with the Ministry of Foreign Affairs, was forced to terminate its engagement as the organizing body due to the harsh budget screening process implemented by the newly appointed government political party in 2009.

As a result of this transition, the organizing body of the Triennale was transferred to its host, City of Yokohama, and its largest art institution, Yokohama Museum of Art. It also secured new national funding from the Agency for Cultural Affairs, having lost its former funder, Ministry of Foreign Affairs.

As this transition was made in haste and, therefore, recorded only in fragmented forms of internal papers and symposium reports, there is a lack of institutional memory of the process and the outcomes of the evolution.

This paper aims to draw lines between the fragments and make apparent the process of how the Yokohama Museum of Art became the hosting institution of the Yokohama Triennale.

---

# Isamu Noguchi and Sachio Otani's Playground and Children's House at Kodomo No Kuni: Alterations to the the Original Design and the Unfinished Landscape Design Combining Three Facilities

Nakamura Naoaki

(Senior Curator, Yokohama Museum of Art)

The 157 drawings and the plaster model for the Children's House and Playground at Kodomo No Kuni, created by Isamu Noguchi and Otani Sachio and donated by Otani Associates to the Yokohama Museum of Art (YMA), enable us to trace the previously unknown history of Noguchi's first realized playground. As discussed in the author's previous essay in the last issue of the bulletin, the original design was developed in late 1965 and materialized in the plaster model, which includes a skating rink, Children's House, and playground within a landscape design. This paper, in Chapter 1, describes the alterations made to the original design by Noguchi and Otani's team in 1966, based on drawings in the YMA and correspondence between Noguchi and Takashi Asada, the director of the construction team for Kodomo No Kuni. Chapter 2 traces the history of the construction project from the initial planning in 1962 until its completion in 1968, based on documents from the Construction Committee of Kodomo No Kuni, primarily held in The National Archive of Modern Architecture, Tokyo.

The results are summarized as follows.

The Construction Committee expected Noguchi, in collaboration with Otani's team, not only to design the playground and its equipment but also to integrate three originally separate facilities — the skating rink, Children's House, and playground — into an artistically cohesive landscape design. In December 1965, immediately after the completion of the design, the Committee had to reduce the number of playground elements due to cost estimates for construction. Although Noguchi provided nine detailed drawings for play structures, only three (<Sand Pool>, <Amphitheater>, and <Ponds, Ponticulus, etc.>) were selected. Construction began at the end of 1965. When Noguchi visited the construction site in April 1966, he realized there was a drain problem in the northern part of the playground. As a result, he altered the sand pool's triangular shape to a larger and semicircular one and suggested grading the site and adding small rivers. He also proposed modifications to the platform-seats of Otani's Children's House.

The Construction Committee decided to postpone construction of the northern section, including the semicircular sand pool, and instead proceeded with the construction of the entrance zone, amphitheater, Children's House, and surrounding landscape. These elements were completed in July-August 1966. In September 1966, Otani's team produced a revised but less ambitious site plan for the northern section, which received Noguchi's approval. The Committee secured funding for its construction as "the second playground," which was to be built in 1967. Meanwhile, the semicircular sand pool was redesigned as a much smaller <Flower Form Sand Pool> and completed in late 1966 on the northern side of the Children's House.

In June 1967, Noguchi and Otani insisted on redesigning the second playground. However, the Committee did not approve the plan and instead substituted it with a second skating rink, which would transform into a large sand pool in summer, exactly replicating the form of the first skating rink designed by Noguchi and completed in 1965. The second skating rink, or large sand pool, was completed in May 1968, marking the conclusion of the playground construction project. The northern section of Noguchi's



original design for the playground was left unbuilt.

In 1996, Otani wrote that the problems caused by the natural environment remained unresolved, and that the project had neither the means nor the plan to manage the surrounding forested hill. He concluded his reflections with the statement that he would prefer to preserve the plaster model as Noguchi's original work for future construction, under more favorable circumstances, rather than building a similar but different playground. Otani must have been suggesting that the site plan for the second playground was not Noguchi's.

Among the play equipment depicted in the plaster model, the following elements were realized with more or less modification in July 1966 (unless otherwise specified): the skating rink (January 1965), entrance area (forecourt with retaining walls, toilets, gate, small mound), amphitheater, Children's House (August 1966, with Maruyama mound, platform-seats, wading pond, drinking fountain, and foot washings), the formation and pathway of the hill on the west side of the Children's House, pond and small river along the east edge of the site, waterdrop-form site for the unrealized Jungle Gym A, and the <Flower Form Sand Pool> (December 1966).

横浜美術館研究紀要 第26号

令和7年3月31日発行

編集：横浜美術館学芸グループ

発行：横浜美術館  
(公益財団法人 横浜市芸術文化振興財団)  
〒220-0012 横浜西区みなとみらい3-4-1

印刷・製本：株式会社 野毛印刷社

©横浜美術館 2025

Bulletin of Yokohama Museum of Art No.26

Date of Issue : March 31, 2025

Edited by Curatorial Department, Yokohama Museum of Art

Published by Yokohama Museum of Art (Yokohama Arts Foundation)  
3-4-1, Minatomirai, Nishi-ku, Yokohama 220-0012 Japan

Printed by NOGE Printing Corp.

©Yokohama Museum of Art 2025